
剣と弾丸の歌

庵,

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣と弾丸の歌

【Nコード】

N6300B

【作者名】

庵、

【あらすじ】

アフリカのジャングルで戦っていたはずの四人の傭兵はガーラビヤという名の大陸にいた。そこは地球上ではない大陸。彼らは神との契約により、剣と魔法が支配するこの地へと送り込まれたのだ。騎士、魔法使い、そして奇異な生き物達が闊歩するこの異世界。そこで自分達の役割を模索する彼らの前で、魔王と彼の率いる軍隊は侵略と言つ名の禍々しき剣を振り上げ、まさに打ち下ろさんとしていた。

第1章第1話 契約の行われる顛末（前書き）

舞台はファンタジーの世界ですが、銃が登場するなど純粋なファンタジーからは少し異色な作品となっています。本作品を読まれた方は気が向いたらでいいので、お気軽に作品の感想・評価をよろしくお願いします。

第1章第1話 契約の行われる顛末

気がつけばデイビスは赤い絨毯の上に横たわっていた。絨毯の柔らかな繊維が彼の頬を撫でている。重たい体を起こし立ち上がる。そこは石作りの大きな部屋で、城か砦の中を思わせた。大きな部屋を二つに分断するように真つ赤な絨毯が渡され、その両脇に整然と並んで太い円柱が重厚な天井を支えている。赤い絨毯の先に玉座があり、そこに一人の男が座っているのを見つけた。デイビスはその男の方へと引き寄せられるように近づいて行く。

地味ではあるものの端麗な装飾が施され、堅牢でとても重そうな玉座の上にその男は座っていた。男は玉座に体を預けながら肘掛の上に右肘をのせ、その腕の先に彼の整った鋭角の顎を乗せている。彼は異様に大きな体をしており、輝くほど真つ白な布が左肩から体全体へとその大きな体躯を覆い、腰の辺りで締められていた。少し広い額、高く突き出た鼻、長く力強い瞳、それでいて顔全体の均整は少しも失われていない。

「よくぞまいられた」

重いバスの声は威厳に満ちていて、不思議なほど静寂な部屋全体へと響き渡る。その不思議な響きのためかデイビスはその声が目の前の男から発せられているのだと分かるのに僅かな時間を要した。ようやくはつきりしてきた頭で、最初に浮かんだ言葉をそのまま口にする。

「ここは？ …… あなたは……」

ここまで声にしたところで思考が完全に近い明確さを取り戻した。

「俺は戦ってたんだ。ジャングルで戦ってたんだ。仲間……」

敵は？ ……」

デイビスは目の前の男を見上げる。

「あんたは……敵なのか？」

やがてデイビスは記憶の系の最端部へと辿り着いた。

「……俺は……死んだんだ……そう、死んだんだ」

急に暗い波が彼の心に押し寄せてきて、その黒く冷たい海水でもって彼の心をすっかり浸していく。彼はほとんど倒れそうになってふらふらとよろめいた。そう、確かに死んだ。彼はもう一度心の中で呟いた。その受け入れがたい事実を自分に言い聞かせるように。また、もしそこに疑いの余地でもあるならば、そこに絶望からのがれる糸口を探そうとして。だが彼の模索する手は暗闇の中で空を切るだけで何をも捕らえることができなかった。

あの時、銃弾が胸を貫いた。デイビスが求める、求めない関わらずラストのシーンが沸々と沸いてくる。伏せてM-16（ライフルの名称）の照準をまだ若い敵に合わせていた。距離にして200ヤード（約183メートル）。引き金に触れていた人差し指に力が加わる。あと1cmでも動かせばまだ幼ささえ残るその若者に、死を宣告する弾丸が一直線に飛んで行く、そのときだった。

敵の誰かが撃ち放った弾丸が先にデイビスの胸を貫いた。弾丸を受けたショックでデイビスの引き金を抑えていた人差し指は筋肉の収縮を受けて萎縮し、デイビスのライフルを発砲させた。だがその弾丸は、暗いジャングルで頭上高い木の葉を打ち落としただけにすぎなかった。

第1章第1話 契約の行われる顛末（後書き）

拙い文章で申し訳ありませんが、気軽にでもかまいませんので感想・評価をよろしくお願いします。評価は酷評でもかまいません。

第1章第2話 契約の行われる顛末

デビスの悲観の模索を打ち切れとばかりに、はたまた最後のとどめを打ち下すように男の声が響く。

「真に残念ながら、君は死んだんだよ」

うなだれていた彼はその言葉に一瞬びくつと体を引きつらせた後、正面に座る男の方に顔を向けた。こいつは誰なんだ？ と、思う。自分が死んだという事実と今の状況を把握できないということが彼を苛立たせた。

「私は神だ」

彼の心の疑問を見透かすように、男は言った。

「私は神だ。……だが、私は君（達）の神ではない——I・m n
o t y o u r G O D——」

”I・m n o t y o u r G O D”の”y o u r”がデビス自身のことを指すのか、それとも人類全ての人達を指すのか、判断しかねた。しかし自分を神と言う男は続けた。

「いくなれば遠い遠い星の神。名はハス」

こう言うとハスという神は一旦間を置く。目の前の若い人間がその言葉を飲み込むのを待つように。そして話を続ける。

「今君の魂は現世にも死の世界にも存在していない。君の魂はここ、私の作ったこの部屋、仮の空間にのみ存在している」

ここまで言うと再び間を開けた。この隙に乗じて、デビスが口を挟む。

「ちよつと、まってくれ。俺は……」

神ハスは目でその発言を制止する。

「まず君は私が述べる事実を受け入れるだけでよい」

押し黙ったことを承諾したとみなした様に、再び口を開く。

「君にここに来てもらったのは、私と契約してもらったためだ」

ハスは若い傭兵の瞳を覗き込むように真っ直ぐに見据えた。

「君の魂は死の世界へ向かう途上だった。もしそのままであれば君の魂はその死の世界で生前に犯した罪の清算をし、やがて消滅のときを迎える。」

”消滅”という言葉がデビスの胸に響く。

「ただし、私と契約することによって君はその宿命から逃れることができる。契約とは君に新しい生命を与える。その代わり君は私の統べる世界で余生を送り、我が民の敵と闘ってもらいたい。武器は君の望む物を与えよう」

神という男は促した。

「さあ、契約しようではないか」

この時、デビスの中で押し止められ、わだかまっていた疑問が一度に溢れ出した。溢れ出た量に軽い混乱を覚えながらも、なんとかこれを整理し口から吐き出した。

「仲間は？ 俺の仲間はどうかっただ？」

「君の仲間は君と道を共にしている。つまり、君の仲間は皆死に、ハインリッヒ、ゴードンはすでに私との契約を受け入れている。スタンは君との契約がすみ次第、ここにきてもらう」

ハインリッヒとゴードンが契約を受け入れたと！ 驚きが沸きあがる。

「俺はもう、あそこ……地球に戻ることはできないのか？」

「不可能だ」

彼の脳裏に家族の姿が浮かんた。少しの沈黙の後、再び質問が開始される。

「あんたの敵とはなんだ？ なぜ、あんた自身がそいつをやっつけちまわないんだ？」

「私の敵ではなく、私の民の敵だ。禍々しき者達を率いる魔王、これが我が民の敵。君たちには我が民と手を取ってこれを打ち破ってもらいたい。残念なことに私は過多に干渉することを戒められている。つまり、直接に私が手を下すことはできないのだ」

禍々しき者達を率いる魔王……それがデビスには到底、得たいの

知れないものに思われた。

「あんたがくれるという武器とはなんだ？ 剣じゃ俺は戦えないぜ。今まで銃でしか戦ったことがないからな。それに敵の数によっちゃ弾も沢山ないと、な」

「武器はいままで君が使っていたものでいいならば、それを与えよう。弾の数も考慮しよう」

ここまで質問を吐き出すと、デイスの中で沸き起こった質問も尽きたように思われた。

第1章第2話

契約の行われる顛末（後書き）

拙い文章で申し訳ありませんが、気軽にでもかまいませんので感想・評価をよろしくお願いします。評価は酷評でもかまいません。

第1章第3話 契約の行われる顛末

しかしながらまだ彼は、今ここで聞いておかなくてはならないことがまだ、無数にあるような気がしてならなかった。今、聞いておかなくては取り返しがつかなくなる。そんな疑問がまだまだあるように思われた。だが、この数十分のうちに知れた数々の衝撃のためか、またはこの空間、あるいは今の自分の存在というももの特殊性・異質感、そういったもののためか、思考が正常に機能していないようにも思われる。

傭兵という職業柄、契約は慎重におこなわなければならない。慎重さを怠ればそれは自分の死へと繋がる。たとえ、運良く死なないとしても、雇用費を払われなかったり、敵に囲まれたジャグルの中で見捨てられたりもする。それゆえ彼は契約にいつも慎重だった。

ただ今回ばかりはデイベイスも思考が打ち止めになったようだ。とうとう訪れた戦闘での死。通常では考えられない運命。いままでに聞いたことも考えたことさえもない、異質とも言うべき契約。そしてその与える、自身への影響。はたまた、その契約のもたらす未来の戦闘と生活。それらのことが次々と連なつてとても重く、どこまでも長い鎖となり、その鎖がぐるぐると何重にも何重にも彼の脳に巻きつき圧迫し重しとなつて、彼の思考能力を奪い去っていた。

「質問がないならば、結論を聞こう」

彼を催促するかのようにハスが言う。

「さあ、私と契約するのだ」

ちょっとまってくれ、と躊躇を示してデイベイスは考える。だが、何もいいアイデアは浮かばなかった。何かこの神の手の上で躍らせられているようで、気に喰わない。が、結局のところ、元からデイベイスに選択肢はない。生か死か。つまるところ、その二者択一。なにせよ、彼は本来すでに死んでいる身なのだ。デイベイスはようや

く、結論に達した。それは諦め、とも言えた。
「契約しよう、ハス」

第1章第3話 契約の行われる顛末（後書き）

拙い文章で申し訳ありませんが、気軽にでもかまいませんので感想・評価をよろしくお願いします。評価は酷評でもかまいません。

第1章第4話 ゴードン降臨の顛末

太陽がその軌道の頂点に達したところ、トンボに似た虫がブーンと軽い羽音を小さく奏でながら草原の中を僅かに高く突き出した植物の周りにこじんまりとした弧を描いた。そろそろ昼飯にでもありつこうかと巣穴から飛び出た兎が、その湿った黒く小さな鼻をヒクヒクと収縮させた。ゴードンが目を覚ましたのはそんな心地よい春の昼下がりであった。

チクチクする体への刺激でゴードンは目をさました。それもそのはず、彼は全くの裸だったのだ。若い春の草たちが、彼に目を覚ませと言わんばかりにその茎や葉でもって彼をやさしく刺していた。Shit（シット：糞）！と裸であることに悪態をつきながら上体を起こすと、先の契約のことを思い出しながら、彼は今の状況を把握しようと努めた。

周りは何もない草原でその周囲を小高い丘と林に囲まれていて、あたかもこの場所だけ外界から隔たれているようにも思われた。ゴードンは近くの草の茂みの中に無機質な金属の塊を見出した。ゴードンはその物体に近づきそれを手に取った。間違いない。それは長年、彼と共に数々の戦場を渡った武器、M-60機関銃のそれだった。M-60機関銃を抱えながらそれを点検していると、彼を打ちのめさんばかりのある事実に気づいた。弾がない……。

God dead am! Oh my God!（ちくしょう！）

神よ！彼は散々自分の倒れていた付近を這いずりながら、武器の一部とも言える弾、あるいは弾帯（弾丸の連なった、帯状のもの）を探し求め、それを見つけ出せなかった末にそう罵った。弾丸は影も形も見当たらなかったのだ。ゴードンは憤り憤慨したのも束の間、すっかり落胆してその場に座り込んだ。

魔王をやつつけるといわれても、これじゃ銃で殴ることしかできねえ。ゴードンはやる気をすっかりなくしてしまい後ろに倒れ込んだ。

だ。眼前にはゴードンの心情とは無関係にどこまでも青く澄み切った春の青空が広がった。そんな清々しい青空の中をゆったりと横切る雲を見つめながらゴードンは不安と悩みの森の中へと迷い込むのだった。そもそも、ゴードンは神ハスとの契約のとき、弾のことはこれっぽっちも気にかけてもいなかった。ただM - 60機関銃を与えてくれるという言葉聞いて武器については彼の中で完結していたのだ。弾は当然、銃に付随するものだと思い込んでいた。だいたい魔王とか言うやつをやっつけて欲しいなら弾をよこせてんだ。そうゴードンは思った。

第1章第4話 ゴードン降臨の顛末（後書き）

拙い文章で申し訳ありませんが、気軽にでもかまいませんので感想・評価をよろしくお願いします。評価は酷評でもかまいません。

第1章第5話 ゴードン降臨の顛末

ゴードンは半分自暴自棄になりながらもその筋肉質な体は心地よく温かい春の陽射しを感じ取っていた。空に漂う白い雲に自分を重ねながら、はて、これからどうしたものかと思案していると遠くの方から馬のいななきが聞こえた。条件反射で体を素早く反転し、その声の正体を掴もうと声のしたほうを窺っていると向こうの丘の上に馬が1体、姿をあらわした。馬はその栗毛の体に太陽の光を反射させててらと美しく光った。そして後ろ足を軸に前足を振り上げて大きく後ろに反り上がり、もう一度いなないた。そして彼の前足が地面に着くか着かないうちにその馬の背後から別な馬が姿を現した。馬は2体、3体と増え全部で6体となった。それぞれの馬の上人が乗っていてキラキラと不自然な輝きを発していた。しばらくしてそれが彼らが着ている鎧によるものだ、ゴードンは気付いた。「とんでもないところへ来ちゃったぜ」

ゴードンは静かにつぶやいた。ここへ来て彼は異世界に来たことを強く実感した。そしてその騎馬が敵なのか見方なのか、ゴードンには判断するすべがなく、そうである以上その騎馬集団をやりすごすにこしたことはない、とゴードンは結論づけた。騎馬の集団は次々と丘を下りゴードンの方へと近づいてきたが、ゴードンはその進路が自分のいる場所から僅かに反れるということを目測で知った。

敵が見方かわからない以上、やり過ごすに越したことはない、とゴードンは判断した。

騎馬が目前まで近づいてくると、ゴードンはさらに身を低くして警戒した。騎兵達はゴードンに気付く様子もなく、このままいけばうまくやり過ごせると思ったが、そのときゴードンはある違和感を視野の中に捕らえた気がした。違和感の正体を確かめようと草の間から目を凝らした。騎兵のうち3騎が大きな荷物を膝の上に抱えてる、ゴードンは初めそう思っていた。しかし、彼らが近づくとつれ、

それが人であることが分かった。しかもそれは3人の女性だった。彼女達は腰の辺りからくの字に体を曲げてそれぞれの馬の上に乗せられていた。一人は気を失っているのか手をだらりとさげ、馬の上下に合わせてぶらぶらとしていた。他の2人はまだ意識があり、泣いた顔を両手で覆ったり、必死にそこから逃れようと抵抗していた。

第1章第5話 ゴードン降臨の顛末（後書き）

拙い文章で申し訳ありませんが、気軽にでもかまいませんので感想・評価をよろしくお願いします。評価は酷評でもかまいません。

第1章第6話 ゴードン降臨の顛末

状況がわからないまま草むらに潜んでいたゴードンの脇を騎兵達は抜けていこうとした。そのときだった。最右翼の馬上で騎士が逃れようともがいていた青いドレスを着た女性の背中を拳で強く打った。青いドレスの女はぎゃっと、悲鳴をあげながら腹を馬の背中に打ち付け、その反動で顔をあげた。そのとき彼女の絶望に支配された瞳に僅かな一筋の希望が映り込んだ。彼女は草むらの中に密かな光をたたえた二つの瞳を見出した。

「助けて -」

最後の望みとばかりに彼女は叫んだ。

「お願い！ 助けて！」

ゴードンの方へ手を伸ばしながら力の限り叫んだ。彼女を連れていた騎士は静かにしろ、と怒鳴りながら再び彼女にその拳を振り下ろした。それを見たゴードンの体の中を何か熱いものが駆け上るものがあった。

「止める！」

そう叫びながら、ゴードンは飛び出していた。思いがけないところからの叫び声に驚いた騎士は馬を急に減速させながら手綱を右に引いた。バランスを取ろうと横によろけている馬の上で騎士と青いドレスの娘はほぼ同時に目を見開き丸くした。彼らの見出したのは、ただっ広い草原の上に何か黒い塊のものを抱えながら全裸で走ってくる男だった。驚く彼らの反応を見て、ゴードンはようやく自分の犯した失敗に気付き、そこに立ち止まった。

第1章第6話 ゴードン降臨の顛末 (後書き)

拙い文章で申し訳ありませんが、気軽にでもかまいませんので感想・評価をよろしくお願いします。評価は酷評でもかまいません。

第1章第7話 ゴードン降臨の顛末

やっちゃった。まったくやっちゃった！ ゴードンは後悔した。ゴードンは家系の血筋からなのか小さいころからそうだった。頭に血が昇ると周囲のことが目に入らなくなるのだ。その性格は成長してからもなくなることにはなかった。ベトナム戦争に行っているときにはその性格が災いして仲間を危険に追い込んだこともあった。そして今回、その性格は彼に死神を呼び寄せた。弾のない銃を握り締めているゴードンの脳裏を今までの苦い思い出が一瞬でよぎっていた。

「おい！ こっちへ来てみる。おかしな奴がいるぞ！」

騎士は仲間に叫んだ。騎士はおそらく若いのであるうが痩せた頬、光を失いくすんだ両眼が見た目の年齢を実際より高くしていた。呼ばれた他の騎士たちは口々に悪態を付ながら面倒臭そうに彼の方へと近づいてきた。そしてゴードンの姿を認めた順に感嘆の声を上げた。娘達はゴードンの姿が視界に入らぬように顔を覆ったり顔を背けたりしていた。騎兵達の感嘆の声は程なくして嘲笑へと変わった。

第1章第7話 ゴードン降臨の顛末（後書き）

ゴードンは熱血漢という設定です。若いころにベトナム戦争へ行つて、ベトナムからアメリカが撤退し戦争が終わると傭兵となって新たな戦場へ……という感じです。

読まれた方は簡単でもいいので、どうか感想・批評の方をよろしく願います！

第1章第8話 ゴードン降臨の顛末

「なんで裸でいるんだ？」

「こいつなにもなんだ？」

「変な物を持つてるぞ」

「よつぽど自分のなにを自慢したかったんじゃないのか」

騎士たちの間に人を馬鹿にするような笑いがどつと起こった。ゴードンはこの隙にこの絶望的な状態を抜け出す方法を思索していた。が、それは容易に浮かばず半ば諦めかけていたそのときにふと、ある考えが浮かんできた。ひょっとしたら薬室に一発でも入っているかもしれない。それは殆どゼロに近い望みであつたものの、何もしいないよりはましだとばかりにゴードンはコッキングレバーを引き、手を離れた。ガチャリ、と無機質な音がゴードンの手の中で小さく響いた。あつた。ゴードンはそのかすかな音を聞いて弾が装填されたことを確信し、嬉しさのあまり声になって洩らしてしまつた程だつた。しかしその微かな喜びに満ちた声には誰も気付かなかつた。なかなか止むことのなかつた騎士達の笑い声がようやく落ち着きを取り戻し始めたころ、彼らの中で最も年長であると思われる口ひげを生やした騎士が冷たく言つた。

「ヤミン、こいつを殺せ」

第1章第9話 ゴードン降臨の顛末

ヤミンと呼ばれた若い騎士がにやついた顔のまま前に進み出た。彼の背後から棍棒に気をつけろ、などとはやし立てる声があがる。やれやれ、と面倒そうにいいながらヤミンはスラリと剣を抜いた。その時一人の騎兵があることに気付いた。誰か来るぞ。見れば一人の騎士が遠く丘の上から疾走してこちらへと向かってきていた。

「ヤミン、さっさとそいつをやっちまえ。そいつを殺してからあの騎士を殺す」

先ほどの年長の騎士が言った。どうもこの騎士が彼らの頭らしい。ゴードンを一瞥し一呼吸いれるとヤミンはかかとの拍車を自分の馬の腹に勢いよく刻み込んだ。腹に鋭い痛みを覚えた騎馬は一声いなくて踊り立つと、程なくして急激に速度を増していった。裸で武器らしい武器を持たない男に対して多少の手加減をしてやろう、などという様子はそこにはなかった。ヤミンの乗った馬はますますスピードを上げてゴードンへとまっすぐに突っ込んでいった。

一方、ゴードンは冷静にM-60機関銃を構えていた。一発の弾丸。これでこの危機を乗りきらなくてはならない。まずはこのヤミンという騎士を撃ち殺す。そして恐らく銃声で起こるであろう混乱に乗じて彼の剣を奪い、残りの騎兵を倒さなくてはならない。それはとてもか細い光であった。

ゴードンにとって剣で戦ったことは今までになかった。そしておよそ騎士たちはその扱いに慣れている。

第1章第9話 ゴードン降臨の顛末（後書き）

読んでいただき有難うございます。

改行が少なく、特に携帯で見ている方には読みにくくなってしまう
申し訳ございません。

もし何か意見でもありましたら、気軽に書きください。

第1章第10話 ゴードン降臨の顛末

ヤミンとゴードンの間の距離は急速に失われていった。まだだ。

ゴードンは敵を引き付けた。まだまだ引き付けないと。たった一発の銃弾を外す訳にはいかない。もっと近づけなくては。ヤミンが剣を振り上げ始めた。剣がヤミンの肩の高さまで上がったそのとき、彼らの間に稲妻でも落ちたような耳をつんざく鋭い音がダダダダと付近一帯を叩きつけた。ヤミンは剣を振り上げたまま静かに後ろに倒れていき背中から地面に吸い込まれた。彼の馬は慣性の法則を脱しえず滑るように前へと倒れ込み、しばらくばたばたとその足で空を掻き回していたがやがて力尽き静かになった。ゴードンの銃から発せられた弾丸はヤミンの馬の眉間の上を貫きヤミンの胸へと吸い込こまれていったのだ。他の騎士達は彼ら自身驚きながらも、突然の轟音に恐れおののき暴れ始めた自分の馬を静めようと努力していた。当のゴードンも呆然として突っ立っていた。一発しかないと思っていた銃が連射したからだ。そのため折角の好機にもかかわらずゴードンはすぐに動くことを忘れていた。

訳がわからないまま、ゴードンはもう一度地面に向けて引き金を絞った。ダダダンという音とともにゴードンの目の前の土が跳ね上がった。そうゆうことなのか？ まだ半身半疑ではあるもののゴードンはある仮定へと辿り着いた。それは弾丸が銃の中で作り出されているということ。ゴードンは実際に目に見てもなおそれを信じることができずにいた。

銃声は再び騎兵達の馬を脅かした。ゴードンの様子を見ていた彼らの隊長が自分の馬をなだしつけながら怒鳴った。

「きさま、何をした！」

ゴードンは答える代わりにニヤリとした顔を彼に返した。隊長はそれを見て背中に冷たいものを感じる。

「こいつ、何か魔法を使いやがる」

他の騎士が言った。彼らの間に緊張が走る。騎兵達の頭はようやく馬を静まらせた仲間に女を下ろさせてこつ言った。
「全員で奴を殺る」

第1章第10話 ゴードン降臨の顛末（後書き）

読んでいただき有難うございます。

次回はゴードンvs騎兵隊です。乞うご期待！

第1章第11話 ゴードン降臨の顛末

娘達は長い拘束からようやく開放されて馬から降りた。気絶していた娘は青いドレスの娘に支えられていた。彼女達は謎の裸の男に希望を見出し、その希望は彼女らの瞳に輝きとなってあらわれた。

騎兵達は不揃いに剣を抜き出し、ゴードン目掛けて馬を駆け出した。このとき、ゴードンは銃を引きかねていた。射線に娘達がいたのだ。騎兵達は横一列に広がりながらゴードンの方へと駆けて来た。それによって騎兵の片翼が娘達のいる角度から外れた。I g o t . (もらった)と呟きながらゴードンは照準に狙いをつける。M - 6 0の引き金が絞られる。長い二連射で騎兵の左翼にいた騎兵が一騎、その場に崩れた。続けざまに隣の騎兵を撃ち殺すことに成功すると、残りの騎兵達はすでに目前にまで迫っていた。

騎兵隊の隊長はやられた仲間を目の端で見やり小さく舌打ちしながら剣を振り上げた。騎兵達は獲物を、その隊列の中心に捕らえようと、真横へ駆け出すゴードンを追った。右翼にいた騎兵が剣で獲物の背に爪を立てようとする。間一髪、ゴードンは前方に飛んで転がりそれを逃れた。

裸で転がり込むゴードンの背中や手足を草の葉や茎が刺し引ついていた。しかし痛みには構う暇はなかった。騎兵隊は急速反転し再び突撃を行うため、馬の鼻をゴードンへと向けようとしていた。

ゴードンはさかさずその隊の横腹に銃弾を打ち込む。弾丸は未だに途切れることなく銃口を飛び出して行った。そしてまた一人の騎兵を馬上でビクンと硬直させると、その命の灯火は急速に萎んで消えた。

残った二人の騎兵（一人は隊の頭だったが）は恐怖の色を浮かべながら顔を見合わせた。そうしたかと思うと、まるで死神の手から逃れようとするように、くるりとゴードンに背を向けて全力で駆け出した。

第1章第11話 ゴードン降臨の顛末（後書き）

もしよろしければ、一言でもいいので感想・批評をお願いします。

第1章第12話 ゴードン降臨の顛末

ゴードンはその小さくなつていく背中を見ながら、さらに撃ち込もうかどうか考えあぐねていたが、娘が連れ去られていたこと、そして先ほどの自分に対する仕打ちを思い出して再び引き金を引いた。長い連射の末、何とか騎兵の頭を倒したが残りの一人は逃してしまつた。

ゴードンは舌打ちしながら撃つのを諦め、後ろを振り返ると新たな危機、場合によつては今までよりもさらにたちの悪い危機がそこに存在していたことを認めた。すなわち三人の娘がそこにはいたのだ。自分の股間をさり気なくM - 60機関銃で隠しながら、どう話を切り出し自分の状態を説明すればいいのか悩んだ。

一方、娘達の方も一時の危機は去つたものの目の前の裸の男がどういった男なのか、なぜ裸なのかを怪しんでいて手放して喜べる状態でなく、とても複雑な顔をしながらゴードンを窺つたりお互いに顔を見合わせていた。

このように奇妙で嫌な空気が彼らの間でとぐろを巻いていたとき、ゴードンにとつてまさにちょうどいいタイミングで、先程の戦闘中に丘の上に現れ、駆けつけてきた騎士がようやく彼らのところに辿り着いた。

「大丈夫か！」

その騎士が発したその言葉で、彼が敵ではないとゴードンは判断した。

「なんとかね」

騎士はゴードンをじろじろと見出したので、ゴードンは少し恥ずかしくなった。

「そなたがゴードン殿か？」

知り合いが存在するはずもないこの世界で自分の名前を呼ばれたゴードンはキョトンとした。なんで俺の名前を知っている。

「そうだが……」

ゴードンは訝しがりながらそう答える。すると騎士の顔は一気に喜びの色が広がった。

「おお、おお。ゴードン殿！探しましたぞ！」

騎士はおもむろに馬から飛び降り、ゴードンに抱きついていた。ゴードンは多少の抵抗はしたものの、その抱擁を逃れることはできなかった。

「そうそう、まだ私の名前を言ってませんでしたな。私の名はカルム。一介の傭兵で御座います」

第1章第12話 ゴードン降臨の顛末（後書き）

読んでいただいて有難うございます。

感想を一言でもいいのでお願いします。

次回は別な傭兵、ハインリッヒの話をお送りします。

第1章第13話 ハイニンリツヒ降臨の顛末

その光が常に疎ましく目につく程低く傾いた太陽が、まもなく訪れようとする夕方を予告していた。遠くに連なる山脈は、天を突き刺さんとばかりに切り立っているものの、その愚かな試みを恥じるのか、やがて頬を赤らめて甘美なオレンジに染まるだろう。どこから来たのか茶色い羽をけば立たせた渡り鳥の編隊が、その山々の鼻先をこつそりくすぐるように通り返していった。彼らの後にはクウーン、という物悲しい鳴き声のこだまが静かな余韻となつて響いていた。

そんな景色に見下ろされた低い山の斜面。森に囲まれた草地を2人の男が足早に、真つ直ぐなラインを描いて進んでいた。一人はくたびれたローブを纏い、一人はマントを首から被っていた。マントの下は何もつけていない。すなわち裸だった。マントの下に裸、だからと言って別に彼が変質者だった、というわけではない。そう、彼もゴードンと同じく神と契約した傭兵だったのだ。彼の名をハイニンリツヒと言う。

「ハイニンリツヒ、見て。あそこが私と師匠の住んでいるところだ」手に持っていた杖を山頂の方へと向けて、ローブを着た男が言った。そこには木々の中に忘れ去られたように、ひっそりとした二階建ての建物があった。

「なかなかいい所じゃないか、アデン」

ハイニンリツヒが褒めると、アデンと呼ばれた男は満面の笑みを返した。

「確かに見た目はそこそこ豪勢に見えるかもな。でも中は結構酷いんだよ。この前の雨のときなんか3箇所も雨漏りしちゃって。あ、こんなこと言ったらまた師匠に怒られるわ」

そう言つてアデンの顔に屈託の無い笑顔が広がる。そう言いながら

アデンは再び館の方へ向き直り、陽気な足取りで歩き始める。

気持ちのいい笑顔をする男だ。つい先ほど出会ったばかりのこの男をハインリッヒはそう評した。

第1章第13話 ハイソリツヒ降臨の顛末（後書き）

読んでいただき有難うございます

第1章第14話 ハイシリツヒ降臨の顛末

2人が出会ったのは遡ること僅か一時間ほど前。ハイシリツヒは神との契約を終え、気がつくと裸で森の中にいた。手にはシュマイザイMP40（第二次世界大戦時、ドイツ軍で使われていた短機関銃）、首に素朴な銀のロケットを下げていた。そして何故だか右手の甲には刺青のような星のマーク（五芒星）が描かれていた。奇妙に感じた彼が指でこすってみても、そのマークは消えることはなかった。まるで彼が一步踏み出してしまった運命を暗示するかのよう

に。

そうこうしているハイシリツヒの背後に、森の静寂を乱す微かなノイズが訪れていた。始めは小さかったそれはだんだんと存在を露にした。森の静肅さを乱すものの正体、それは葉のこすれる音、枝を踏む音、足音、息を切らした呼吸。何者かが近づいていた。それも複数。

ハイシリツヒはそれを読み取ると木の背後に隠れ、様子を窺った。はたして、茂みの中から出て来たのはローブに身を包んだ男だった。男は右手に杖、左手に何か長細い紙切れを持って顔の前に掲げながら、訳の分からない言葉を息も絶え絶えに口走っていた。そしておもむろに後ろを振り返ったかと思うと、新たに茂みから出てきた怪物——とても大きい犬の様でありながら二本足で立ち、胴着のみの鎧と剣を身に着けていた——に杖を指し向けて何か叫んだ。

するとどうだろう。男の正面に2フィート（約60・96cm）程の光の球体——実際それは火の球体だったがハイシリツヒにはこの時そう見えた——が現れたかと思うと、一直線に怪物へと飛んで行って怪物に突き当たった。すると怪物は火に包まれ、まもなく倒れた。

だがその炎を飛び越えて、同じ様な怪物が三体、着地するととも

に男の方へと駆け出てきた。男は殆ど泣き出しそうな顔をしながら逃げ出した。

第1章第15話 ハイニンリツヒ降臨の顛末

男は、木の陰から出てきたハイニンリツヒを認めるや、逃げる！
逃げる！ と叫んだ。だがハイニンリツヒはそれに全くお構いなく、前に進み出た。あと少しで2人が擦れ違おうとするころ、発砲音が続けて響いた。突然の衝撃に尻餅を着いた男が恐る恐る後ろを振り返ると、そこには三体の怪物の亡骸が土の上に転がっていた。

これが2人の出会いだった。そう、男とはアデン。彼は魔術師だったのだ。

ハイニンリツヒはアデンの師匠の館へと案内された。道すがら先程の怪物はコボルトと言う名の怪物であることを聞かされる。そしてアデンがある使命を持ってハイニンリツヒを探していたことも……

「それ、すげえなあ」

アデンが徐おもむろに言った。

「何がだ？」

「その黒い奴さあ。あつという間にコボルト三匹を倒しちゃいやすかった」

「ああ、これか」

ハイニンリツヒはそう言うと、シュマイザーMP40を小さく掲げた。それそれ、と言いながらアデンはにんまりと笑った。ハイニンリツヒの心中は、アデンの屈託の無い笑顔とは対照的だった。先程投じられた、異様な現象という名の石。それに引き起こされた波紋。その波紋がハイニンリツヒの中でさざなみ立っていた。

なぜ弾が無くならないのか？ 彼はさっきの戦闘でコボルトに一弾倉以上は撃っていたのにもかかわらず、弾はなくならなかった。なぜ、銃を分解することも弾倉を抜くことさえもできないのか？ 戦いのあと、確認するために彼はそうしようとしたができなかつ

た。なぜ彼はこちらの言葉を理解し、話すことができるのか？
彼は英語でもドイツ語でもなく、知りもしない言語でアデンと話していた。疑問のさざなみはハインリッヒの中で次々と現れ、消えようとはしなかった。

これも神の計らいなのか？ ハインリッヒがそれらのことを事実として受け入れるしかないのかもしれない、と思い直しているときだった。

「さすがは神の戦士だなあ」

またアデンがハインリッヒに話しかける。聞きなれない言葉にハインリッヒは反応した。

「神の戦士？」

「そう、神の戦士だあ」

「何なんだそれは？」

アデンは顔に驚きの色を携えてハインリッヒを見た。

「あんたのことだってえ」

自分がいつの間にかそんな大それたものになっていることに、ハインリッヒは驚きを覚えた。アデンは暫く考えてから話し出した。

「昨日な、夢を見たんだ。神さんの夢を。私は光の中にいたんだ。

温かかったな、あそこ。ここはどこだろうって思ってた。ウロウロしてたら神さんが現れた。そしてこう言ったんだ。魔王の軍隊が迫っているって。魔王がこの世界を絶望で覆としているって。で、神さんは戦士を送るから、私にその戦士を導けって。つまり神の戦士の案内人になれと言ったんだ。」

アデンは舌で唇を湿らせて続けた。

「で、目が覚めたら真っ直ぐ東へ進め。そうすれば君は私の戦士を見出すだろう。そしてその戦士を連れてブロイヒへ向かえ、と」

「ブロイヒ？」

「そう、ブロイヒ。内戦で荒れてる国さ」

アデンがそう言うのと二人は立ち止まった。ハインリッヒとアデンは

目的の館の前に立っていた。

第1章第15話 ハイシリツヒ降臨の顛末（後書き）

以上、ハイシリツヒとアデンが魔導師デインの館へ話しながら向かう光景です。

次話はデインの館内での話です

第1章第16話 ハイソリツヒ降臨の顛末

館に着いたハイソリツヒをアデンの師匠であるディンが出迎えてくれた。ディンは高齢で小柄な老人であり、その顔には彼の積み重ねた年月を語る深いしわが刻まれていた。しかしながら、

その深いしわに半ば埋もれた形の二つの瞳は、まるで少年のそれであるような澄んだ輝きを、一切の惜しみなく発しているのだった。

ディンは人懐っこい微笑を浮かべながら挨拶を済ますと、ハイソリツヒが疲れているだろうと一室をあてがい、夕食まで休むように促した。何をしたというわけではなかったが、なぜかハイソリツヒは強い疲労を感じていたので、ディンの心使いに感謝してそうさせて貰うことにした。

そして師匠に言い付けられたアデンがハイソリツヒの衣服を持って部屋まで来たとき、ハイソリツヒはすでに椅子の上でうつらうつらとしていた。

「夕食までベットで寝ておけばいいよ。時間になったら私が起こしに来るからさ」

と、アデンは持ってきた衣服をハイソリツヒに渡しながら言った。ハイソリツヒはその申し出に甘えることにした。

ハイソリツヒがアデンに起こされたころ、館の外は夜の帳とばしを下ろして久しかった。幾重にも折り重なるようにして立ち並んだ木々達が、月明かりを受けて微かな光をその頭に運び、窓の外に鬱蒼うつそうと広がっていた。

案内されて食堂に行くと、そこには二人の到着を待待つディンがいた。ディンはハイソリツヒを見ると立ち上がり、ディンから見てテーブルの右側である隣の席に掌を向けた。

「どうぞ。こちらへ掛けたまえ」

ハイソリツヒが促された席に着くと、アデンが彼の正面に座った。

二人が席に着いたのを確認するとディンは悪戯っぽい笑顔を浮かべ、しわだらけの顔にさらにしわを増やした。してもつたいぶつたように卓上にあつたベルを高く持ち上げて、素早く二度鳴らした。

勢いよく開けられる食堂の扉。扉は適当な位置で不自然にピタリと止まる。現れたのは給仕用の大きなカート。ハインリツヒがふと横に目をやるとディンは腰に手を置いて、どうだ！ 言わんばかりの得意げな顔を彼に返してきた。ハインリツヒがカートに目を戻すと、二人の子供がカートの車輪で軽快な音を奏でながら入つて来、テーブルの手前で止まった。そしていそいそ、とナイフ、フォーク、スプーン、グラス、料理の乗った皿といったものを手際よく並べだした。彼らは二人とも腰まである黒く長い髪を背中で束ねていて、男の子とも女の子とも取れる美しい顔をしていた。白い袖のない口ーブが彼らの肩から膝までを覆い、腰の辺りを帯で締められていた。そしてローブの下に伸びた細い足を、編み上げサンダルつたの紐が薦まとのように纏わり絡んでいた。

ハインリツヒが再びディンを横に見やると、彼はもうこれ以上ないくらいの最高の得意顔になっていた。そしてグラスにワインが注がれる頃になると、ディンは我慢できなくなったのか低くクツクツクと、悪戯した子供が忍び笑いするような声を洩らした。アデンもつられて笑い出す。テーブルの上にやっと頭一つが出るくらいの子供たちが器用に給仕をこなし終えて、カートの横に並んで立つと、彼らも汚れない悪戯っぽい笑顔でハインリツヒの方をチラチラと見出した。

彼らが何かを企んでいることは分かったものの、それが何であるのかハインリツヒには全く検討がつかなかった。多少の憤りを覚えるものの、彼らの笑顔に嫌らしさがなかったため怒る気にもなれず、途方にくれたハインリツヒがとうとう聞いた。

第1章第16話 ハイニンリツヒ降臨の顛末（後書き）

気が向いたら一言で構いませんので、感想等をお願いします。

第1章第17話 ハイシリツヒ降臨の顛末

「どうしたんですか？ 皆で笑って。この子供達が何か悪戯でもしました？」

部屋を包んでいた笑い声がピタリと止んだ。デインに到っては、えっ、と驚きの声を上げ、まぶた瞼に垂れ下がった重たいしわをいくらか押し上げて目を見開いた。子供達はそろってその小さい目を丸くしていた。

「君には彼らが見えるのかな？」

ようやくデインがそう言った。ハイシリツヒには質問の意図が掴めなかった。

「見えるのか？ と、言いますと？」

「その子供らのことじゃ。で、見えるのか？」

「見えるも何も、実際にここにいるじゃないですか」

「そうか……」

デインは力なく椅子に腰を落とす。部屋に嫌な空気が漂い始めたように、ハイシリツヒには思われた。何か自分が悪いことでもしたような気分になえていた。だがそんなある種の緊張も間もなく打ち破られた。

「そうか！ そうか！ 君には見えるんじゃないな。」

デインはそう言って笑い出す。そして徐にハイシリツヒの方へ顔を寄せると、君には魔術師の才能があるやもしれん、と言って再び笑い出した。

夕食を食べながらデインは釈明した。その子供達がデインの式神（式神とは精霊の様なもの。人などの主人に従う）であること。常人にはその姿が見えないこと。よってハイシリツヒの目には勝手に動くカード、宙に浮き、ひとりでに並ぶフォークやナイフ、皿が映る筈だったこと。どうやら招いた客をこの様に驚かせ、その様子を

見るのがデインの趣味らしい、ということがハインリッヒには分かった。

デインが一通り釈明を終えると、彼はハインリッヒに質問を始めた。どこから来たのか。何をしていたのか。神との契約の様子。地球での生活。そしてアデンとの出会いの場面で、彼が必死にコボルト達から逃げる様子を話すと、デインは例の子供のような笑い声を上げ、アデンは顔を赤くしながら、その話は止めてくれ、と懇願した。

デインはハインリッヒの話を大変興味深く聞いていた。そして彼に分からないことがあると、透かさずハインリッヒに質問した。デインの興味はなかなか尽きようとはせず、アデンは眠くなった、と言うと先に自室へと帰ってしまった。デインは熱心にハインリッヒの話を聞き続けた。彼は特に地球の科学について興味を示した。

「するとそのErd e（エーアデ：ドイツ語で地球）と言う大陸では人はZ u g（ツーク：ドイツ語で列車）に乗って移動するわけかい？」

「Erd eはP l a n e t（プラネット：ドイツ語で惑星）です。移動は近ければ歩きますし、A u t o（アウト：ドイツ語で乗用車）という乗り物も別にあります」

「そうじゃった、そうじゃった。つまり星じゃな。にしても列車とは便利なもんじゃな。おや、おや。すっかり話し込んでしまったわい。もう大分遅くなってしまった。悪かったのう。もう寝るとしよう」

デインは立ち上がって言った。

「ソイ、お客さんを部屋までお送りしろ。カイ、家の戸締りをよろしく、な」

デインにそう言いつけられると、式神達は声をそろえて、ハイ、と言った。デインに挨拶をしてハインリッヒは部屋に戻った。部屋まではソイという式神がランプを持って、暗い屋敷の通路を照らしてくれた。ソイの背中を見ながらハインリッヒは、これでも人ではな

いのか、と妙に感心した。

第1章第17話 ハイน์リツヒ降臨の顛末（後書き）

次回、ハイน์リツヒの過去が明かされます。乞う、ご期待！

第1章第18話 ハイน์リツヒ降臨の顛末

ハイน์リツヒはベットに横になったまま、首からさげたロケットを開いて見つめていた。愛する人を見つめるような、暖かく優しい目つきであった。彼の手の中で、金属特有の光を帯びながら暗闇に浮かぶ銀のロケット。その中にはブロンドの女性と彼女に抱き上げられた女の子——母と同じブロンド——の映った写真が納められていた。それはハイน์リツヒの妻と娘の肖像だった。

彼女達はもうこの世にはいない。地球にさえも。彼はその幸せだった頃の証を——たった一つの証を無理にハスに頼み込んで残してもらっていたのだ。

「ますます遠くなってしまうたな……」

彼が呟いた。暗い部屋に哀愁の余韻を残すその声は、とても小さい声だった。だがその思いは天国にいる彼女達へ届いていたかもしれない。

ハイน์リツヒは1940年6月6日、父ルドルフ マルクス、母アンネ マルクスの子としてドイツは首都ベルリンに生まれる。ちょうどドイツ軍が破竹の勢いでフランスを突き進んでいるときだった。彼の父もまたこの中にいた。アンネは母親に付き添われながらベルリンのある病院でハイน์リツヒを産んだ。

少年ハイน์リツヒは戦争で物資が欠乏する中、すくすくと育った。父ルドルフはときどきではあったが休暇が出ると家に帰ってきた。少年ハイน์リツヒにとって父親はドイツ帝国のために戦うヒーローだった。ルドルフは家に帰るとハイน์リツヒを抱き上げ、その頬にキスをしながら自分の息子の成長を実感するのであった。ハイน์リツヒの記憶には未だに、そのときの父の軍服から漂う汗や泥、硝煙の混ざった埃っぽい匂いが染み付いていた。

ルドルフは子供が悪戯しないようにと、シュマイザーMP40を

衣装ダンスの中へ仕舞い込んでいた。しかし銃に興味を抱いた少年ハインリッヒが両親の目を忍び、こっそり衣装ダンスを開け、羨望と畏敬の眼差しを持って、その黒く冷たい金属の肌に触れたのは一度や二度ではなかった。

あるときルドルフが帰ってきたものの、いつもと様子が違うということをハインリッヒは子供心に感じていた。久しぶりの家族揃ったの食事もなんだか暗い。

「東部戦線（ソビエト連邦との戦線。極寒の地での戦いは過酷を極めた）に行くことになった」

父が母に告げた。母のスープを掬い上げる手が一瞬止まったのを少年ハインリッヒは見逃さなかった。2日後の朝、母に手を繋がれながらハインリッヒは、外套に身を包み寒い街の中へ消えていく父の後ろ姿を見送った。そしてそれが父親を見た最後となった。

第1章第18話 ハイน์リッヒ降臨の顛末（後書き）

ハイน์リッヒの過去、続きます

第1章第19話 ハイน์リッヒ降臨の顛末

父が死んでから約一年後、ソビエト連邦軍がベルリンへと迫っていた。少年ハイน์リッヒは祖国のため、また父の敵を討つため、その小さな手に銃を取った。彼は義勇兵としてすでに崩壊していたドイツ帝国軍に加わった。大人の兵士に肩を並べて銃を撃つ。始め彼はKar98kというライフルを宛がわれたが、程なくある下士官の死体からシュマイザーMP40短機関銃を手に入れた。

首都ベルリンはソビエト連邦軍の猛攻の前に風前の灯火だった。次々とソビエト連邦軍はベルリン市内へとなだれ込み、僅かに残ったドイツ兵を押しした。そんな中、ハイน์リッヒ少年はある廃墟の中で待ち伏せていた。彼の小さな胸は崩壊しようとするドイツ帝国、尊敬していた父の死から生まれた、強烈な敵愾心が大きく渦巻いていた。

一人のソビエト兵が前を横切ると透かさず引き金を引く。頭から転がり落ちるソビエト兵。別なソビエト兵が彼のそばに駆け寄る。ハイน์リッヒが再び引き金を引くと彼は最初の兵士に折り重なって倒れた。弾がなくなっただけでハイน์リッヒがマガジンを抜き、新しいものを装填しようとしたときだった。彼のすぐ背後に、忍ばせた足音を聞いた。ハイน์リッヒは振り向きざまに、顔面を銃底で殴られた。倒れたまま見上げると、そこにはソビエト兵がライフルを逆手に持って立っていた。ハイน์リッヒは死を漠然と予感したが、そのソビエト兵はハイน์リッヒのむなぐらを掴むと、ハイน์リッヒの頬を力いっぱい引つ叩いた。

何発叩かれたか分からない。ハイน์リッヒが気がつく、ソビエト兵はいなくなっていた。MP40短機関銃もなくなっていた。ただ、両の頬がヒリヒリと焼け付き、赤く腫れていた。彼は泣き出した。それは痛みによるものもあっただろう。だが、堰を切られた^{せき}彼の心からは、今までに溜まっていたものを全て押し流そうとするよ

うに次から次へと溢れ出た。涙が止まらなかった。

まもなく、多くのものを奪った長い戦争は終わった。

終戦後、彼は東ドイツで育つ。女手一つで彼を育てた母親アンネが他界し、エリーザという女性と結婚した。二人の間に生まれた娘をマルガレータと名づけた。ハインリッヒは父が死んで以来、初めて家族の暖かさを感じ、それを噛み締めた。そして彼はさらなる幸福を得ようと、西側諸国に強い憧れを抱くようになっていた。悲劇はそんな憧れの先で待ち伏せていた。

西ベルリンへ亡命結構の日、彼ら家族は他の二つの家族と共に下水道を通っていた。ハインリッヒは両手に大きな鞆を持ち、エリーザがまだ幼いマルガレータを抱えていた。亡命を手助けする組織の人間が道案内をした。突然、狭い通路に鳴り響いてくる軍靴の音。彼らは逃げる足を速めるが、三つの家族連れである。彼らは瞬く間に追いつかれてしまった。狭い空間に反響する銃声は恐怖の牙となつて彼らに襲い掛かった。牙は次々と男、女、子供達の肉を引き裂いた。ハインリッヒの目の前で、銃弾がエリーザ、マルガレータを貫いた。組織の男は引き返そうとするハインリッヒを無理やり引きずって連れて行き、たった二人だけが無事に民主主義の大地——西ドイツへと這い出した。

ハインリッヒに残されたのは首から下げた銀のロケットだけだった。

ベットに横になりながらロケットを見つめるハインリッヒの瞼のまぶたの上に、どこからかやって来た眠気がやさしく手を置き、そっと閉じた。

第1章第19話 ハイน์リツヒ降臨の顛末（後書き）

以上、ハイน์リツヒの過去でした。

第1章第20話 ハイシリツヒ降臨の顛末

翌朝、ハイシリツヒはデインと共に朝食をとっていた。アデンはすでに食事を済まし、馬に飼葉を与えたり鞍くらを載せたりと、旅の仕度をしていた。

「昨日はよく眠れたかな？」

「ええ、おかげさまで」

パンを頬張るデインの質問に対し、昨夜のほろ苦い回想を頭によぎらせながらハイシリツヒはそう答えた。昨日はすでに暗かったので何も見えなかった食堂の大きな窓から、これでもかと眩しい朝日の光がテーブルまで降り注ぐ。眩しさをこらえて目を凝らすと、窓の外にはすがすがしい朝の森が眼下に広がった。

「素敵なところですね、ここは」

「そうじゃろ、そうじゃろ」

デインはにんまりとして、そう答えた。だが、暫く神妙な顔をした後で彼は続けた。

「ときにハイシリツヒ、お願いがあるんじゃが……聞いてくれるか？」

「お願い……とはなんですか？」

予期しないデインからの申し出にハイシリツヒはとまどった。魔術師のお願い、それが途方もなく実現しがたいものに思われたのだ。

「アデンのことじゃ」

遠くを見つめるようなデインの横顔は朝日に照らされ、白く輝いていた。

「アデンは捨て子だったんじゃ」

デインは朝日に輝く光の中に、遠い日の風景を見出していたのだ。た。

「ワシがもう少し若い頃のことじゃ。当時、ワシはある仲間達と諸国を巡っていたの。そろそろこんな暮らしから身を引いて、隠居でも

しようかと思いいながらここに帰ろうとしていたときじゃった。ある川原で休んでいると、赤子の鳴き声が聞こえたきがしたんじゃ。始めは空耳だろうと思っていたんじゃが、どうもそうではないらしい。妙に思ってたあたりを探してみると、揺り籠の周りを狼がうろついておって、今にも喰って掛かるうとしておった。ワシも肝を冷やしたわい。大声で怒鳴って蹴散らしたあの。」

デインはハインリツヒに顔を向けた。

「それが奴じゃ。つまりアデンだったんじゃ」

デインはぐつと身を乗り出しハインリツヒに顔を近づけた。

「奴はワシにとって自分の子みたいなもんじゃ。いや、それ以上のものじゃ。隠居したワシにとって奴を育てることだけが生きがいじゃった。魔術一つに生きてきたワシに、神さんが贈り物をくれたんじゃ。これからは子のために暮らしなさい、とな。奴に降りかかる危険を払えるならこの身はどうなっても構わん！」

デインはそこで咳き込んだ。彼は興奮し、顔を紅潮させていた。式神のソイが彼の背をさすり水を与えた。ハインリツヒはこの老人にもこんなシリアスなところがあるのだな、と彼の人物像を見直していた。ようやく落ちて着いた小さな老人はソイに礼を述べると続けた。「残念ながらワシは一緒に行けん。年が年じゃからな」そして最後に真に気持ちを込めて言った。

「じゃから奴のことを頼むぞ、ハインリツヒ」

ハインリツヒが玄関を出ると、アデンが声を掛けた。

「おはよう、ハインリツヒ！ とても気持ちのいい朝だ！ 準備はもういいのかい？」

ハインリツヒはああ、と答えた。彼の背ごしにアデンを呼ぶ声がする。後から出てきたデインだった。

「なんだい、師匠？」

アデンに近づくデインの後ろからソイとカイが続く。そして二人の式神はデインの両脇に並んだ。

「彼らを連れて行くんじゃ、アデン」

アデンはキョトンとした顔で返す。

「それはできないよ、師匠！ そんなことしたら誰が師匠の世話を
するんだい？」

「大丈夫じゃ！ 式神は二人だけじゃないからの！」

そう言ってディンはクックククと子供のような笑い声を上げた。ハ
インリツヒはそれを聞くとなんだかほつとした。さき程の食堂での
神妙さが、その笑い声を聞くことで多少、緩和されたのかもしれない。

アデンとハインリツヒは馬に乗った。ハインリツヒにとって乗馬
は経験したことがなかったが時間がないこともあり、アデンが道す
がら教えるとのことだった。そしてこのとき馬の背中に乗ったのも
散々苦勞してからのことだった。

「じゃ、行つて来るよ！」

アデンの朗らかなテノールが響いた。

「後のことはお任せください」

ハインリツヒがそう言っているとディンはゆっくりと頷いた。

「任せるって、何を？」

「さあな」

ハインリツヒは白を切った。

段々と小さくなっていく二つの影を、ディンはいつまでも見送っ
ていた。たとえその二つの影が小高い丘の向こうに隠れてさえも。
いつまでも、いつまでも。

第1章第21話 テラによる探索の顛末

馬をギャロップで駆ける騎士がいた。白いシャツの上に青いベスト、下は黒いタイトなズボン。淡いブロンド髪は肩あたりで切り揃えられた後頭部で短く縛られていた。腰に挿した細めの二本の長剣は、馬の上下に合わせてガチャガチャ、と耳障りな音を鳴らした。

「テラ、どこへ行くの？」

今朝、馬を厩から連れ出していると、騎士の背後から妹のサラが問いかけた。テラは適当に誤魔化そうか、とも考えたがそうする理由も見当たらなかったので正直に答えることにした。

「お告げの夢……見たって言っただよね」

馬に干草を与えながらテラは続けた。

「神の戦士を探してくる」

お告げの夢。テラはその真実とも分らない夢のために、今から出かけようとしていた。ただの夢かもしれない。でも本当のことかもしれない。テラはその真偽を確かめなくてはならないという責任感を感じていた。

「そっか……気をつけてね」

気をつけてね。その言葉が馬を駆けるテラの耳にしばらく残った。サラは心配性だな、とテ

ラは思った。だけど……。テラにはそう言い切ってしまうことが躊躇された。残り少ない肉親を思いやるのだからしょうがない。そう思い直すものの、でもやっぱりサラは心配性だ、とテラは微笑んだ。

テラは野を抜けて小高い丘の上りに掛かると、馬を並足に移らせ、丘の上まで来ると完全に停止した。そして前に広がる草原を見つめる。誰もいない。馬の青白い肌からは汗が吹き出て朝露のような玉となっていた。涼しい風が抜ける。その風を合図にしたようにテラ

は再び駆け出した。

テラがさらに小一時間ほど馬を進めると、向こうから二人の騎士がやって来るのを認めた。もしかと思いテラは二人の騎士に近づくが、すぐにその二人の様子が普通とは異なっていることに気づいた。二人の騎士は共に黒い鎧を身に着けていた。それもうるこ状のパーツが組み合わされてできたスケイルメイルで、鎧は胴と両腕を取り巻き、股下のあたりから左右に裂けて垂れ下がっていた。髪は一人が短髪、もう一人は背中に届くロングだったが、共通して黒曜石のように真っ黒で艶があり、彼らの異様に白い顔とは良いコントラストを成していた。

第1章第22話 テラによる探索の顛末

テラは彼らに理由のない警戒心を抱きながらも、彼らの脇に馬を近づけて挨拶をし、そして問いかけた。

「失礼ですが、あなた方のどちらかはデイベース殿ですか？」

黒い鎧に身を包んだ二人の騎士は互いに顔を見合わせた後、長髪の騎士が答えた。

「いいえ、違います。どなたかをお探しですか？」

「ええ、そうなんですが」

テラには詳細を説明することが^{はばか}憚られた。ひょっとしたら只の夢だったかもしれない。

「時間を取らせてすいません。これにて失礼」

テラは一礼しながらそう言い捨てて、その場をそそくさと去った。少々、強引な去り方にテラは顔が熱くなるのを感じた。そもそも神の戦士など本当にいるのだろうか？ 昨日の夢を回想しながら自分に疑問を投げかける。しかし答えはテラの中にあるのではなかった。もう少し探してみよう、とテラはやや俯いていた顔を上げるのだった。

短髪の騎士が不可解な顔をしつつ、もう一方の騎士に話し掛けた。

「メレプス？ なんだったんだろうな、あの女。男の服を着てたぞ」

長髪の騎士、メレプスが答える。

「ああ、剣も二本下げてたな」

メレプスは彼女の面影を頭に浮かべて付け足した。

「それに綺麗な目をしていた」

メレプスの弟シジプスはムツとして、その短い髪を軽く弾ませながらメレプスの方に顔を向けて言った。

「だがそれほど綺麗な女じゃなかっただろう」

メレプスは正面を見据えたままフン、と鼻で笑った。

「何だ、シジプス。妬いているのか？」

「そんなんじゃないよ！」

シジプスはむくれて黙り込んだ。メレプスはその様子を見て、口元をほころばせた。

「怒るなよ、シジプス。俺はお前と一緒にだよ」

メレプスが正面を向いたまま言った。強張^{こわば}っていたシジプスの表情が多少和んだように思われた。馬の蹄が規則的なリズムを奏でていた。装備のする音がその音を追う。彼らの黒い髪と鎧は日の光を受け、そこに生じた春の暖かみを肌まで伝えていた。シジプスはあまりの気持ちよさに目を細め、整った鼻から大きく春の香りを吸い込んだ。

「気持ちのいい陽気だな、メレプス」

「ああ、そうだな」

「もうすぐ戦争だつていうのにな」

「ああ」

一陣の風が吹き、周囲にある木の枝をやさしく揺すりながら彼らの間を通って行った。メレプスの長い髪がさらさらとたなびいた。シジプスはそれを見ながら言った。

「そうしたらウィーノ族の皆に会えるな。カープスとマリピスもいるぜ、きっと。あいつら元気にしてるかな」

「無論、元気だろうよ。あいつらならな」

故郷に置いてきた同族の話に懐かしい感慨を覚えながらメレプスは続けた。

「だからこそ、一刻も早く魔王軍に合流しないと！」

メレプスはハッ、と掛け声を上げて一気に馬をとばした。

「待てって、メレプス！」

シジプスも負けじと後を追う。魔王軍につこうとする二人の冒険者は、速さを競いながらも微笑んでいた。

彼らの後には舞い上がった土埃だけが残った。やがてそれらの粒

子は静かに沈み、まるで何ごともなくかったという顔をした、朗らかな春の佇まいのみとなるのだった。

第1章第22話 テラによる探索の顛末（後書き）

一応、以上で第一章は終わりです。

次話以降につきましてはまだ構成を検討中につき、しばらく更新をストップします。

第2章第1話 プロイヒ王国内乱勃発までの顛末

騎士達を撃退した後、駆けつけて来た騎士はカルムと名乗った。一介の傭兵、そう自称する。ゴードンは彼の太い腕で締められる、きつい抱擁からやつとのこととで逃れた。

「カルム？ 一介の傭兵さんが何故俺のことを？」

ゴードンは訳が分からないという様子だった。ただ自分と同じ傭兵という単語に反応したのみだった。カルムと名乗る傭兵は一向に熱が収まらないようだった。大きな体躯の中にある二つの目がキラキラと光を放っていた。

「案内人なのです！ 神の戦士の案内人ですよ。私が貴殿きでんの案内人なのです」

カルムの言葉はゴードンをますます暗き森の中へと誘いざなった。

「案内人？ 神の戦士？……何だそれ？」

一切の要領を得ないゴードンに、カルムは、はっ？ という口の形のまま固まった。草原が風にざわめいた。カルムは整理した。この裸の男はゴードン殿だ。裸だがゴードン殿だ。本人がそう言っている。つまり、この人が神の戦士。だが、自身が神の使わされた戦士であることを知らない。そうゆうことなのか？

「その武器……」

カルムは指を指す。その延長線にはゴードンの男根を隠すM・60機関銃があった。ゴードンは一瞬、その指すものを取り違えてどぎまぎした。うるたえが表にでないよう、ゴードンは努めなくてはならなかった。

「その武器は神がゴードン殿に与えられたものですか？」

「ああ。ああ。これはハスがくれたものだ」

「そう、ハスは我らの神の御名。よってそれを与えられたことこそが神の戦士の証」

ようやく空回りしていた歯車が噛み合い始めたことをカルムは感じ

る。

「そして私は一昨日、夢を見たのです。神の戦士である貴殿を導けと……」

ここでちょっと服を着させてくれ、とゴードンは願い出た。さつきから娘達の視線が気になった。ただ、服を着るといっても新しい服があるわけではない。ゴードンは仕方なく死体から服を剥ぎ取ることにした。なるべく血の付いていないものを選んだ。これから必要になるであろう財布もしっかり頂戴する。

その間も、カルムは話を続ける。彼は気の知れあつた傭兵仲間と共にここ、ブロイヒ王国へと来た。ブロイヒ王国は目下、内乱の渦中にあり、傭兵達にとって格好の出稼ぎ先であつた。新ブロイヒ王の陣営に下り、何度か戦闘を行つた。が、一昨日、神の夢を見る。夢に現れた神はカルムに、ゴードンを導く案内人となるように言われた。

ゴードンがようやく服を着終わるころ、三人の娘が近づいてきた。青いドレスを着た女が進みでる。

「私はフィヴォルテン村に住む鍛冶屋の娘、ループと言います。この度は危うく、ならず者達に連れ去られそうになつたところを助けていただき有難うございました」

ループはお辞儀をする。他の二人の娘も彼女に倣^{なら}う。ゴードンは照れたままの顔で答える。

「いいってことよ。それよりお嬢さん方、怪我はなかったかい？」

「ええ、お陰様で」

そう言つたループという娘の微笑みに、ゴードンはますます顔のしまりをなくした。

とりあえず彼女達を村まで送らねばならない、ということになつた。

「彼女達は運がいい」

後ろに着いてくる村の娘達を後ろに見ながら、カルムが口を開く。

「さき程の騎士達は恐らく出稼ぎに来ていた傭兵でしょうな。今、ここブロイヒには、戦争を求めてガーラビヤ大陸中から傭兵が集まっておるんです。私もそんな一人です」

傾いた太陽が、話すカルムの顔に深い陰影を作る。

「中には先のような略奪者まがいの輩やからも少なくないんですよ。実際、悲惨な死に方をした女子おなこも何度か目にしましたぞ」

カルムの帯びた影には悲しい哀れみが潜んでいた。馬上の彼の目は真っ直ぐを見つめながら、ここではないどこかを見つめている。

夕日がその物の形に応じて影を作るように、ゴードンにはゴードンなりの影を宿した。熱帯雨林の湿った空気、鼻を突く植物の匂い。アフリカの戦地での一場面が蘇る。ジャングルを抜けて彼と仲間達は開けた草原に出る。ある集落の外れだった。人目に付かない雑草の中に彼女はいた。

まだ若い黒人女性……の死体。露になった股の間からは血が流れ、地面で黒く固まっている。激しい悲しみと憤りが入り混じった、遣り切れない気持ちに彼を焦がした。

丘を越えると、遠くに村が見えた。それがフィヴォルテン村のようでループ達は色めきたつ。ゴードンとカルムの二人は、時間も遅いのでそのままこの村で一泊することにした。

やがて村が近くに見え出すと一人の娘が泣き出した。村を近くに見て漸く緊張感が解けたのだらう。涙は直ぐに二人目、三人目へと伝染する。その伝染病は思いがけないことに、高い城壁を乗り越えて、ゴードンとカルムにまで猛威を振るう。二人はそれぞれ目頭を熱くしていた。

略奪を受け虚脱感に包まれていた村は、彼らの到着に沸き立った。娘達が帰って来たとか、悪党どもは死んだとか、素性の知れぬ男達が殺したらしいとか。村人達は口々に話す。噂は口から口へとあちこちで火花のように飛び散る。噂話の匂いを嗅ぎ付けて、さらに人が次々と集まる。

村の入り口は菓子に群がる蟻の様相を思わせた。

カルムは村人達にせがまれる説明もそこそこ、ゴードンを引つ張って人込みを抜け出し、村の一角に建てられた宿屋に入って行く。カルムは気の強そうな女将に、二人とも疲れているからと人払いを頼む。案の定、好奇心の強い村人達が数人、様子を窺おうと宿までやってきたが女将に怒鳴られて追い出されていた。

第2章第1話

ブロイヒ王国内乱勃発までの顛末（後書き）

今までは一日一回、作品を投稿するようにしていました。しかし、最近になって作者自身が作品の質に物足りなさを痛感するようになりました。そのため、多少投稿が遅くなったとしても、自分の納得のいくものが出来てから投稿する、という形を取りたいと思います。なお、本作品は長編であるため、感想・批評等ありましたらその都度いただきたいと思っています。出来る限り迅速に期待に答えられるよう頑張りたいと思いますのでご協力お願いします。

第2章第2話 ブロイヒ王国内乱勃発までの顛末

夕食後、ゴードンは部屋の窓に乗り上がり、片足を窓枠まで持ち上げて立て膝をつく。心地よい夜風が酒に火照った頬を撫で付けた。彼のすぐ背後にはM - 60機関銃が薄汚れた壁に立てかけられていて、主人の傍らに静かに座る忠実な番犬を思わせる。部屋の中ほどでカルムが円形のテーブルに左肘をついて半開きに座り、体をゴードンの方へ向けていた。

「信じられねえことするな」

と、ゴードンが洩らす。カルムは強くなく肯定する。

「だが、およそ事実らしいですぞ」

あまり高くない葡萄酒の瓶を傾けながら、カルムはこのブロイヒ王国でなぜ内乱が起こったのかをゴードンに話していた。その内容にゴードンは少なからぬショックを受けた。しばらくこの部屋を沈黙という名の風が吹きぬける。ゴードンは右手の甲を見つめる。そこには先程になってようやく気づいたマーク——五芒星——が不適な面持ちを携えて、存在していた。

ほどなく二人はポツリポツリと話し出し、今後の方針を練ることにする。

ゴードンにショックを与えた内乱のいきさつ。それを語るには現ブロイヒ王国の王、カイナ王について触れることが適当とおもわれる。なぜなら彼が内乱の発端となった事件を起こした張本人であり、その事件は彼の育った環境に根ざすものだからである。

現ブロイヒ王国国王カイナは前ブロイヒ国王アダナとその后ジョカスの長子として生まれる。このとき父32歳、母16歳と年の離れた夫婦であった。

王子カイナは、いずれは国王の後を継ぐ子として大事に育てられる。ただ、アダナ王は厳しい王だった。彼は部下に対して厳しかったし自分自身に対しても厳しい人だった。また、彼は厳父でもあった。

父親となったアダナ王は幼いころからカイナ王子をよく躡けた。宮廷での礼儀作法、食事における礼儀作法、または戦や国の政等に関する勉強はもとより、剣の練習では自ら練習用の模擬剣を手にとってカイナ王子の稽古相手になる、という熱の入りようだった。

初めて出来た子、自分の後を継ぎ国を統べる子。そういった期待からアダナ王の躡け、稽古はますます熱を帯びた。それは剣を鍛えるため、剣を熱し、叩く様そのものだった。

「カイナ、礼儀がなつとらんぞ！」

「そんなことで国王が務まるか！」

「さつさと起き上がって剣を取れ！」

アダナにとって、厳父にとって、それは一種の愛情表現だったのである。

当のカイナ王子にとって、王たる父は恐怖そのものである。絶対的存在。決して逆らうことのできない存在。カイナが物心付いたとき、父親はそうゆう存在でしかなかった。躡けで拳骨が飛んで来ることや、行き過ぎた稽古が原因で痣や擦り傷が耐えなかった。彼の心は幼いにもかかわらず、日照りでひび割れた大地のようであった。毎朝ごと、すがすがしい笑顔を向ける朝日を呪った。

そんな彼にとって若き母親、ジョカスだけが安らぎの場所だった。若き母は恵みの雨となって乾いたカイナ王子の心を癒す。カイナは父の躡けが厳しくなれば厳しくなるほど、その反動としてより一層に母親の愛を求めた。ジョカスは我が子を不憫に思い、止まない雨のように愛を注ぐ。カイナの望むままに。

カイナは稽古の合間、勉強の休み時間など時間が空くと母の姿を求める。その小さな目に母を捉えると真っ直ぐに走りより、ふつくらしたスカートに顔を埋めながら両手で母の手を握る。夜には夜で、

毎晩のように母親のベットへ潜り込む。

絶対的な恐怖と限らない愛情。少年カイナは木の葉がひらひらと舞うように、その両極を行き来した。このときはまだ、彼は父に対する恐怖の裏に、煮えくり返る憎悪の感情を自覚していない。大いなる畏怖の念が彼の心の表層を覆いつくし、その下に蓄積する激しい憾みの心情を隠していた。

そんなカイナ王子の心理にある変化が訪れる。カイナ王子は剣の稽古を終え、いつもの様に母親を探した。使用人の言葉を頼りに母の部屋へ飛び込んで行くと、ジョカスは着替えの最中だったらしく下着姿だった。カイナは驚いて、直ぐに後ろ手に扉を閉める。彼は逃げ出した。心臓が大きく脈打つ。偶然の事故であつたにも関わらずカイナは決して小さくない罪悪感を感じる。一方で、彼の性器は幼いながらも隆起させていた。

もう一つの変化は彼が8歳の時に訪れる。ジョカスの腹が膨れ始めた。そして弟、アイナが生まれる。丸々した小さな生き物が愛するジョカスを独占しようとする。彼は最後の安息の地は、その新たなライバルの出現によって脅かされ、実際に殆ど奪われた。

「母上。何をしているんですか、アイナは？」

覚束ない口どりでジョカスの白い乳房に吸い付く、弟アイナを覗き込みながらカイナは尋ねる。

「お乳を飲んでいるのよ」

母親の喜びを噛み締めるジョカスの優しい眼差しが余計にカイナを苛立たせた。

「何でお乳を飲むんですか？」

「きつとお腹が空いているのよ」

ジョカスはフッフと微笑みながら答える。

「私もお乳が飲みたい！」

カイナの言葉にジョカスは驚いて、その滑らかな額に皺しわを走らせた。「だめよ！何を言っているのあなたは。お兄ちゃんでしょ」

無邪気で淡い期待はすぐさま打ち砕かれた。窘たしなめられたカイナはす

っかりいじける。彼は黙ってジョカスの腕に頭をもたげながら、白く青筋立った柔らかそうな乳房を美味しそうにかぶりつく小さな生き物を見つめる。強い嫉妬と羨望、そして憎しみに溢れた目で。

第2章第3話 プロイヒ王国内乱勃発までの顛末

弟にジヨカスを奪われたカイナは愛に飢えた。砂漠を旅する者が、必然と水を求めるかのように。痛みを伴うほどの光線を照りつける、憎々しい太陽である父。渴望される降らぬ雨の母。乾いた熱風が彼の心を荒ませ続けるのはこの二人に起因した。

そんな渇き飢えた幼き旅人の頭上を一切れの雨雲が妖しく近づく。フェマという、一人の若い召使が目敏く、王位第一継承者に付け入るうとしていた。母親の愛、そうゆう名の仮面を手にとって。

カイナの自室で、フェマは身支度の世話をしていた。二人の他には誰もいない。好機は訪れていた。フェマにとって目の前の王子という子供は、猛禽の眼下を走る兎のようなものに思われる。愛という鋭い爪を持つ肉食の鳥は、今まさに獲物に向かつて急降下する。

いたって普通に仕事をこなしていた一介の召使が、恐れ多くも王の子を突然その胸に抱きしめた。カイナには何が起こっているのが分からない。召使は給仕や掃除、身の回りの世話をする下位の人間。カイナにはそうゆう認識しかなかった。その召使が今、まるで母ジヨカスがしたように彼を抱いている。

幼き王子は逃れようとする。が、フェマは足掻く獲物を離さなかった。

極めて危険な冒険的行動。女性の持つ直感によって、フェマはその行動の結果に勝利を予感していた。愛に飢える子。女である自分ならば、若く器量のいい自分ならば、やさしく母の様に接すれば、この子の魂を捕らえることができる。そういった自信があった。

幼き王子はやがて、自分を抱くこの召使に母と同じ匂いを見出す。それは女性特有の体臭。彼はもがくのを止めていた。幼き旅人は包み込むような柔らかい肉体に埋まりながら、長き砂漠の果てにオアシスに辿り着いたことを知る。

第2章第3話 フロイヒ王国内乱勃発までの顛末（後書き）

現在、作者は、このままでいいのか？ という疑問を持ちつつ手探り状態でこの作品を執筆しています。簡単な感想でかまいません。一言でも構いませんのでよろしければ頂きたい、と思っています。

第2章第4話 ブロイヒ王国内乱勃発までの顛末

城の庭の一角。カイナは剣術師範のジーマという男と剣の手合いをしている。ここはブロイヒ城にある剣術の屋外練習所。

ジーマは壮年の田舎貴族だが、戦争で家族を亡くし故郷に引きこもっていた。が、剣の腕を買われ、王の長男の剣術指南役として城に招かれる。戦友であった王アダナが無理に頼み込んだのだ。

カイナが10歳のとき、ジーマには全く歯が立たなかった。13歳のとき、ようやくのことで初めての一打を入れることができた。15歳になると30回に一度、勝てるようになる。17歳で10戦中5勝し、18歳にもなると若干師の腕を上回る程になっていた。

「カイナ王子、ちょっと待ってください」

ジーマが苦しそうに呼びかける。

「良いでしょ。すこし休みましょうか、ジーマ殿」

カイナは肩で息を切らしながら休憩を申し出た。そこには師に対する気遣いも含まれていたかもしれない。二人で脇のベンチに腰掛ける。どこかで雲雀ひばりの囀さえずる。ジーマが汗を拭う。

「カイナ王子もすっかり強くなりましたね」

「ジーマ殿のお陰ですよ」

「いえいえ、カイナ王子には素質があられる。教えるのが私でなくとも十分に強くなったはずですよ」

ハツハツハ、とカイナは照れて笑う。熱を帯びた体から、目に見えない蒸気が上がってくるのを顔に感じる。

「それでもやっぱりジーマ殿のお陰です」

二人は見詰め合って笑った。ジーマのカイナを見る目には、弟子や王子を見る目以外のものが含まれていた。父親の、たくましく育った息子を見る目。自分の子が死んでいなければこうなっていたかもしれない。彼がここで剣を教えるようになって以来、いつしかそういった感覚が重なるようになっていた。

剣の練習所に繋がる廊下から足音が近づいて来る。カイナとジーマは自然と足音のする方に顔を向ける。煉瓦作りの建物の中から、この国の君主が4、5人の臣下を伴って現れる。ジーマは直ぐに立ち上がり礼をする。カイナも立ち上がる。

「ち、父上、どうされました？」

カイナはここ数年、練習所に姿を現さなかった父の出現に驚きの声を上げた。しかし、その半分は畏怖の驚き。青年カイナは未だ、父に対する恐怖感を拭えていない。王はジャケットを脱いで老いた召使の男に渡した。

「たまには剣で体を動かすのもいいと思ってな」

脇に置かれた剣立てへ近づくとアダナは一本の模擬剣を手にとった。確かめるように何度か剣を握り直す。納得のいく感触が得られると息子の方を向いて口を開いた。

「カイナ、相手いたせ」

「は、はい」

敷地の中のほうへと進み出る王と王子。構え向かい合う父と子。あの父が相手。カイナの心は穏やかではなかった。厳しい顔をした父がいる。彼の心はグラグラと揺れ、今にも挫けそうだった。

二人は剣を正面に構えたままゆっくり近づき、互いの剣先が触れる。それが開始の合図。始まってしまった、と臆する王子は思った。アダナは開始してすぐさま、手首を返して相手の剣を横に薙ぎ払う。剣はもう一方のその横腹を叩いた。若き王子は剣を持って行かれそうになるのを堪える。攻撃を始めた父は一步進むごとに横に縦に剣を振るう。カイナはそれを一歩ずつ退いてかわしていく。

こんなものなのか？ 父の剣をかわしながら若き子は疑問に思う。父の剣術はこの程度なのか！ 彼にとってアダナの剣は単調で読みやすい動きでしかなかった。

「どうしたカイナ！ 攻撃して来い！」

父たる王は息を切らせながら声を上げる。カイナの後退する足が止まった。彼の頭上に真っ直ぐに振り下ろされる剣。だが力を込めて

斜めに振り上げらる、それでいて正確さを失わないカイナの剣が王の攻撃を横に強く弾いた。

前につんのめるアダナの脇をカイナの剣が打った。しまった、と畏怖する王子は心の中で声を上げる。思わず臣下の誰かが、あつ、と声を上げた。

見るとアダナはその場に跪ひざまじいている。苦しそうに肩で息をし、打たれた脇を痛そうに抑えている。若き王子には、呼吸に合わせて上下する背中が不思議なほど小さいように感じられた。アダナ王は苦渋を浮かべた顔で遅たぐましく育った自分の子を見上げる。そこには男が見下ろしていた。男に育った息子が。

「カイナ、強くなったな」

敗れた王は高らかな笑い声を上げる。彼は年を取ったことを実感した。胸が苦しい。大丈夫ですか、とカイナが傍らへ寄って父に肩を貸す。支えながら彼は、父親がどこかの知らない老人のように感じる。超えられそうもなかった父の体は小さくなっている。恐怖でしかなかった父はすっかり老いている。あれ程までに恐ろしかった父が萎しなんでしまった！ 幼いときの厳父の面影をそこに見出すことはできなかった。カイナの中の父親像が徐々に姿を変えていく。

「私もすっかり年を取った」

と、王は再び臣下の者たちを従えて去って行く。その後ろ姿を見送りながら、勝者になった王子の心は歓喜に打ち震えていた。父上は怖くない。若き王子の中で革命が起こっていた。父は怖くない！ 革命は一瞬のうちに、長く支配し続けた思想を転覆させる。アダナなんて怖くないんだ！

「カイナ王子？」

呼びかけるジーマの声も、今のカイナの耳に入りはしない。

第2章第5話　ブロイヒ王国内乱勃発までの顛末

「なんと仰おつしゃいました？」

受け入れがたい言葉にフェマは聞き返す。カイナ王子の自室。部屋にはカイナとフェマの二人しかない。

「聞こえなかったかい？　ならばもう一度言つてやろう。もう、お前に用はないと言つたんだよ、フェマ！　もう、お前に用はないんだ。分かったか？　私はもうお前を必要としないんだ。」

まだ若さを残す召使の顔は、見て判る程に青くなつていく。

「そんな、そんなことって！　……嘘と言つてください！」

言葉につつかえながら、必死にすがろうとする女の唇は震えている。「嘘じゃないさ。お前には暇をやる。故郷へ帰るんだ。給金も多く貰えるよう取り計らつてやろう。さあ、分かったらさつさと出て行け。そしてもうこの城へは近づくな」

五月蠅い虫を払うように王子は言い放つ。

「あんまりです。それではあまりにも酷い！」

「黙れ！　さつさとこの城から出て行け！　そして二度と私にその傲慢な顔を見せるな！」

そう怒鳴った王子は、喚く召使の襟首を捕まえて扉まで引きづっていく。女は足をもつれさせながら力強く引つ張られ、開けられた扉から放り出された。硬い石床の上に投げ出された彼女の背後で厚みのある扉の閉まる音がした。彼女は跳ね起きて扉にすがりつく。

「カイナ王子！　カイナ王子！　開けてください」

フェマが叫べども、閉ざされた扉は黙したまま立ち塞がる。まるで閉ざされた彼女の未来、または彼女の夢を暗示するように。あるいは王位継承者の彼女に対する気持ちが閉ざされたことを代弁しているかのよう。

今までの私は一体何だったのだろう。私が彼に対して注いできた愛情は何だったのだろう。それを壊れた玩具のように、あっさり捨

てるなんて！ 彼女は著しい侮辱を感じた。激しい恥辱の感情が込み上げてくる。激しい憤りの感情が込み上げる。涙が出た。悔しみの涙が。

「あんなに愛してやったのに！ あれだけ抱きしめてやったのに！ それなのに……それなのに……、この……薄情者！」

罵る彼女の言葉にも、扉は依然すました顔で黙したままである。

「一体何ごとですか？」

フェマは呼びかけられ、泣き腫らした顔で振り返る。そこにはたつた今、彼女の罵りを受けた者の母親である王妃が供の者を引き連れ、怪訝な顔をして立っている。若き召使は息を詰まらせ、心臓が口から飛び出すほど驚いた。

「えっ……何でも！……何でもありません！」

やつのことで言い切ると、涙に濡れた顔を他人に見られぬよう俯きながら、そそくさと小走りに廊下の曲がり角へ消えて行った。飛び立つ鳥を見やるように彼女の後ろ姿を見送ると、王女は長男の部屋の入り口に一瞥だけをくれて、本来の目的地へ向けて歩き出す。

あの子もそうゆう年頃になったのかしら。召使なんか手を出さなんて。困ったものだ、と思う王子の母親の気持ちには、そうゆう面でも成長を遂げた息子をどこか誇らしく思うニュアンスも些細ながら含まれているのだった。

第2章第5話 フロイヒ王国内乱勃発までの顛末（後書き）

すいませんが仕事で出張し、忙しくなるため4月終わりまで更新できなそうです。

第2章第6話

フロイヒ王国内乱勃発までの顛末

二人の王子の母、ジョカスは二人の召し使いを従えて城中を進んでいる。彼女達の踵が通路を成す冷えた石を小さく打ち鳴らす。目的地の手前で伴の者を下がらせた女主人は、一人でとある扉の前に立った。周囲に人がいないことを確かめ、指の裏で控えめに扉を叩く。

姿を見せたのは洒落た服に身を包んだ壮年の男。男は些ちひか驚いた表情を浮かべる。

「ジョカス様。何故、こんなところへお出でなされたのですか？

あれほどここへ来てはいけなと言ったのに……」

「ああ、愛しきエルクバルト様！ そんな冷たいことを仰らないで。仕方がなかったのです。私には我慢の仕様がなかったのです。そう、ひなどり雛鳥が親から餌を与えられなければ餓死してしまふように、私も貴方に愛を頂けなければ愛に飢えて死んでしまふのです。私が貴方と会えない間、どれほど苦しんだことでしょう。それともエルクバルト様は私が死んでしまっても構わないと仰るの？」

この危険な情事は、決して他人に知られることが許されるものではない。エルクバルトという男の顔は困惑した色をみせた。彼は考え込むようにして綺麗に刈り込まれた細長い口髭に手を触れる。長身な彼の表情を窺う、彼女の上目使いの瞳は、喜びの色をもそこに混在することを見逃さなかった。

「ジョカス様。とりあえず中へお入りください。」

躊躇、羞恥心、そして発覚の恐れ。そういった愛を妨げる者達の侵入を、この部屋の扉は拒んだに違いない。厚みのある扉が閉まるとほぼ同時に、二人は激しくお互いの唇を求め合った。生まれ落ちる間もない子牛が母の乳房の先端を、その唇の感触で求め弄もよほるように。自身の唇で、愛する者の顔の中にもう一つの唇を求める。

王女ジョカスもまた、愛に飢えていたのだ。まだ少女の面影を拭い

きれない内にこの城へ連れ

てこられた。少々変わり者の王が君臨するこの城へ、彼の妃となる為に。彼女の意志を無視した政略結婚。つまりは彼女は犠牲者だった。

ブロイヒ国の国王アダナは、自分の年齢の半分しかないこの少女をこよなく愛した。始めのうちは……。第一子が誕生すると、彼は涙を流しながら我が子を手に取った。だが長い間隙を経て授かった第二子がこの世で産声を上げる頃、年の離れた夫の熱はすでに冷え切っていた。

確実に老いていく夫の他方で、妻は女として熟れていった。彼女の女がどうしようもなく疼いた。しかし全盛期を過ぎた伴侶は彼女を顧みようとしない。艶を身に纏った王女は、堅苦しい家庭に押し潰されようとしていた。また息苦しい宮廷に窒息死させられようともしていた。

心を燻くすぶらせたこの女の前に、騎士団長のエルクバルトが現われたのはそんなときだった。

障害が多いほど恋は燃え上がる。二人は宮廷の人々の目を忍んで、殊更ことさら国王の目を忍んで、二人は落ち合うようになる。

障害の大きい恋ほど燃え上がる。二人は密やかに、されど激しく求め合った。火山の山の重みと分厚い地殻の下に隠された、煮えくり返るマグマのように。二人は求め合い、熱し合い、溶岩特有の粘性を持つて一つに溶け合った。

「この時間が永遠に続けばいいのに」

しなやかに流れる髪を無造作に放り出しながら、体毛の茂った胸板の上で女は呟つぶやく。幾度、彼女がそう願ったところでかなわぬ夢はかなわぬ夢。男の呼吸に合わせてうねる胸の上で、頬をくすぐる体毛を快く感じながら、頭のどこかであとどの位このままでいられるのが勝手に逆算される。

まもなく女は王女に戻らなくてはならない。高貴な生まれのシン

デレラはやがて煌びやかで冷たいドレスを身に纏わなくてはならない。可憐で窮屈な靴を履かなくてはならない。それならば……、それならば今だけはこの幸せを噛み締めよう。ジヨカスは横になったままの姿勢で背伸びをするように体を伸ばし、愛する男に口付けした。

第2章第6話

ブロイヒ王国内乱勃発までの顛末（後書き）

久しぶりの投稿なのですが、またまた出張が入ってしまいました。
つきましては五月一杯投稿できません。申し訳ございません。

第2章第7話 ブロイヒ王国内乱勃発までの顛末

ブロイヒ国王アダナは、夜遅くにある人物の訪問を受ける。彼の子、カイナであった。

事前の断りの無い訪問で、アダナがベットに入りウトウトし始めた頃のことだった。彼が今日は遅いのでまた明日に来るように言ったが、カイナはどうしても重要なことで、今日中に二人で話合わなければならないのだと引き下らない。彼は渋々、カイナを部屋に招き入れた。

アダナがすっかり寝る準備をしていたのに対し、カイナはジャケツトにキュロツト（膝丈ズボン）という出で立ちだった。

カイナに椅子を勧めながら、部屋の主もテーブルを挟んで腰掛ける。

「こんな夜中に押しかけおつて。さぞかし大事な話なんだろうな」
アダナの眉間には深い皺が寄っている。

「はい」返事するカイナは漸くのことで冷静を保っていた。「とても大事なお話なのです」

「それならばさっさと話さんか」

間もなく眠りに落ちようとしていたところを起こされたアダナは機嫌を損ねていた。その不機嫌さは聊いささかも隠されることなく滲み出、カイナの肌をピリピリと刺激する。逃げ出したい気持ちに駆られながら、彼は苦心してそれを押さえつける。彼が再び口を開くのには更なる労力を要した。

「ええつと、そう、この話はとても大切なことなのです。……それもこの国に関わるほどに。つまり、その……」

話し難いことなのか、カイナは中々話の本題を切り出そうとしない。時の経過とともに益々、張り詰めて行く室内の重い空気が、彼を締め上げていく。

「だから何なのだ」アダナは声を荒げた。「なぜ話さん？ その為

にこんな夜遅くに来たんじゃないのか？」

アダナは苛々していた。父の威勢の前に、カイナはすっかり萎縮してしまふ。それは幼いころから植え付けられてきた条件反射のようなものだった。しかし彼は何とか怯^{ひる}んだ心から立ち直ることができた。そう、今までの俺はこうだった。父の目の前に立つと干し葡萄のように縮み上がってしまう。まるで怯えた子犬のようだ。だが、今の俺は違うんだ。もう、今までの俺ではないんだ。この前、こいつをこの手で倒したのだからな。

カイナは徐に立ち上がり、父を見下ろした。彼は毅然としていた。「国王に申し上げます。ある咎人^{とがにん}が負った罪についてです」

カイナの突然の行動に、アダナは呆氣に取られてしまった。そんな父の様子を気にすることなくカイナは続けた。

「罪状。一つ、咎人が家庭を顧みなかったこと。一つ、咎人が彼の子を愛さなかったこと」彼の声のみが、優雅な王の部屋に無機質に響いた。

「一つ、咎人が彼の妻を愛さなかったこと。一つ、咎人が彼の妻から彼の子を遠ざけたこと」

王は予想外の驚きから回復しておらず、漠然と息子の言葉が耳に入るままにしている。カイナの声は益々、大きくなる。

「一つ、彼の子を罵ったこと。一つ、彼の子に手を上げたこと。一つ、彼の子に体罰を与えたこと……」

「待て」

漸くアダナは片手を挙げてカイナを遮った。

「待て。待てと言っておる」

アダナは訝しみながらカイナを見上げる。

「一体、何の話だ？」

カイナは直ぐには答えなかった。鋭い眼差しで静かに見下ろす。

「貴方のことですよ、父上。いえ、今後はブロイヒ王国国王アダナと呼ばせて頂きましょうか。貴方に父親らしい愛情を受けたことは、これまでたった一度さえないのだから」

この言葉を聞いたアダナは、瞬く間に顔が険しくなり、赤土のようなどす黒さに紅潮した。

「何をほざくか。この愚弄者めが！」

こめかみから額の端まで伸びた動脈が浮いて出、小刻みに脈打っている。両手を強く握り締め、右手が痙攣していた。

「お静まり願います、国王。陳情はまだ……」

「黙れ。黙れ、黙れ、黙れ！ もう、お前の言うことなど聞きたくもない！ ……さつさとこの部屋から出て行け！」

アダナは息が乱れるほど、怒鳴った。声もしやがれてしまっていた。だが、彼の息子は身じろぎ一つしないでそんな父の様子を見ている。

「判決……」

その言葉はカイナの不敵な笑みとともに発せられた。

「咎人は死を以って、その罪を贖^{あがな}うべし」

あまりの突拍子の無いカイナの言葉に、アダナは直ぐに意味を理解することが出来なかった。彼がその意味を理解したとき、カイナの手に握られた剣が彼の胸に突き立てられていた。剣の切っ先は張りのない薄い皮膚を突き破り、彼の胸中深くへと達した。続けて、第二撃目も速やかに、しかし確実な軌道を描いて振り下ろされた。剣は老体を袈裟状に切りつけた。

座っていた椅子から後ろに転がり、床に伏した王。彼が最後に考えたのは、自身の殺害者に対する怒りでもなければ、生に対する未練でもなかった。麗らかな、遠い日の思い出だった。優しい目つきをしたジヨカスに傍らで見守られながら、アダナとカイナは剣の稽古をしている。幼いカイナの手元は覚束^{おぼつか}ない。しかしアダナは機嫌よく、息子の一振りごとに声を上げる。いいぞ、いいぞ！ その調子だ！ まだ大きすぎる剣に半ばバランスを失いながら、幼い王子は掛け声とともに一生懸命に剣を振る。あどけない掛け声と父の持て囃す声、木剣どうしのぶつかり合う乾いた音だけが城の一角に響く。清々しく、良く晴れた日のことだった。

第2章第8話 ブロイヒ王国内乱勃発までの顛末

夜の帳がすっかり王国を包んでいた。月や星達は、不気味に厚くどす黒い雲に隠されていた。城内にいる貴族や兵士、使用人たちの多くが既に寝静まっている、そんな夜だった。

闇に支配された世界で、ブロイヒ城が喧騒に沸き返った。

国王が暗殺された。城の廊下を行きかう人々は、起きだして事情を尋ねる者に異口同音にそう口にした。

事件の犯人たるカイナは、父の殺害後、通路に出てこう叫んだのだ。王が殺された。逃げた暗殺者を探し出せ！

かくしてブロイヒ城は、掘り返された蟻の巣のような騒ぎになり、大規模な暗殺者の搜索が行われた。国の威信を賭けての搜索だった。時間の経過とともに搜索の範囲は広がり、その手は城下の町にまで及ぶ。町中を駆け抜ける騎馬の音、怒鳴る兵士の声に、安眠を妨げられた町民は少なくない。夜が明け、その日一日中、町を囲む城壁の門を閉ざして、搜索は行われた。

大規模な搜索の甲斐もなく、暗殺者は捕まらなかった。それもそのはず、この国の新しい統治者こそが、国王殺しの犯人なのだから。カイナは一切の動揺を見せることもなく、率先して暗殺者の搜索を指揮していた。ただし、多少の悲しみに暮れた表情を、他人に見せるといふ配慮は忘れずに。

国王アダナの死から二日後、国を挙げての国葬が行われる。更に翌日、カイナの国王就任式が行われる。こうしてカイナは正式に、この国の主あるじとなった。この新王こそ前王殺害の犯人かもしれない。式中、参列した何人かの者が、そういう噂をひそひそと語る中でのことだった。

新国王となったカイナが欲して止まなかったもの、それが今、力

イナの目の前で閉ざされている扉の中に存在した。もしもその存在と国王の座、どちらかを捨てなくてはならない、という状況に彼が陥ったのなら、彼は一瞬の躊躇ちゅうちよさえも見せずに国王の座を投げ捨てることだろう。

かの存在とは彼の切なる望み。かの存在とは彼の生きる喜びそのもの。カイナの悲願は間もなく成熟されようとしていた。しかしそれは、第三者から見た場合、悲劇に過ぎないのだった。

「……何があっても部屋の中に入ってくるな。……また、このことは口外無用だ……」

扉の両側に立つ兵士の方を向かないまま、カイナはそう口にした。彼らは前王が殺されたため、用心の為に配置されていた護衛の兵士だった。

「さもなくば……」

冷たく威圧する響きを含んだ王の言葉に、驚いた兵士が横目で様子を窺った。彼はそこに悪魔を見出した。新国王カイナという人の皮を被った悪魔を。何も無い視線の先をじっと見つめたまま、微動だにしない目は爛々と怪しい光を発している。笑っているのであろう、緩やかな湾曲を描く唇は少しも愉快さを感じさせない。むしろ死神の大鎌のような不気味さを携えている。警衛の兵士は背中冷ややかなものが走り、全身に身震みゆづりが起こるのを堪え得なかった。

そんな兵士に一瞥さえくれることもなく、悪魔は静かに把手に手をかけた。

「母上、失礼します」

カイナは部屋の中に聞こえるように声を張ると、答えを待つことなく、母親ジョカスの部屋へ入って行った。

新らしい国王がジョカスの部屋に入って暫くすると、部屋の中から争う音が聞こえてきた。やがて争う話し声は、ジョカスの拒絶と助けを求める声に変わった。

助けなくては、と警衛達が動きだそうとしたとき、彼らは悟った。先程の王の脅しの意味を……。その真の意味を理解したとき、漠然

としていた彼らの恐怖は真の姿を現した。その恐怖はとうてい受け入れ難い不快感を伴って、彼らの背後に立っていた。ジョカスの女の悲鳴が彼らの耳を、心を突く。しかし彼らは動き出すことが出来ない。女の悲鳴は単発的な鳴咽となった。扉の中では悪魔の宴が行われている。何もすることの出来ない彼らは自らを呪いつつ、恥によつて身を小さくすることしか出来ない。彼らは悪魔の魔手が、自分や家族に及ぶことを恐れたのだ。悲痛な女の叫びは、厚い扉を伝つて、冷たい廊下に漏れ出た。そして力の無い手つきで、外に立つ彼らの脹脛ふくらはぎに縋り付くのだった

こうしてカイナはその母親、ジョカスを姦淫した。

第2章第9話 フロイヒ王国内乱勃発までの顛末

翼をもがれ、地に落ちたジョカス。彼女は大きな痛みに打ちひしがれ、力なく地に伏すことしか出来なかった。火も灯されない部屋で、空間を満たした漆黒が傷ついた女を優しく抱擁して背をさすっていた。例えその優しい愛撫が、微少の効果さえ発揮することがなかったとしても。

なんであの子が……。なんで私が……。理不尽すぎる不幸への疑問。多大なショックの他に、彼女の頭の中に浮かぶことといえば、そのような、とても答えを導き出せそうもない疑問ばかりだった。

今のジョカスの様子はとても惨めで、過ぎた暴行の傷跡を残していた。化粧は汚れ、崩れて剥がれ落ち、涙によつて滲んだ。衣服は乱れ、破かれていた。室内に灯りがあつたならば、露呈した白い肌に、擦過よつて染まったピンクや、青痣、めくれた皮膚を、そこに見出すことが出来ただろう。

しかし、今の彼女には、そんな身なりなどには、とても構う気にはなれなかった。ただただ、答えの出ない堂々巡りの疑問を、底のない井戸の闇の中へ、力なく落とし続けるのだった。

涙の枯渴した彼女の瞳に、今は何も映ってはいない。心の瞳にさえも。生々しい傷跡の痛みを少しでも和らげばと、彼女は闇の中に浸かっていることしかできなかった。やがて闇は彼女の内側へも、ジワジワと浸透して行く。

そんなジョカスは、僅かに身動きすることさえまならなかった。身体を動かすには、新月間近の月のように、まだまだ気力が大きく欠けたままだった。今までの彼女というのは、完全に守られた、平安な世界しか知らなかった。言うなれば温室の温かみしか知らない花。安住していた世界は、突然の無遠慮な恐怖によつて引き裂かれてしまった。それは今まで経験したことも想像したこともない恐怖だった。初めて味わった恐怖を、彼女は考えまい、思いだすまいと

努めるのだが、果たして、それは虚しい抵抗に終わるのだった。

どうしてあの子が。とても優しい子だったのに……。彼女は長男の幼いころの姿に思いを馳せる。愛くるしい目でよく母親を見つめる子だった……。それなのになぜ！なぜ、こんなことを……。なんで私がこんな目に合わなければならぬの！

ぼろぼろに破れ、ほつれた彼女の生命を辛うじて紡ぎとめたもの。それはエルクバルトへの愛だった。愛という名の繊維が、奈落へと転がり落ち続ける彼女の細い腕に絡み付き、自由落下というほぼ絶対の法則から引っ張り上げたのだ。かくして、彼女の生命は辛うじて地上に繋ぎ留められていた。

第2章第9話 フロイヒ王国内乱勃発までの顛末（後書き）

最近、書く気力が全く沸かずに更新していませんでした。読者の方には申し訳ないと思っております。

相変わらずの遅筆ですが、これからも続けていこうと思います。どうぞよろしく願います。

第2章第10話　プロイヒ王国内乱勃発までの顛末

女王ジョカスが、自分の息子である国王に監禁されている……。彼女の姿を見なくなつて三日後、プロイヒ騎士団団長エルクバルトが漸く耳にした噂は、その程度のものであった。

その、僅かばかりの愛する人の情報さえも、噂の持つ宿命として真偽は定かと言ひ難かつた。また、同じくその持つ宿命として、この噂は驚くべき速さでもつて、人々に広まつて行つた。貴族から貴族、使用人から使用人、そして町人や市民といった一般の階級へさえも。あちらこちら飛び散つた火花は、さらに幾つもの火花を生じ続け、やがては首都中で知らない者が無いほど、となつた。さらに言えば、人の噂の持つ、逃れられぬ宿命的性質によつて、そこには多種多様、大なり小なりの様々な尾ひれが無数に付いて回つた。元来の情報が、奇抜かつ突拍子もなく、あまりにも非現実的であると言え、つまりそれは、人々の妄想を安易に掻き立てる要素を十分すぎる程持ち合わせている、ということなのだから。

一体、彼女の身に何が起つたというのか。どの噂が真実で、どの噂が偽りなのか。エルクバルトは偽りの木が隙間無く、鬱蒼と茂る大森林地帯の只中で、たった一本しかない、真実の木を探さなければならなかつた。正解の木が何なのか、分からないままに。

彼は、懸命の努力によつて、誰彼構わず、また、その噂の誠か偽りかにかからわず、ひたすら収集し回つた。しかしながら、強引に、大つぴらに聞き回することは躊躇された。彼と女王との関係は、決して公に出来るものではなかつたのだから。情報を知つていそうな者、社交的で世間通な者、又は噂話の好きそうな者に、彼はそれとなく近づいて行つては、わざと物好きそうな顔をして、根も葉も無い噂話を一々聞き出していった。だが結局のところ、手応えのある話に巡り合うことはなかつた。散々に奔走したものの、大した収穫も得られない。何とかしなくてはならない。そう、切に思いながらも、

有効となり得えそうなアイデアも浮かばない。焦りは時間を追うごとに彼を焦がした。誰に相談することも出来ずに、彼は独り孤独に、八方塞がりの暗き迷宮に陥っていた。

そんなときのことだった。エルクバルトが指揮下にある騎士団の訓練を視察して自室へ戻つてくると、誰かが彼の部屋の前で、壁もたれ掛かりつて立っていた。自分のことを待っているのだな、とエルクバルトは検討付けながら近づくと、その人物から声を投げ掛けられた。

「遅かったじゃないか。騎士団長殿」

それはエルクバルトと親しい間柄のボイエングだということが分かった。

「お待たせしたかな？ 申し訳ない。何せ忙しい御身分でな。守備隊長殿」

相手がボイエングと分かつて、エルクバルトは顔の筋肉を緩ませ、皮肉の混じった非難に対し、皮肉を交えて謝った。

ボイエングはブロイヒ城の防衛・警備を担う、ブロイヒ城守備隊の指揮官だった。エルクバルトとは年も近く、また職務上の都合で会う機会も頻繁にあつたため、二人の関係が友人という間柄になるまで、それ程時間を要さなかった。彼は青味を帯びるほど色白で、その白いベースが鼻下にある、左右端を釣り上げたカイザル髭を浮き立たせていた。ちょうどその口髭のラインから下は、顎が細いので逆三角形を形成していた。エルクバルトは最初、彼のことを物腰の柔らかい紳士的な人間なのだと思っていたのだが、親密度が増すにつれてそれが対外的な、表向きの態度でしかないことを理解していった。簡単に言えば、外面のいい奴、ということなのだが、エルクバルトはそれを含めても彼のことを好きになった。

ボイエングの家は古くからの名家だった。その領土は、首都である城塞都市ブロイヒから見て西北西は遠く、ブロイヒ王国の辺境に位置していた。というのもこの旧家は、より以遠からの外敵からブ

ロイヒ王国を守り、その侵入を防ぐことを役割としている。実際、現在の当主ボイニニング公の名を冠したボイニニング公領の西には、数多の物の怪や得体の知れない民族が住み着く、『暗き森』と呼ばれる大森林地帯があった。

ボイエンガはエルクバルトの方へ寄つて来ながら聞いた。

「これから一時間程空いているか？」

突然の話の切り出し方にエルクバルトは多少戸惑ったものの、咄嗟とつさに頭の中のスケジュール帳を一瞥し、答えた。

「特に予定はないが……いきなりどうしたんだい？」

ボイエンガはもう、エルクバルトの手前まで来ているのにもかかわらず、歩む足を止めようとはしない。彼はエルクバルトの質問を黙殺して、予定がないならちよつと付き合え、と言った。そして、拒否は受け付けない、といったように擦れ違い様にこう言い切った。

「海鳥亭うみどりで待っている」

海鳥亭——それはボイエンガやブロイヒ城守備隊の者が最前ひいぎにしている料亭兼酒場だった。ブロイヒ城の外にあり、エルクバルトもボイエンガに連れられて、一度ならず、そこに行ったことがある。

せかせかと、足早に歩くボイエンガの後ろ姿を見送りながら、何か話でもあるのか？ と喉にまで込み上げてきた質問をなんとか飲み、思い立ったように外出の準備に取り掛かった。彼はボイエンガの性格を思い出したのだ。彼がそうするということは、つまり、それほど重要な話があつての事なのだ。

第2章第10話 プロイヒ王国内乱勃発までの顛末（後書き）

更新が大変遅れてしまい申し訳ありませんでした。作者のモチベーションが下がっていました……

これからも細々と書き進めていくつもりですので、温かい目で、見守ってってください。

第2章第11話　ブロイヒ王国内乱勃発までの顛末

王座。それは王のみに座することを許された椅子。それは強大なる権力の象徴。数多あまたの人という人の上に、毅然と存在する頂点。そして王は、その絶対的権威によって、人民を統率し君臨する。

若くして、その椅子の居心地と絶対的権力とを獲得した者がいる。
すなわ 即ちそれはブロイヒ王国における新たな王、カイナだった。

悪くはない。王座の居心地を確かめながら、若き王は独りひとりで呟いた。それは余りにも小さな声であつたため、発されるとほぼ同時に、堅く冷えた石畳に吸い込まれて消えていった。エルクバルトがボーイングガに、海鳥亭に呼び出されてから数日後のことであつた。

夜も大分更けていて、辺りに人は少なかった。灯された灯火のみが、薄暗いながらも暖色系の明かりを、広い室内にもたらしている。あの父がいつも座っていたこの椅子に、自分が今……今こそ自分がこうして座っている。それも王として。憎々しいあいつに取って変わって。あいつをこの王座から引きずり降ろし、私がこの座に、こうして堂々と座っているのだ。もはや、誰も恐れるべき者は誰も居ない。

そういつた事実の反芻が、カイナ王を愉快にさせていた。彼の顔には冷たい微笑が――あたかも敗者を目の前にして嘲笑するような、冷たい薄笑いが浮かんでいた。

そしてついに……。冷めた薄笑いが柔かみを帯びる。ついにあの人が我が手に……。

彼の瞳に輝きが溢れる。それは彼の予てからの切実なる念願。彼の母親に対する欲求は、幼い子供がその母に抱くそれと、ほとんど変わらない。ただ、カイナのそれには、年相応の性欲が付随してしまったことにすぎない。カイナのジヨカスに対する変質的愛情は、

本来は純真な欲求によるものなのだ。彼は、今なお母親を愛することによって、胸を蝕む間隙を埋めようとしているのだ。

そして今夜もまた、彼は母親の愛情を堪能しようか、と考えていたときだった。

カイナは、慌ただしくなった城内の喧騒によって、淫美な妄想から我に帰った。耳を澄ますと、何人もの兵士が行き交う音、また掛け声が遠くから聞こえた。

こんな夜更けに何事か、とカイナ王はバルコニーに出、城内の他の建物や中庭を伺った。室内で火照った彼の頬を、夜の冷めた空気が撫で付けた。バルコニーの手摺りに身を乗り出した彼は、騒がしさの発生源が右手……西棟の方面から聞こえて来るのだと検討付けた。嫌な予感がする……。王の胸中で何かが騒いだ。その西棟には、彼がこれから訪れようとしていた、とある一室があつた。もしかすると、あの人の身に何かが……。彼の不安は次第に大きく、そして形をはっきりとさせていく。

その時、王座の間への扉が勢いよく開かれた。入って来たのは伝令の兵士だった。走ってここまで来たらしく、彼は息を切らせながら声を上げた。

「カイナ王！ カイナ王はこちらにいらっしゃいますか？」

兵士の呼び掛けに、カイナは短く、声を荒げて答えた。

「ここだ！」

王の姿を認めた兵士は小走りに彼のそばまで駆け寄って来た。

「カイナ王……」

「何だ」

「実は……」

伝令の兵士は言葉を濁して中々言おうとしない。カイナが痺れを切らせて催促すると、その兵士は漸く、渋々ながら報告し始めた。

「申し上げます。実は……その……ジョカス様が……」

伝令の兵士は、王の方眉が釣り上がるのを見ながら、残りの報告を

言い切った。

「何者かに誘拐されました……」

「なんだと！」

カイナは見る間に顔色を青ざめながらそう怒鳴り、再びバルコニーの手摺りにしがみついた。そして城壁の間に巢作る闇を、射ぬくように見つめた。

カイナは初め、おぼろげに何かの存在を認めた。そしてその存在は、けたたましい音と共に、徐々に姿を現した。それは騎馬だった。騎馬の集団が、蹄で大地を鳴らしながら現れたのだ。数にして十数騎。何なのだ、これは……。誰に言うでもなく、若き城主の口から驚きと疑問のため息がこぼれた。しかし、その疑問が彼らに届くはずもなく、騎馬は駆け込むようにして、カイナの足元を通りすぎようとしていた。

その時だった。カイナは騎馬の一群の中にあつた、ある異質なものに目を奪われた。ある異質なもの——色の映えない服に身を包んだ男達と、彼らの操る馬達。その中に彼女はいた。白いドレスを身に纏い、裾を棚引かせ、ある騎士の懷で横座りに騎乗している。そうしながら彼女は両腕を騎士の首に絡ませ、彼に体を預けるように密着していた。

「母上！」

カイナは吠えた。

「母上！」

彼はもう一度、声がしゃがれる程に叫んだ。鈍く擦りむいた時のような痛みが、彼の喉を焼いた。

彼の声が届いたのか、馬上のジョカスはカイナに気付いたようだった。やがて、彼女を運ぶ騎士は、後続の騎士にぶつからないよう脇にそれながら急速に速度をし、馬首を転じた。星明かりが彼の顔を照らす。カイナは目を見張った。

エルクバルト！　カイナは言葉を失った。だが、彼の頭の大なる

叫び声とその木霊は、かの騎士の正体を、嫌と言つほど明確に訴えた。ブロイヒ国騎士団団長エルクバルト！ その肩書きと名のみが、彼の頭を巡る。彼は今、起こっていることの意味を理解しかねていた。しかし、直ぐにそれを理解させられることとなる。

カイナ王を認めたエルクバルトは、腕の中のジョカスに気を遣いながら、スラリと剣を引き抜いた。そして彼は硬直したままの、君主だった若者に、剣先を真直ぐに向けた。その意味するところは、裏切りと宣戦の布告……。即ちそれは、王に対して反旗を翻したこの意思表示。

馬の左右へのふらつきに遮られることなく、エルクバルトはしばらくの間、そのままの姿勢で刃の先にいるカイナ王を睨み付けた。やがて彼は馬首をひるがえし、颯爽と仲間さうそうの後を追いつけて行ってしまった。その馬の背に、ジョカスを伴って。

私はまた、あの人を失ってしまった……。

深い絶望に、カイナは膝から崩れて座りこんだ。その様子を後ろから見ていた伝令の兵士は、言葉を掛けるべきかどうか、考えあぐねていた。そして彼は知らなかった。バルコニーの手摺りの隙間から、舞い上がった土埃と闇の先に騎士の背中を睨み続けるカイナの瞳——その絶望に覆われた瞳の奥に、新たな炎が燃え上がったことを。

第2章第11話 ブロイヒ王国内乱勃発までの顛末（後書き）

今、執筆中の『ブロイヒ王国内乱…』は、元々もつと短い予定だったのですが……作者の技量不足のために、ここまで長くなってしまいました。

ですが、あと1話でこの部分を終了し、本編に移行する予定です。

第2章第12話　ブロイヒ王国内乱勃発までの顛末

ボイエングヤエルクバルト、そしてジョカス達を乗せた馬の一群は、城や都市の城門を制圧していた別働隊を加えながら、大きな支障に合うこともなく郊外への脱出に成功した。

彼らが首都ブロイヒを包括する城壁から抜け出せたときのことだった。ジョカスは内側から、静かにゆつくりと、温かみが少しずつ沸き上がって来るのを感じた。それは初め、辛うじて感知しうるだけの、極めて微かなものだった。やがてその温かみは、彼女の胸に温度をもたらし、時間が経つにつれて熱く感じる程となった。同時にこの熱は、目頭へも転移した。彼女は溢れ出してくる熱い涙とともに、この幸せの瞬間を、心で噛み締めた。忙しく馬を操る、エルクバルトの腕の中で、堅い胸当ての感触を背に感じながら。

永遠に続くと思われた、先の見通すことの出来ない真つ黒の絶望は、遂に取り除かれた！　しかも他でもない最愛の人こそが、絶望の沼に全身を捕われていた彼女を引きずりだしてくれたのだ！　更には、彼は自身の危険を顧みず、彼の持っていた地位を全て投げ打って！　涙の中で、それを理解したジョカスは、益々、熱い涙を湧かせた。

先日、ブロイヒ城守備隊御用達の海鳥亭で行われた、ボイエングヤとエルクバルトの密談は、この女王奪還計画のためのものだったのだ。

しかしながら、幸せに酔うジョカスの一方で、この作戦の立役者エルクバルトの顔には、彼女に投げかけられるべき微笑みの面影も勝利の余韻さえも見出せなかった。彼だけではない。前後左右になつて並走する男達はただ黙って、疾走する馬の手綱を捌くのみだった。夜の郊外を満たす静寂が、または暗闇が、この集団を支配してしまつたかのように。街道に沿って、広大な麦畑を抜け、小高い丘

を覆った松林を抜け、再び畑を抜けて鬱蒼とした草原にでも、その様子は変わらなかった。彼らは、いつの間にかに得体の知れない怪物に飲み込まれていて、その怪しく姿のない生物はいつまでも獲物を放そうとはしないのだった。

聞こえるのは仲間の馬の駆ける音だけだった。

エルクバルトは眼孔の深みにある黒い瞳で、真直ぐ正面を見据えていた。しかし、特に何かを見つめている、という訳ではない。彼のその視線の先にあるものを敢えて上げるとするならば、こう言えるかもしれない。彼ら、謀反をおこした者達の不安に満ちた未来、と。それはまだ、予測することさえ憚^{はば}られた、純粹なる闇の只中であつた。

彼らを取り囲む闇はどこまでも続いていた。このガーラビアという大陸の続く限り。

首都である城塞都市ブロイヒを脱出したエルクバルト一行は、カイナによって差し向けられた追撃隊を振り切りながら退避を続けた。その途上でのことである。彼らはブロイヒ国民に対し、とある宣言を公布した。それはカイナ王に対する宣戦布告であり、クーデターの表明とも言えた。彼らの公布した宣言の内容をここに掲示しておく。

『親愛なる人民達よ。正義の忠実なる僕達^{しもべ}よ。我々の言葉に耳を傾けよ。我々の無垢なる叫びを聴け。今、我々は現ブロイヒ王国国王カイナに対し反旗を掲げる。正義の名によって。神の名によって。そしてあなた方、人民の名によって。何故ならば、卑しくもかかる王は、人の皮を被った汚らわしき獣であるからだ。かかる浅ましき王は、己の権力欲に溺れ、彼の母親である女王を監禁しせり。また、彼の父親たるブロイヒ王国の前国王を殺害したのも、彼であるということを、我々は聞いています。また、卑屈にも人民の知らぬところで、色情に惑わされた如何^{いか}わしき行為も少なからずあり、と聞く。彼の神をも恐れぬ呪われた行為は、甚だしく人民の信頼を裏切り、

また侮蔑しているということに相違ない。よって彼に王の資格は微塵も有らず。正義を愛する者よ、弱き者の傍にある者よ。我らと共に戦おう。功名心ある者よ、力のある者よ、我らの下へ集え。我々はこの糾弾と共に、また女王ジョカスの名の下に、新プロイヒ王国の誕生を宣言する』

この宣言は、そのメッセージの送り先である民衆に驚愕をもって迎えられた。しかしながら、この文の真の意味を理解するものは、多いとは言えなかった。なぜならば、彼らの大多数は、日頃、土を弄^{いじ}ることしか知らない農民である。彼らに無知であることの罪は無い。ただ、こういった経緯にもかかわらず、この宣言を少なからず理解し、エルクバルト達の下へ集う者も少なからずいた、という事実のみをここに述べておきたい。

またここで、民衆の注目をこの宣言から逸らし、影を薄めさせた全く別の、新たな驚愕についても述べておきたい。それはプロイヒ王国の西辺を占める大森林地帯——『暗き森』と、その更に向こうにある海とを越えた半島から、何の前触れもなしに訪れた。この半島にあるイベラニア女王国が、同じくこの半島にあるカルサニア王国によって攻め滅ぼされた、ということだった。ただ、民衆が驚愕した部分はここではない。それは人間種族以外の異種族——多種多様の人ならざる生き物達が、侵攻したカルサニア国軍に含まれていた、という点に於いてのことだった。それらの種族は、本来ならば人間と相容れることはない。ましてや、人間に服従し、その兵力として行動を共にするということは、かつて前例のないことだった。

第2章第12話 ブロイヒ王国内乱勃発までの顛末（後書き）

これにて漸く『ブロイヒ王国内乱勃発までの顛末』が終了です。かなり長くなってしまってますいません。別に『やつつけ』という訳ではございません。多……。

では次話から、再び本編（？）に戻りたいと思います。

第3章第1話 北ガーラビア大陸

今更ながらだが、この物語の舞台は北ガーラビア大陸と言う。傭兵のデヴィス達とある神との契約によって送り込まれた大陸の名だ。北ガーラビア大陸があるのだから南ガーラビア大陸もあるのかと言えば、もちろんある。ただ、今回の物語ではこの北ガーラビア大陸のみが舞台となる。

さて、この北ガーラビア大陸、大まかに言ってしまうえばほぼ四角形の形をしている。そしてその中央付近一帯から北、北東そして東へ掛けては延々と、鬱蒼とした大森林地帯とそこを縦に走る巨大な山脈によって覆い尽されている。つまりは、この北ガーラビア大陸と言うところは、その殆どを森と山によって占められているのだ。そういつた訳で人間種族は、残された僅かばかりの平地に町を創り、国を創り、そこで歴史を刻んでいた。西辺に縦に長く伸びた土地と、南辺に横に長く伸びた土地に。傍^{はた}から見れば、彼らは狭い土地に押し込められて細々と暮らしている、というように見えるかもしれない。しかし、それは誤った見識だ。

ここに住む人間種族——つまり人はそういつた迫害意識を全く持ち合わせていない。自然の世界は自然の世界であり、人の世界は人の世界である。互いが互いの領域を作って存在している、という無干渉状態なのだ。と言うのも、対立あるいは共存といった選択肢を迫られるほど、人の絶対数が達していなかった。ゆえに自然は征服するべきものという思考も生まれず、かと言って互いに共存するという思想もなかった。

むしろ残された平地さえ持て余している、というのが現状だ。国と国は国境を接することなく、その間には誰の土地でもない空白地帯が存在した。

この、言うなれば緩やかに人間種族に支配された、大陸西辺と南

辺の平地だが、この二つの辺は大陸西南において重なっていた。

前話までの話題の中心だったブロイヒ王国はこの接点に位置した。このブロイヒ王国から北へ行くと、大陸北西の位置にあるローゴイヒという名の国に辿り着く。この国も王の統べる国——王国である。このローゴイヒ王国の人々は、漠然とした予測によって確実なる不安を募らせていた。それは平民も貴族も、そして王家の者たちも、階級に制限されることなく一様に。

北ガールビア大陸の北西から突き出る形で、イベラニア半島という半島があった。つまりはローゴイヒ王国から見て目と鼻の先である。ここに、ローゴイヒ国民の不安の種があった。

前話の終わりに、イベラニア女王国がカルサニア王国に滅ぼされた、ということ述べたと思う。そしてカルサニア国側の軍勢の中には、人間種族以外の怪しき種族も含まれていた、ということも。このイベラニア女王国とカルサニア王国があるのが、このイベラニア半島なのだ。イベラニア半島を征服したカルサニア王国が、半島を飛び出して今度は大陸にくるのではないか。それがローゴイヒ王国に住まう人々の不安の元凶だったのだ。

ここまでローゴイヒ王国云々とお話しておきながら、これから続く物語の主題はこのことではない。再び大陸南西のブロイヒ王国に戻り、今度は東へ東へと転じる。二つ程の国を越えて、さらに東へと進み東の果て——大陸南東の地にまで行くと、そこにウィーラント王国という国がある。

これから暫く語っていくことになるお話はここから始まる。

第3章第1話 北ガリラビ大陸（後書き）

いつもながら、更新遅くなってすいません。

言い訳っぽくなってしまうのですが、筆者は現在海外にいるのです

！ しかもまともにネットに繋ぐことが出来ません……

なのでたださえ遅い更新がいつもより遅くなっております……

ですが細々ながら——消えそうなほど細々ながら、更新は続けていきたいと思っています。

あと今回のお話、説明っぽくなってしまいました……

第3章第2話 テラ達の西へ行く顛末

辺りがすっかり暗くなってしまう前に、テラは家に辿り着くことができた。彼女の住んでいる館の前には心配した祖父のタリテと妹のサラ、またテラの帰りがあまりにも遅かったので間もなく搜索に出されようとしていた使用人や近隣に住む村人達が集っていた。

散々に心配を掛けさせた拳句、ケロリとした顔で帰って来た孫娘のテラに、きつく小言を言ってやろうと近づいたタリテは、彼女が乗っていた馬の背に載るものを見て言葉を失った。

それは寝ているとも死んでいるとも検討の付かない裸の男だった。そしてその裸体の男は道中で落ちないようにと、毛羽立った麻紐で体を幾重にも固縛されているのだった。

奇異な光景に興味を掻き立てられてテラを取り巻く人達に、彼女は得意な調子でことの経緯^{いきわづ}を話し始めた。

今朝、夢で神の使者、大天使カフにお告げを受けたこと。お告げとは近くに『神の戦士』を探し出し、彼の魔王討伐の共をすること。そして彼女は今朝早くから出発し、夕方頃^{やじゆみ}になって漸くこの男を見つけ出したこと。さらに一人で意識のない男を馬に乗せるのはかなり困難な作業で、これに多くの時間と労力を要したことなどを身振り手振りを使いながら詳細に、また大層得意げに語って聞かせた。

聴衆達の方と言えば、平凡な日々の中で起こったこの物珍しい話に興味を抱き、領主の若い娘の話に聞き入った。そこにはテラの話に登場する『神の奇跡』に対する寡黙な信仰心もあったし、畏怖と感嘆の入り混じった驚嘆もあった。彼らは終始、熱心に彼女の話に耳を傾け、それぞれのタイミングで頷^{うなづ}いたり驚きの声を上げるのだった。

テラは自分の一連の体験談が、その聞き手達に浸透して行くのを、

語りながら見渡していた。そしてそこにある種の高揚感を覚えた。

若き語り部は、話の終わりをこう結んだ。

「そしてこれが彼の傍らに落ちていた物です」^{かたわ}

そう言いながら彼女は黒く細長い物体を、高らかに持ち上げた。上質の絹を思わせる木目細かな肌の白い手に摘まれたそれは、漆黒で奇妙な形をしており、木とも金属とも定かではない物体だった。

聴衆の間に低音を主とするどよめきが走った。不自然な支配力を持った沈黙の訪れの後に、誰かが口を開いた。一体、これはなんだね？　しかし、その当然の質問に答え得る者はいなかった。

テラの話が一段落すると、この集まりを切り上げる機会を図っていたタリテは、人々の大いなる疑問もそのまま、村人達にねぎらいの言葉を掛けると、早々に彼らを別れさせた。そしてテラには食事を取って今日はもう休むように勧め、タリテ本人は使用人を使い『神の使徒』と思われる裸の男を客室のベットへと運ばせた。

使用人が退室した後で、タリテは一人薄暗い部屋の中で、ベットに横たわる男を見下ろす。まだ若いその男は、子供のような屈託のない顔で、気持ちよさそうに深い眠りの中に飲み込まれていた。

短い栗毛の頭髮は柔らかさそうではないながらも程よい弾力を持ち、頭皮に対し垂直に立っていた。太すぎない眉、堀の浅い目周り、微か^{かす}な寝息を立てている高くない鼻は、彼を実際より若く見せる効果を持っているように思われた。

これが神の使徒？　タリテはまだそれが真実なのかどうか、決められないでいた。タリテは孫娘のテラが嘘をつくような子ではないことをよく知っていた。だが、ことが夢と偶然によって、あるいは得たいの知れないあやかしによって成されたものならば話は違ってくる。彼は突如に降りかかって来た難題に頭が痛くなる思いだった。果たしてこれは神の御業なのか、あやかしなのか、あるいは単なる偶然の所業なのか。タリテにはこの問題が、まるで神は存在するか

否か、といった神学上の難しい命題と同種のものに思えた。さらに悪いことには、そこには可愛い孫娘の今後の運命も関わってくる気がした。

明日、この男が目を覚ましたならば、何かわかるかもしれない。そう考えたタリテは、自室に戻り寝に入ろうとするのだが、まぶた瞼を閉じると先程の難題が暗闇の中に浮上し、彼の目の前をぐるぐると回り出すのだった。結局、彼は遅くまで寝付くことができなかった。

第3章第3話 テラ達の西へ行く顛末

熱帯植物が過密に折り重なり合うジャングルに、男はいた。湿気と植物の発する匂いで濃厚となった大気は、彼に呼吸することの困難さを覚えさせる程だった。

手には無機質な感触の、しかし良く慣れ親しんだライフルがあった。

男はとても慎重に樹木の中を泳ぐように、一歩ごと枝葉を掻き分けて前進する。ずっとこうしてきた為なのか、顔や体中から汗が噴出し、皮膚に張り付いた。

神経を過敏に研ぎ澄まし、少しの物音、少しの異変を決して逃さないように。また体の動き、一歩一歩の足の運び、掻き分ける枝の撓りしなにも気を配り、僅かの音も立てないよう、また急な動きのないように。男は頑かたくなまでに慎重に進んで行った。とてもゆっくりと。

突然、声がした。

——逃げろ——

驚いた男の足は思わずの出来事に、自然と止まった。男は写真に写る人物のように完全な不動となった。

聴覚の神経を体外へ押し広げるように、耳を澄ます。だが、密林はもう何十年、何百年そうであったかのように静寂であった。ジャングルだと言うのに、虫の声や鳥の鳴き声、葉の触れ合う音さえも聞こえない。そんな在り得ない静寂だった。

きつと空耳に違いない。長い間、辺りの異常が認められず、男はそう結論付けて再び歩き出そうとした。だが不意に、再びあの声が聞こえた。

——逃げろ——

今度の声ははっきりと聞こえた。それも否定のしようがないほどに

はつきりと。

不気味なまでに、その語が男に求めている行動は一つしかない。全力で逃げ出した猫のように、男は静から動へと転じた。即ち、後ろを振り返るとほぼ同時に全力で走り出した。枝に顔を打ち付けられようと、根に足を纏れさせられようと、濃密なジャングルを突き抜けた。

しかし、恐怖の存在と言おうか、恐怖そのものと言おうか、そういったものの存在を背中^{うしろ}の皮膚で感じ取っていた。

男は走る速度を増す。次々に迫る枝が、剥き出しの頬や手の甲を引っかけ、大腿を打った。が、どれだけ速度を増しても、背後にいるものの存在感が次第に大きくなるのが分かった。

遮^{おどろ}二^{ふた}走る男は、とうとうそれに肩を掴まれた。

力強く肩を引かれたために、男は態勢を崩して倒れそうになった。よろめきから素早く身構えると、それは目の前に立っていた。

それは女だった。しかも男の良く知る女だ。それは、男の恋人だった。

「なんでこんなところ……」

男は言い終わらない内に気付いた。目の前に立つ、彼女の異様さを。彼女は普通の生きている人間らしからぬ質感をもつてそこに存在していた。

彼女の顔は無表情に男を唯見つめている。男は動けなかった。声を出すこともできなかった。一分だろうか、五分だろうか、あるいは10分だろうか。男にとっては絶えられないほど長い間、彼は生気のない無言の恋人を目の前にして立っていた。

そして、彼女は突然動きを見せた。男を見つめる目の無表情はそのまま、口のみが左右に長く釣りあがり……笑った。その不気味な笑みに、男は全身の毛が逆立つほど驚いた。

男のいる世界は暗転した。

男は見知らぬ部屋のベットの上で目を覚ました。体中に嫌な汗が、

先程の悪夢のように張り付いていた。薄気味の悪い夢の余韻と、知らぬベツトの上で寝ているという状況への戸惑いが、混在していた。やがて頭へと血が巡り、思考能力を回復する。そしてある重要なことを思い出す。それは『神との契約』のことだった。

あれは夢ではなかったのか？

第3章第4話 テラ達の西へ行く顛末

テラが見知らぬ裸の男を連れて帰って来た日の翌朝のことである。タリテの屋敷は、とある二つのエネルギーに溢れていた。こんなことはあまりないことなのだが、この屋敷は喧騒に包まれていたのである。

というのもタリテとテラが朝食の席で言い争いを始めたからだ。そして言い争いは食事が終わった後も続いた。二人とも大分前に朝食をすませていて、テーブルの上は厄介ごとに巻き込まれまいとする使用人達によって、早々きれいに片付けられていた。

年老いた主人と年頃になった若い娘が二人、そして一握りの召使のみが住む館である。名家、とまではいかないにしろ、一地方に住む田舎貴族であるにしろ、曲がりなりにも貴族の館である。普通に考えてみても騒がしくなるうはずがない。

しかし、この時この場所はそうでなかった。

この二人、一度決心を固めたことはなかなか曲げようとはしない。それがたとえ間違っていたとしても無理に押し通してしまう質なのである。この祖父にしてこの孫あり、といったところだろうか。

口論の原因は昨夜テラがつれ帰って来た男だった。テラは、自分は『神の戦士』の案内人を拝命したのだから彼について行くと言い張った。一方、タリテはタリテで頑なにそれを認めようとはしなかった。

「なんでいけないのですか！」

孫娘の叫び声に近い訴えにも、老人の顔色一つ変えることはなかった。

「お前はまだまだ、一人前にはなっていない。」

老人は年相応の落ち着きを保って孫娘の願いを退けようとする。

「しかもお前は女じゃないか」

祖父タリテの威厳ある静かなる怒りを含んだ声に対して、テラの方も一歩も怯むことはなかった。まさにこの祖父あつてのこの孫。それどころか、祖父の言葉は益々テラの心中を熱く掻き乱した。

「お言葉ではございませんが、お祖父様。私を半人前とおっしゃいますか。女と、そこらにいる娘と同じとおっしゃいますか！それならば言わせて頂きましょう。ぜひ、言わせて頂きましょうか。この辺で、いえ、お祖父様の領地の内でもかまいません。その中に剣の稽古で私を打ち負かせる者はいるでしょうか？どうですか？いませんでしょ？それなのに私を一人前ではないとおっしゃるのですか？」

「とにかく駄目なものは駄目なんだ！」

それは返す言葉に窮したタリテの、今までの言い争いで貯まりに貯まった血のたぎりを込めた咆哮だった。顔面には真っ赤に成るほど血が昇り、強く握った拳が小刻みに震えていた。勢い付いていたテラも、これには怯んだ。食堂は部屋の隅から隅まで張り詰め、何物も身動きできなくなったかのように停滞した。

「それでも私は着いて行くんです。」

テラはか細い声で言い切った。

この緊迫を破ったのは女使用人のドチエだった。ドチエは初老に差し掛かった割腹の良い女性で、長くこの屋敷に仕えた彼女は、他の使用人達を仕切りこの屋敷の雑務全てを統括していた。

他の者が寄り付こうともしないこの部屋に、彼女は一切の躊躇をも見せる事もなく入って来ると、即座に言い放った。

「なんですか！ はしたない！ お二人ともいい大人なんですから、子供みたいにはしゃぐんじゃありませんよ。お客さんがびっくりなさるじゃないですか……」

ドチエの『お客さん』という単語に、つい先程まで言い争っていた二人は同時に反応した。そして太った使用人の背後に、昨晚運び込まれた男の姿を認めたのだった。

第3章第5話 テラ達の西へ行く顛末

つい先程まで激昂^{げっこう}のただ中にいた親子二人は、謎と神秘に包まれた客人に啞然としていた。彼はこの二人の前で召使が運び込む料理を次々と平らげていったのである。それは決して品の良い食べ方というわけではなかったたので、タリテはこの男が素性の知れない怪しい者であるという確信を益々強めた。

タリテは男が朝食をすっかり平らげ、葡萄酒で口の中の物を流し込むのを辛抱強く待つてから、丁寧な口調でもって尋ねだした。

「さて、お腹は膨れたかね？ 喉の渴きは癒えたかね？ それでは少し話をさせて貰っても宜しいかね？ 結構。昨日のことだ。私の孫娘、テラといってここに座っているこの娘のことなんだが。このテラが昨晚、倒れている貴方を見つけてこの屋敷へと運んで来たんだ。裸で倒れていた貴方を、だ。馬に括り付けてね。そして私の召使いに貴方を客室のベットまで運んでもらったんだ。とてもよく寝ていた貴方は、そのまま今朝まで寝たままだった。」

タリテはここで一区切りつけ、客人が話を理解しているのを確認する。口調はゆっくりと穏やかであるものの、老いを感じさせない輝きを持った二つの瞳が、真っ直ぐにこの男へ向けられていた。

「それで、だ。私達は貴方のことを何にも知らない。貴方の名前さえ、聞く機会が無かったのだからね。だからまず貴方のことを教えてはもらえませんか？ 貴方のお名前は？ 貴方は何者で、どうしてあんなところに倒れていたのか？ こう次々と質問を投げかけて失礼とは思いますが、どうですか？ お話して貰えますかな？」

これはさっきまでの穏やかな口調とは異なり、言葉の節々に意図的な、有無を言わせぬ重圧が塗り込められていた。堪らず孫娘がこの男を助けようと口を開きかけたのだが、タリテは彼女が一言も発せない内にこれを手で制した。この狡猾な老貴族は男に何の予備知識

も与えないで置いて、鎌を掛けようとしているのだった。皺に覆われた顔の皮膚とは対照的に、眼光は鋭く活気に満ちていた。

「まず、私の名前はデイベス。」

と、デイベスは何の躊躇も見せずに言った。

「デイベス・ブラックモア。名前がデイベスで、姓がブラックモア。アルファベットは……。」

ここでデイベスはハツとする。ここで、朝起きて召し使いのドチエに連れてこられ、この親子の喧嘩に到るまで、話されていたのは英語やフランス語、ドイツ語でもなく、彼の全く知らない言語だった。しかし不思議と彼はその言葉の意を解するばかりか、自分で話すことも出来たのだ。デイベスはこの現象を神ハスという者によって付加された知識なのではないか。今はそう思うしかないように思われた。

翌々考えてみれば、彼がこの新しい世界に来て以来、まだ考える時間——今の状況を纏める時間を与えられていなかった。本当に遠いところへ来てしまった、という考えが始めて深く彼に^の押し掛かった。

「これは関係ないですね。いえ、気にしないでください。何でもないことです。それから……私が何者か、ということですね。私はアメリカ合衆国という国の者です。恐らくご存知ではないでしょうが、で、何故、あんなところに倒れていたか、ということですが……。」

デイベスはどのように説明するかを整理するのに、若干の時間を要した。

「話は少し複雑です。実は私は……傭兵です。戦ってお金を得るという職業です。そう、傭兵はご存知ですか。」

相手の正体をとうとう掴んだぞと、タリテは狡賢く老人らしい笑みを浮かべた。ただ、まだ話を聞こうという姿勢は崩さずに、語り続ける若者の日に焼けた顔を見つめながら、押し黙ったままだった。

「そしてアフリカのコンゴという国で戦ってました。……これは大

変説明しにくいことなので、私の言いたいことを正確にお伝えする自信はないのですが……このコンゴという国も私が生まれ育ったアメリカという国も、ここからとても遠いところにあるのです。と言つても、そこはあなた方が想像する『とても遠いところ』よりも遙か遠く、それこそあなた方の想像が到底及ばない位に離れた場所なのです。お分かりになります？　そこはこの地上の果てまでの何千、何万倍遠いのか、それすら分らない位に遠くなんです。いえ、これは決して比喻ではありません。文字通り、言葉どおりの意味なんです。……そう、そこはもう二度と帰れないほど遠くに……」

デイベスはどこか遠くを見ているようだった。話が不思議な方向へ流れだした。そう感じた老人は、先程まで浮かんでいた余裕の笑みを徐々に崩していた。

「そして私はこちらの神によつて、この地へと連れてこられたのです。」

なんと！　今まで沈黙を守っていたタリテだが、とうとう信じられないといった調子でそう叫んだ。静かにしてよ、という非難を込めた視線をテラは祖父に向けた。

デイベスは構わず続ける。

「これは契約でした。そう契約です。所謂、傭兵としての契約です。彼が雇用主で、私が雇われの兵隊として。……ただし、この命を賭けた奉公に支払われる対価はお金ではなく、この地での『人生の延長』でした。」

タリテとテラは静かに、デイベスの言葉に聞きいつていた。デイベスはこのとき、どこか遠くに思いを馳せている様子で、テラには自分達二人を殆ど意識していないように思われた。

「私が……ここから遠く離れた場所、コンゴの戦場にいたとき、私はある三人の仲間とよくチームを組み作戦を共にしていました。そして彼の地での、最後の戦場もその三人と一緒にでした。」

デイベスは何度も、遠くを見るような眼差しを作つては、そのとき

の情景を脳裏で再演しながら思い出し、少しずつゆっくりと言葉にした。テラは初め、『神の戦士』に対しての畏敬の感情しか感じなかったのだが、次第に彼のその眼差しと表情に引き込まれていくのを感じた。

「この時の作戦は、とある敵部隊と遭遇し奇襲を掛け、ある程度の被害を与えた後に直ぐ離脱する、というものでした。私達のチームは、それまでに何度もこの種の作戦をしたことがあり、今度の作戦も到底、失敗する筈がありませんでした。……ありませんでした……

……が、失敗したんです……。」

デビスの表情が陰^{かげ}って来たことに、二人は気付いた。

「そして私は死にました。胸を撃ち抜かれたんです。（そう言いながら、デビスは撃たれた箇所を指差した。）他の三人も同様の運命を辿ったと、神ハスに聞きました。私達は全滅してしまっただんです。そして私は嫌な夢を見た後にこちらで目を覚ましました。」

いつの間にか、薄暗い余韻^{うな}がこの食堂に満ちていた。この異邦人の話を聞き終えて、老貴族は低い音で長く唸^{うな}った。この若者の話は、作り話にしては妙に懲^こった部分があり、話し方も自身の経験した悲劇の真实性を強く訴えていた。第一、孫娘テラの『お告げ』の話しと一致していた。どうもこの目の前の若者が『主に使わされた戦士』ということらしい……。それが狡猾な老貴族の出した結論だった。

実を言えば、タリテが何か目論^{めづ}んでいることに、デビスは早くから気付いていた。素性の知れない客人に対して丁寧な態度で接してはいるものの、それとは裏腹にある、巧みに隠された訝^うしむような目付きを察知していた。

「ねえ、お祖父さま。これで私の言っていたことが、本当のことだっただけでしょ？」

「思い出したように、屈託の無い顔でテラは祖父に伺った。これに対してタリテは、軽く肯定しただけだったが、それでもテラは嬉しい悲鳴を上げた。」

「よかった！ 本当によかった。だってそうでしょ？ 主は私に言

われたんですから。なのに何も出来ず、何もしないなんて考えられません。お祖父さまつたら私のことが心配でしょうがないから、許して下さるなんて思いませんでした。ああ、これで旅立つことが出来ます。これで主に賜^{たまわ}った使命を果たすことができます。」

「私はお前に行って良い、なんて一言も言っていないぞ。」

テラの浮かれていた心は、タリテのこの一言によって、地に叩きつけられた。

「私はこちらのデイスさんの話が本当だ、ということに同意しただけだ。何もお前に行って良い、と言ったわけではない。」

テラは何を言われているのか理解できない、また何と言っていいのか言葉が出てこない、というように口をパクパクと開閉させていた。

「よもや、私がお前の旅を許す、と思ったのではなかるうな」

放心する娘に、止めの一撃^{こと}が加えられた。テラは勢いよく立ち上がった。怒りで紅潮させた顔で、己^{おのれ}の祖父を見下ろしていた。彼女に弾き飛ばされた椅子が、倒れて大きく鳴った。強く握り締められた娘の白い手は、小さく震えていた。そしてやはり何かを言おうとするのだが、口を開けたまま声にはならなかった。やがてテラはこれ見よがしに落胆の態度を示し、それでも押さえきれない、怒りを込めた足取りで、食堂から出ていってしまった。

第3章第6話 テラ達の西へ行く顛末

残された二人は啞然とするばかりだったが、すぐに老祖父は孫娘の非礼を詫びた。そして今後、デビスはどのようにして、神の使命を遂げるべきかが、その使命を受けた者と田舎の老貴族の間で話し合われた。

まずこの世界での基礎知識を身につけること。世界情勢を知ること。この世界で一般的移動手段である乗馬を習うこと。仲間を探すこと。デビスの受託した使命の解釈——魔王とは何者なのか、どうやってそれを見付け出し、打ち倒すというのか。これが老若の二人の男が出した課題だった。

「余り出発が遅くなっても如何いかにだろうが、四、五日ぐらい遅れても変わらんでしょう。そうゆう詳しい予定は主しゅは示されておらんのですな？」

タリテは若き戦士に対して敬いと、まるで友人のような親しみを込めた話し方をするようになっていた。デビスは、キリスト以外の者を『主しゅ』と呼ぶことに小さくはない違和感を覚おぼえつつも、異教の老人に話しを合わせて答えることにした。この先、何度もこのような文化の違いを目的の当またりにする、そうゆう仄ほのかな予感が過よった。

「はい。主は必要最低限のことしか、仰おつられませんでした。地上へ降りたら西へ行け。それが……主の仰おつられた、私の取るべき行動の全てです。」

「西か……。」

タリテは呟いて、何か想像を巡らせているようだった。その様子は彼をどこか遠くへと旅立たせているようだった。デビスには彼のその穏やかな表情を造形する顔が、心なしか若返っているように見えた。

その日の午後から早速、タリテ等によって、この世界への来訪者

のための講習が始まった。

テラの妹のサラは、上級者・下級者に対するあらゆる状況に応じた挨拶の仕方に始まり、テーブルマナー・貴族の心得などといった、礼儀・作法に関連するものをデビスに教えた。これはデビスが『神の戦士』として行動するならば、必ず身分の有る者と接することがあるだろう、というタリテの配慮によるものだった。ただ、この若すぎる教師はしばしば話が有らぬ方向へずれがちで、デビスは我慢強くそのお喋りが終わるのを待たなくてはならなかったのだが。

他にはテラとサラの家庭教師兼仕付け役であるハイラ婦人がこの大陸の歴史と一般教養・世界情勢・宗教等を教え、タリテがこの世界における戦闘の行なわれ方、戦いのスタイル、簡単であるが魔法に関して等、戦争に関係あることで、この老兵自身が知り得る限りの知識を余す所無く教え込もうとした。この二人の教師にとつて、デビスは優秀な生徒であり、短い時間で展開される膨大な知識を、貪欲に吸収していった。特にタリテが教えた戦争に関する分野に強い関心を示し、少しでも疑問があればすかさず質問した。これに対してタリテの方もタリテの方で、若者に自分の培^{つちか}ってきたことを語って聞かせるのが非常に嬉しいらしく、丁寧に詳しく教えるのだった。その為、講義の内容は広がるばかりで中々進行せず、二人の話は夜更けまでに及んだ。

馬術——乗馬に関する技術——は、馬番が教えた。デビスは駆け足までなら、なんとかできるようになった。当初はこの馬術はテラが教えてくれる筈だったのだが、先日の祖父とした口論の一件以来、ふさぎ込んでしまっていたので、タリテは彼女の名を講師のリストから除外してしまったのだった。実際、デビスが多々の講習を受けている期間、テラは食事時に家族へ顔を見せるだけで、それ以外は殆んど姿を見せなかった。

いよいよ出発となる前日、馬術の講習から戻ってきたデビスは

タリテに呼ばれて彼の書齋へと招かれた。デイベスがそこへ赴くと、部屋の中にはタリテの他に若い青年がいた。老貴族はこの青年をユリス、と紹介した。

「初めまして。トルメス地方領主ユーズ家の次男、ユリスと申します。貴方にお目にかかれて光栄です。」

ユリスは活気があり、されど礼儀正しい柔らかい優雅さを備えた若い貴族だった。タリテの説明によれば、この若者がデイベスに付き従って『神の使命』を手助けしてくれるという。テラの代わりだそうだ。

「ユリスの保護者である叔父には、あなたと同行する許可を頂いています。実は彼の父親とは昔からの馴染みでしてな。もうこの世にはいないのですが……。彼の父、ユーズとはよく肩を並べて戦ったものです。忠義に厚い、良き騎士でした。そのユーズの息子なんですから、出来のいい青年ですよ。私が保証します。きっと彼自身の修行にもなるだろう。」

そう言つて、タリテは若き騎士を眺めた。頼もしい者を見る目つきだった。

「私がこのような役割を果たせるなんて。言葉に出来ないほど感謝しています。デイベスさんもどうぞ遠慮なさらずに、何でも私にお申し付けください。きっと満足のいく働きをしてみせますよ。」

ユリスの歳は十五という。しかしながら、デイベスはとても頼もしい印象を受けた。何より、この大地に不慣れなデイベスにとって、同行者の存在は願っても無いことだった。

ただこの同行者の件で、デイベスが気掛かりになっていることもあった。テラのことである。『神のお告げ』では、彼女こそ正式な『神の戦士』の案内人なのではないか。彼女こそデイベスの同行者として、神に選ばれたのではないか。そうなると、現在の状況は神の意に反することであり、これによって何か不都合なことが起こるのではないか？ 神の怒りを買うのではないか？しかし、デイベスにはタリテの家庭問題に触れてまで、この部分に固執することが躊躇^{ためら}う

踏われた。自分ではもうどうしようもできない、大いなる流れに身を任せるしかない。デイベスはそう感じるのだった。

第3章第7話 テラ達の西へ行く顛末

旅立ちの前日は、明日から長い旅が始まる、ということ忘れて
させてしまう程、何事もなく淡々と過ぎ去っていった。そんな平凡
な日の午後を、デイビスは旅支度に費やした。とは言っても殆ど手
持ちの無い彼は、これに關してもやはり、タリテに面倒を見てもら
わねばならなかったのだが。夕食では出立するデイビスとユーリス
のために、細やかながら晚餐が振る舞われた。食事を終えて暫くは
歓談の時間となったが、やがて一人また一人と自室に戻って行った。

やがて地方貴族の館にも、厳かな闇と静けさの時間が訪れた。明
日の出発に備え、見送る者も、見送られる者も、心地よい寢息を立
てて夢の王国へと旅立っていた。しかし、この甘美な睡眠を貪るべ
き時に、たった一人起きている者がいた。祖父タリテによつて、栄
誉な思いを断念させられたテラである。彼女は『神の戦士』との同
行を、祖父に拒否されて以来、自主的に謹慎に似た行動を取ってい
た。食事時以外、殆ど人前へは出ず、その食事どきでさえ少しも会
話らしい会話をしなかった。

だがこれは、見せ掛けだったのだ。この若き女騎士は、少しも夢
を諦めてはいなかった。彼女は慎ましく生活を送りながらも、どう
すれば『神の戦士』と一緒にいくことができるのか、そればかりを
思い巡らせていたのだった。

テラは今、暗い部屋で一人、膝を抱えてベットのの上に座っていた。
瞼を薄く開けていたが、それは少しもまどろみを寄せ付けようとし
ない眼差しだった。むしろ何かしらの決心を秘め、何か目的の物を
見つめる力強い瞳だった。テラは長いことその姿勢のまま、皆が寢
静まるこの時間を待っていた。彼女は漸く時が訪れた、と判断する
と、予め計画していた行動を開始した。

ベットから降り立ち、音を立てないように静かに歩いて、部屋のドアへ近づく。軋む音を最小限に食い止めながら、扉を恐ろしくゆつくりと開けた。頭一つ分程の隙間が開いたところで、テラは小さな頭部を、その隙間から差し出した。僅かな月明かりさえ届かない長い廊下は、どこまでも暗闇で、どこまでも静まり返っていた。どこにも人の気配がないことを確認したテラは室内に戻り、オイルランプに火を入れた。ランプの光量は最小限に絞られた。彼女は光源を持って再び扉へと近づくと、もう少しばかり木戸を押し開け、部屋から抜き出した。

行動を開始して以来、少しずつ不安が湧き出し、水かさを増すのを感じ始めていたテラであったが、暗い廊下へ出てみると、不安の水溜りが一挙に深さを増し、恐れの色合いを帯びた。

私は、間違ったことをしているのではないのか？ この数日間、幾度も自問した疑問が再び彼女に問いかける。心の中を、落ち着かない気持ちが始める。今にも眠っている誰かを、夢の世界から引き戻すのではないか、と思えるほど心臓が高鳴っている。

私は、もう決めたのだ。テラは波立つ水面を押さえつけた。今を逃して、一体いつ、こんな機会が訪れるというのか！ 彼女はそうやって、怖気づいた心に一喝を加えた。そして決心が定まると、テラはまた静かに歩き始めた。しかし目に見えぬ恐れは、これで去ったわけではなかった。彼女が一歩進むごとに、逡巡と焦りと恐れとが、交互にやってきた。もう何度、葛藤したことだろうか。もう何度、立ち止まらずにいられたのだろうか。頼りなさ過ぎるランプの灯りだけを頼りに、一歩、また一歩とテラは足を進めた。その速度では気の遠くなる程に長い廊下を進み、陰影で構築された暗い階段を昇って行く。階段の踊り場では、不必要に大きな窓から、不気味に風に揺らめく木々が顔を覗かせていた。三階に辿り着き、再び廊下を進みだす。再び不安の行軍が始まった。しかしながらここへ来て、二階の廊下を歩いた時程の不安をテラは感じなかった。長すぎた不安感に麻痺してしまったのだろう。そうこうして、テラは

漸く目的の部屋の前に立つことができた。

テラは一瞬の躊躇を示した後に、思い切ってその部屋の扉をノックした。音が響かないようノックする力を抑えたしまったために、思いの外、小さな音しか鳴らなかった。彼女はもう一度ノックした。今度は丁度良い音になったと思った。少し待つが、部屋の中の反応はない。三度目のノックを強めにし、部屋の主の名前を呼んだ。部屋の中で、低く呻く声うめがした。もう少し、と思ってテラは続け様に小さい声で呼びかけた。すると部屋の者がやっと起き出したようで、暫く布のこすれ合う音がした後、扉の向こうから誰何すいかの声が上がった。

「誰？」

「私よ、サラ。テラよ。」

テラは妹の問い掛けに答えた。

「お姉さま？」

というたつた一つのフレーズに、『お姉さまがなぜこんな時間に、ここへ来たのか』という疑問を含めて呟きながら、テラの妹サラは鍵を上げて扉を開いた。まだ眠気まなこの少女にテラは、話があるの、とだけ手短く断って、自身を妹の部屋の中に滑り込ませた。部屋の中から扉を閉めると、テラは漸くホッと一息つけた気がした。サラが眩しがるのでランプの灯りを消して、二人で並んでベットに腰掛けた。

「話があるの。とっても大事な話が……」

怪訝そうな顔を崩さない妹に、テラはそう切り出した。サラは黙ったままだった。二人の姉妹は暗闇の中で、暫くそうして見詰め合っていた。視線はそのまま、姉は妹の手を取った。サラは、テラの瞳には、何ごとか尋常ならぬことが秘められているのに気づいた。テラは先を続けた。

「私、あの人に着いて行こうと思う。」

「あの人って……」

そこまで言って、サラは漸く、まどろみの王国から抜け出した。そ

してテラが暫く見たことのない程の驚きの表情を作りながら、サラは姉の意図を全てを理解した。そしてこの愛らしい妹は、姉に縋りつくように抱きついた。泣き虫の子供をあやす様に妹を宥めながら、テラは改めて説明して聞かせた。テラにはそうすることが、義務であるように思われた。

たった一人の姉妹を残して、私は旅立つ。『神の戦士』であるデイビスさん達と……。これは仕方ないことなの。だって、私はそうゆう使命を『主』に、与えられたのだから。だから泣かないで、サラ。だから悲しまないで、私のサラ。確かにお爺様には反対されたけど……。確かに貴方を置いて行くのは、とても辛いことだけど……。これは仕方ないことなの。私が決めたことなの。……。それにね……。この旅はもう一つの目的があるの。私たちにとっても大事な目的が。そう。そんなに驚かないで。貴方が気づいた通り……。私はお父様とお母様の敵を探すわ。^{かたき}そしてこの手で……。大丈夫。大丈夫よ。そんなに心配しないで。……。わかった。約束する。きつと無事に帰ってくると約束する。無理はしないと約束する。だから心配しないで、サラ……。

姉の言葉を聞き終えて、サラは一層激しく咽いだ。^{むせ}テラは愛する妹が泣きつかれ、眠ってしまうまで彼女の傍に居てやらなくてはならなかった。

やっと眠りに着いたサラを置いて、テラは部屋から出た。そして廊下の奥のほうを見やりながら長い時間、立ち止まっていた。そこには祖父のタリテの部屋があつたのだが、やがてテラは踵を返して自分の部屋へと帰って行った。^{きひす}

第3章第8話 テラ達の西へ行く顛末

朝が訪れた。出発の朝である。デイビス達の門出を歓迎するように、空は見渡す限りどこまでも青く澄み渡っていた。

タリテの館の一同は朝食をすませると、旅立つ者達の準備が整うのを待つて、見送りのために外へと出てきた。その顔触れはタリテを始めとして、孫娘サラ、彼女達の家庭教師ハイラ婦人、そしてドチ工他、手のあいている使用人達。つまりは館にいる者の殆どが、姿を見せていた。しかし、テラはいなかった。彼女の顔が見えないことを訝しみ始めたタリテにサラは、テラは具合が悪いから部屋で休んでいる、と告げた。タリテはそれに対して素っ気なく、そうかとだけ言った。

見聞きしたことのないこの世界に、文字通り裸一つで放り込まれたデイビスは、今や物質的にも知識・精神的にもすっかり、長旅の準備が出来ていた。朝の湿り気を含んだ肌寒さの中で、彼は体の内に気力がみなぎっているを感じた。まだまだ未知の部分の方が多いこの使命に、不安がないと言えは嘘になるのだが。ただ、デイビスはこのとき、それを果たすことが出来ることのように感じていたのも事実だった。

デイビスが表へ出ていくと、外で待つていた皆の、感嘆と熱い視線とが一斉に降り注いだ。デイビスは軽い高揚を覚えつつ、馬番から馬を受け取った。それは馬術の訓練中に、デイビスが馬番と相談しながら選んだ、気は多少荒いものの、若くていい脚を持つ栗毛の雌馬だった。彼女は毛を綺麗に整えられており、苦戦の末に自分の新しい主となったデイビスを認めると、嬉しそくに鼻を鳴らした。デイビスは彼女の鼻を撫でてやった。

デイビスは手綱を引いて、励ましか別れの言葉に逐一答えながら、人々の間をゆつくりと掻き分けていった。その一群を抜けた先にタリテとサラ、そして同行するユーリスの三人が待つていた。始めに

サラが口を開いた。

「とても大事なお役目ですけど、どうかお気を付けて……。そして……」

と言いかけて、いえ、何でもありません、と言葉の続きを飲み込んでしまった。デビスはサラが、何か大切なことを語ろうとしているのではないかと気にはなつたものの、タリテと別れの挨拶をしている内に、このときの喚起はどこかへ忘れ去られていた。

「いよいよ、この日が来ましたな。」

「ええ。無事にこの日を迎えられたのは、貴方を初め、皆さんに良くして頂いたからです。心から感謝しています。」

「いえいえ、当然のことでしたまです。全ては主の、思し召しなのです。道中、お気を付けて。ユーリスのことを宜しく頼みます。」

頼もしい若者ですが、まだ若いところもある。……では、貴方の旅に、神のご祝福が注がれることをお祈り申します。」

一瞬のことであつたが、デビスはとある違和感を覚えた。それは老人タリテも、やっぱり何かを言おうとしていたのではないか、ということだった。だが、大した確証もないことだったので、このことも忽ちの内に、記憶の奥底へと仕舞い込まれてしまった。

デビスは言い尽くすことのできなかつた感謝の言葉を胸に残して、およそ一週間滞在した館を後にした。この一週間足らずは、とても長かつた。初めて知る歴史、初めて触れる文化。アメリカ人の彼にとつて、この擬似中世欧州の世界は、異様な親近感とともに馴染みにすぐわぬ異文化が確実にあり、この混合によつて、しばし軽い混乱を来たした。出来得る限りの準備は怠らなかつた筈なのに、何か——大切な何かを欠いているような気がしてならなかつた。

もう一人、若き騎士ユーリスはと言うと、故郷を遠く離れるということが始めてのことらしく、馬を歩ませながら殆んど後ろを振り返っていて、その目に映る光景を、心に焼き付けているようだった。

程なくして、老貴族の人々や館も、見慣れた森や閑散とした集落も、近くの小川や水車小屋も、なだらかな土のうねりの向こうへと飲み込まれ、消えていった。それでも彼らはまだ、旅立ちの余韻を振り切り、駆け出し始める程、遠くへは来ていなかった。そんな、半端な位置をのろのろと進んでいた時だった。

「あそこに誰かいます。」

と、ユーリスが換気したのを見れば、確かに誰かいる。小高くなつた丘の上から、馬に跨り駆け下りてくる。小柄だ、とデイビスはその人物を見て思った。それに、どこか見たことのあるような人影だとも思った。小柄で細い体つきが、乗馬の律動に合わせてしなやかに揺れている。長い髪が風に吹かれたシーツのように靡なびいていて、その一本一本が中空で散つて舞う。馬の鬣たてがみが、尾が、その髪と同じリズムを刻む。その乗り手は、女のようなだった。

彼女の駆け下りて来る速度は、デイビスらの進行に合わせて緩められ、やがて二人は、その女騎手がこちらに近づいて来るのだと悟った。

彼女の乗る馬の四本脚が速足に移った辺りで、デイビスはその騎手が老貴族タリテの娘、テラであることに気付いた。ユーリスもそれに気付いたようで、二人は顔を互いに見合わせた。何故、彼女がここにいるのだろう、という表情で……。

「テラさんじゃないですか！ 何をしているんですか、こんなところで。」

テラへ声が届く程に近づいたところで、ユーリスが声を張り上げて訊ねた。彼女の馬の背には、旅立つ二人をちよつと見送りに、と言うには大げさな程の荷物が載っていた。彼女は何かとても思いつめた、余裕のない表情をしていた。ユーリスの問いには答えず、デイビスを見つめたまま馬を降りた。斜面を馬で駆け下りて来たせいで、

少し息が上がっているようだった。テラは騎乗しているデイビスの足元まで近寄り、殆んど彼に縋りつかんばかりに、嘆願の言葉を口走った。

「お願いです。私を……私を旅に、一緒に連れて行って下さい。お願いします！」

「そんなことを言われても……。」

デイビスは口籠った。デイビスは、タリテの屋敷で目覚めたとき、食堂でテラとタリテが言い争っていたことを思い出した。デイビスがユーリスを見ると、お手上げです、任せます、と彼の顔が語っているのを見た。

「お願いです、どうか……どうか一緒に連れて行ってください。」
デイビスがどうしたものか思索している内にも、若い女騎士は頼み込んでくる。

この娘を連れて行くなんて無茶だ。歳は十八だったろうか。タリテ家で聞いた話から察するに、彼女は確かに腕の良い剣士なのだろう。しかしだからと言って、年端の行かない娘を連れて行くことはできない。この、先の見えない旅だ。そもそも旅というものは困難が付き物であるうし、さらに若い女性にとってはなお更難しいことになる。長い時間、馬で移動する。野宿することもある。何日も風呂にすらは入れないこともある。小用を足すにも、その辺りでという訳には行かない。そして多に危険が存在する。もしも彼女に何かあったら、あの世話になった老貴族に合わせる顔がない。——やはり断るしかない。デイビスはそう決断した。

「駄目だ。あなたを連れて行くことはできない。」

このように思い入れている娘には、きつぱりと断らなければならぬ。そう感じたデイビスは、少々冷たい言い方でそう言い放った。テラは、そんな！、と悲痛の声を出し一瞬は怯んだものの、直ぐに気を持ち直した。

「お願いですから……お願いします。一緒に連れて行って下さい。何でもしますから。私にはこれしか無いんです。」

テラの手は、デイビスの馬の手綱と鐙をがっしりと掴んで、死んでも放さすものか、という構えだった。デイビスが馬を歩き出させても、彼女は手を離すことなくついて来る。テラのしつこさに、デイビスは痺れを切らしつつあった。いっそのまま駆け出して、無理やり引き剥がしてやるうか、とさえ思い始めていた。

「私が女だから……私が女だからいけないんですか？　だったら私、女を捨てます！」

この言葉はデイビス達を絶句させた。そして直後に、怒りをデイビスの体内に噴出させた。なんてことを言うのだろう。なんて聞き分けの無い娘だろう。デイビスの心には、しがみつくテラを張り飛ばしたい、という衝動が忽ち満ちた。

「誰か来ますよ。」

コーリスが、先ほどテラを見つけたように、言った。デイビスは彼の視線を追って、来た道を見た。テラも見た。見れば一人の男が馬を駆って、急速に近づいていた。

「ああ、あれは……。そんな……。もう気づかれるなんて……。もう終わり……。もう、私はお仕舞いだわ。」

テラは力なくそうこぼして、そのまま地面にへたり込んだ。デイビスは訳が分からないままに、今までの勢いを完全に失って座り込むテラのが、少し哀れに思えた。

後から追ってきたのは、果たしてタリテだった。彼は一同の元に着くなり、怒号を上げた。

「テラ！　お前はなんてことをしているんだ！」

とても老人とは思えない、軽い身のこなしでタリテは馬を飛び降りると、座り込んでいる孫娘に詰め寄り、右手を大きく振りかぶり、彼女の頬を張り飛ばした。テラはそのまま後ろへと、倒れこんだ。タリテは激しく息を切らしていた。タリテは早く大きく、肩で息をしていた。上昇した体温と、どうしようにもできない怒りが、この老人の鼓動だった。

「立つんだテラ！　お前の根性を叩き直してやる！　ここどころ

大人しくしていると思ったら、やっぱりこんなことだった。さあ立
て、わからず屋！」

地面に伏していたテラは祖父を見返す。顔は鮮やかなピンクに紅潮
し、目と鼻からは体液が流れ出して肌に張りつき、日の光を反射し
ていた。

「わからず屋は、お爺さま……あなたよ！ 何で私が行つては駄目
なの？ ユーリスと一緒にいくというのに私は駄目？ 何で……何
で主選ばれた私が行つては駄目なの？ 女だから……私が女だか
ら駄目だつて言うの？ 私があなたの孫だから駄目だつて言うの？
そんなの関係ないじゃない！ これは使命じゃない！ 第一、お
爺さまも、若い時には進んで、戦争に駆け付けていたつて言ってい
たじゃない！ 何で私だけが……。何で私だけが……。」

テラのこの声は聞き取るのが難解なほど、涙で滲み、崩れていた。
タリテは孫の嘆きを黙って聞いていた。彼の激しかった息も、大分
落ち着いていた。この時、タリテは何故か空を見上げた。多少の雲
はあるが、よく晴れ渡った青空だ。青空は、地上にある全ての者――
彼ら、ちっぽけな者でさえも――を内包するかの様に見下ろして
いた。輪郭のぼやけた白く輝く雲が、恐ろしい程の時間を掛けて、
そのままの形で、青い空の海をゆつたりと流れて行く。乾いた風が、
上空も地上も等しく、洗い去つて行つた。

私が若かった頃、こんな空のときもあったらう。数え切れない
程に何度も。タリテは思った。その時私は、一体どんなことを思っ
ていたのだろうか。どんなことを考えていたのだろうか。そんな、尽
きることはない彼の思慮は、浮かんでは、忽ち透き通る青の高みへ
と吸い込まれて行つた。

暫くその状態は続いた。若い娘の嗚咽し、風が草の葉や木の枝を
掻き鳴らし、誰かしらの馬が時々鼻を震わせた。デビスとユーリ
スは、この祖父と孫の仲裁に入ろうと馬から降りたものの、自然と
それは終息したため、手持ち無沙汰に二人の様子を窺っていた。

「血は争えんな。」

ばそりと、老貴族は呟いた。テラはよく聞き取ることができず、えつ、と聞き返した。彼女の祖父は空を見上げ、腰に手を置いたままの格好だった。腰に挿した二刀の剣のみが、彼のシルエツトの中で前後に突き出ていた。タリテは何事か思い立ったようで、無意識に自分の馬の鬣を撫でるたてがみデИБスに近づいた。二人は二言三言言葉を交すと、デИБスは少し考えた後、諦めたように肯定の返事をした。タリテはデИБスに深い感謝の意を示すと愛する孫娘に向き直った。「いつまでもめそめそしているんだ。そんなことで泣いていたら、旅について行くことなんか出来んぞ。」

そう言つてタリテは手を差し出した。テラは祖父の意を汲み取ることができない。

「ああ、もう！　これだけ言つてわからんか。だから……その……お前もデИБスさんに同行していいと言っているんだ！」

失意の底にいた若き娘は、暗い穴蔵から、歓喜の悲鳴を上げながら飛び出した。差し出されていた祖父の手を握り絞めると、一気に自身の体軀を引き起こして立ち上がり、タリテの腕ごと千切れる程、ぶんぶんと上下に振った。そしてタリテの体に抱きつき、皺に覆われた顔に、何度もキスを浴びせた。

「お爺さま、大好き！　やっぱりお爺さまなら分かってくれると思つた。なんて素晴らしいんでしょう！」

「それではデИБスさん、テラのこと何卒、宜しく願います。」

二度目の別れ際、タリテは言つた。長くない物言いであつたが、そこに深い気持ちが含まれていることは、その言い方と態度で伝わった。そしてタリテは娘の名を呼んだ。

「テラ、これを持って行きなさい。」

そう言つてタリテは自分の指している二刀の剣を抜き、差し出した。

「これはお爺様の大切な……。」

テラは断ろうとするが、タリテは優しく目を閉じて顔を横に振った。
「持つて行きなさい。」

静かだが、強制力のある言葉だ。テラは黙って、それを受け取るしかなかった。その時、テラの中で、急激に熱いものが込み上げてきた。それは彼女の胸を埋め尽くし、瞳の奥を熱した。泣いては駄目だ、とテラは何度も自分を言い聞かせるが、その衝動は止まる術を知らず。タリテが更に話しかけても、ただ頷くことしか出来なかった。駆け出した二人の男の馬に続き、テラは自分の馬を進めるが、視界はぼやけ、嗚咽が込み上げる。こんなでは駄目。もっと強くないと。テラは駆ける馬の上で泣きじゃくりながら、固く心に誓った。ふと、彼女が後ろを振り返れば、馬上に佇む孫思いの老人の姿が、憂愁を背負った小さな影となって、暖かな日差しが降り注ぐ景色の中に浮かんでいた。

第3章第9話 メレプス達の停滞する顛末

二人の男がそれぞれに馬に乗り、地表を撫でる風となつて草地を駆け抜けて行く。一人はストレートの長髪の、もう一人は癖毛で毛先が丸まった短髪の、黒髪だった。そして共に黒い鱗状の片が連なつたスケイルメイルに似た鎧を上に着ている。腰には平たい薦つたのような剣を下げていた。

二人の内、一人の名をメレプスと言った。メレプスは違和感を感じ始めていた。馬がギャロップで生み出す軽快なリズムが、いつもと違う。それから直ぐに、メレプスは馬が左前脚を庇うように走っていることに気が付いた。並走していた弟のシジプスから大分、遅れていた。

メレプスはシジプスを呼び止めると、降りて馬の脚の様子を見た。体重を掛けないように持ち上げられた脚を、メレプスはそと押さえて見てみると、足首の辺りが一回り二回り太くなって腫れがり、黒ずんでいた。

「これは駄目かもしれない……」

心配そうに首を巡らす馬の鼻を撫でながら、メレプスは諦めの言葉を洩らした。背後からシジプスが窺う。

「こいつは困つたなあ。これじゃ、もう乗れないや」と言ってから、辺りに視線を巡らし

「その馬は諦めて、ギハスロイ（人間種族）でも狩るかい？ あいつらから譲って貰うつてのは？」

と不敵な笑みを浮かべながら言った。メレプスは軽く否定の意味を込めた溜息をしながら、小さく頭を左右に振った。

「それはいい。今は……余計な面倒は起こさない方がいい。それに俺はニョールのことが気に入っている」

そういつてメレプスは立ち上がり、馬の汗に滲んだ頭から首にかけてを撫でた。

「そうか……」

そう答えるシジプスの声は、どこか寂しそうだった。

地図で確認すると、幸い次の村までそう遠くはなかった。

二人はそれぞれの馬を引きながら、人々の往来で削られた道を歩いた。特に急ぐわけではなく、閑かな日差しの奏でる、焦れつたい程ゆっくりとしたリズムに足取りを任せた。さっきまで馬で疾走していたときの、強く風が擦り抜ける感触が、まだ肌に残っていた。そしてその感触の上を、優しい風が撫でていった。ときどき、甘えるようにメレプスの肩へ、愛馬が顎あごを載つけた。メレプスはその度ごとにあやしてやった。

様々な人達が彼らを追越し、すれ違っていた。酒樽や器具、雑貨を運ぶ商人風のでっぷりとした中年男。土が斑模様となった農耕具を積んだ荷車を引く痩せた年取った牛と、その荷車に乗った農民親子。綺麗に磨かれた黒い艶のある四頭立ての馬車の小さい車窓から、蔑むような一瞥をメレプス達にくれて、カーテンを閉めた御夫人。買い出しに行くどこだかの使用人、等々。

追越し、すれ違う人々の人種、階級、目的は様々であったが、のらりくらりと徒歩で行く二人には、この閑かな日に仕事などで忙しく行き来する彼らが滑稽なようであると共に、哀れでもあった。

夕刻、彼らは目的の村に着いた。

まずは寢床に古びた旅籠を確保すると、メレプスはその旅籠の亭主に聞いた馬に詳しいという男を、旅籠の若い給士にチップをやって呼びに行かせた。その男は昔、どこそこの領主の馬番をしていたらしい。

男はメレプス達が食事を取り終わる前にやってきた。男は片膝を地に着いて、奇妙なくらいに優しい手つきで二ヨールの患部に触れた。

「こいつはひでえすなあ、旦那」

メレプスのことを『旦那』と呼びながら、そう言った。

「石ころか何かを踏んづけて、足首を悪い方へ曲げたんでしょ。まあ、最悪って程じゃあねえですが、これじゃ、暫くは動けねえです。これは……そうすなあ……四、五んちは、そつとしとかねえとイケねえでせ」

農家出の者に独特の間延びした言い方だった。これは四、五日、ここで過ごさなくてはいけないな、とメレプスは思った。今から別な馬を探して適当な馬を見つけられる当てもない。そもそもそれほど急がなくてはならない訳じゃない。

男は皮袋の中から取り出した、何らかの植物が主成分と思われる緑色の物体を二ヨールの足首にまわり付けると、懷から取り出した布切れを上から巻き付けた。そしてメレプスが少し多めに払った『氣持ち』を受け取ると、そそくさと帰って行った。

借り受けた、大人二人には狭く感じる程こじんまりとした部屋で、シジプスはベットのの上に体を横たえていた。左側を下にして、体をくの字に曲げ、膝下は膝間接の可動範囲が許す限りで、ベットの縁から斜めにダラリと垂れ下がっていた。メレプスが入って来ても彼は少しも挙動することなく、そのままの姿勢でひび割れたガラスのはめられた窓から、行く当てのない視線を外界へと投影していた。メレプスは彼の足元側の隙間を通り抜け、窓際に据えられた、割れ目の入った小さなテーブル脇の椅子にどっかりと座り込んだ。そして弟の方を見た。

「五日程かかるらしい」

「そうか」

至極簡潔に、そう答えるシジプスの返事は霞んでいた。彼はそのときでさえ、身動きしなかった。メレプスはシジプスの何も映っていない視線を追って、窓に映る景色へと、その黒い瞳を向けた。

そして彼の黒い瞳には、とある幻影を浮かび上がらせていた。

何故、こんなにも気になるのだろう。

メレプスは、旅程で数日前に見かけた風変わりな女のことを思い出していた。その風変わりな女とは、女性でありながら乗馬ズボンを穿き、馬に乗り、そして帯剣していた。彼女は彼らに声を掛けてきた。……さんを知りませんか、と。誰を探していたのか、もう覚えていない。顔の形や、どういった声だったのかさえ覚えていない。ただ、あの眩しいほど透き通った、あの眼差し。それだけはどうしても忘れることが出来なかった。それを見た瞬間に、メレプスはその深みへと引き込まれてしまった。何故なのか自分でも分からない。相手は女、それもギハズロイ（人間種族）なのに……。

「何を考えてる？」

メレプスの思考を引き裂いて、シジプスの言葉が飛び込んで来た。気付けば、シジプスは上体を起こしていて、やっとその目の内から窓の景色が拭^{ぬぐ}われた。ただ、そのあどけなさの残る顔には、探^{とげ}る棘

「何でもない」

と、素っ気無く言った後

「少し、ウィーノ族村のことを考えていた」

と、付け足す。メレプスが外の遙かを眺めながら言ったこの声は、寂しげな室内に空虚に響いた。

第3章第10話 メレプス達の停滞する顛末

暫くするとメレプスは鞆の中から、紙を取り出した。何処となく、手持ち無沙汰だったからなのかもしれない。取り出したのは二つの封筒だった。彼はそれぞれの封筒から手紙を抜き取った。手紙を大事に扱う手つきからも、それらの差出人が、彼にとって大事な人物であることを伺わせる。メレプスはまず、その内の一通を手にとつて、目だけで読み出した。その手紙は、次のように書かれていた。

『メレプス様、シジプス様、お久しぶりでございます。遠く異国の戦地で、如何お過ごしでしょうか？ 卑しいギハスロイ（人間種族）達の中で息苦しい思いをされながらも、さぞかしご活躍されていることとお察しします。

こちら、イベラニア半島にも動きがあり、私も兄達もそのイベラニア女王国との戦役に参加したしだいには、以前に手紙にしたためたとおりです。そしてついに、その首都イベラントも我々の手に落ちた次第です。ウィーノ族の主だった人達も数多く参加したというのに、メレプス様達が一緒にいなかったのが残念でなりません。

さて、私のことはさておきー多少、残念ではありますが、お伝えしなくてはならないことがあるのですー我らウィーノ一族の運命に関わることがありました。ありました、とは言つても、私達に具体的に何かが起こった、という訳ではないのですが……。

つい二、三日前のことなのですが、大巫女ギュプエンヌ様の占いの儀式によりますと、我らの王が定まりました。つまり、何を申したいのかといいますと、私達ウィーノのみならず、この地上に存在するあらゆる生命の王が、大巫女ギュプエンヌ様の占いによって裏付けられた、ということなのです。これだけではメレプス様、シジプス様には私が何を言いたいのか、何をお伝えしたいのか、分から

ないかもしれません。しかし、それは仕方ないことなのです。なぜならこれは、それほど大それた偉大なことだから。どうか私の説明不足をお許してください。

ですが心配には及びません。なぜなら私の兄カーパスが、只今、お二人のためにその詳細を書いているからです。どうぞ、兄の便りをお待ちください。

貴方の未来の妻、マリピスより 貴方のご慈悲を願って』

続けてメレプスが手に取った、二通目の手紙の内容は以下のものだった。

『愛する人へ。

ごきげんようメレプスにシジプス。二人とも、さぞギハスロイ共を蹴散らしていることだろう。幼い頃より二人を知る俺には、その姿を思い描くのも造作ないことだ。ギハスロイでは、少々物足りないかもしれないが、まあ、それはしかたがない。我らを満たしてくれる戦場は、そうそうあるわけではないのだから。お前達が加勢すること、トルバラントを始めハス教圏の国々にとっては救いになるだろうし、敵のモーリア人達にとっては災難となるだろう。我々にとって、ハス教とイーシユア教の戦いなどどうでもよいことなのだが。まあ、お前達もその戦場で、悪くない経験をしていることだろう。だが残念ながら、それも終わるときが来た。

と言うのも大巫女ギュプエンヌ様の占式で、我らウィーノの運命が定まったからだ。いや、この世界の運命が定まった、って言うてもいい。つまり、我らの王となるべき方が分かったのだ。この地上の覇者と成るべき方が！

お前達も耳にしていると思うが、カルサニアの新しい王がいるだろう？ バルガ王のことだ。カルサニア国に現れ新王となり、イベラニア女王を破ってイベラニア半島を統一された方だ。

この方だよ。この方こそが、我々の王なのだ。須く、あらゆる生命を統治なさる方なのだ。既に部族長会議で、我らウィーノもこのお方に着いていくことに決定した。

前に手紙で書いた通り、イベラニア女王国との戦いでは、私やマリピスを含めた何人ものウィーノが既に参戦している。これは本当に名誉なことだ！ お前たちも戦を求めて遙々、トルバラントという国の辺境まで行っていなければ、我らと共に、この至高の誉れに与れたというのに。

だが、それも仕方ないことだ。己の技を高めるために戦を求め放浪するのは、我らウィーノの定めであり、伝統であり、そして宿命なのだから。

それにこれからのことを思えば、そんなに残念がることでもないのかもしれない。なぜならこれから、バルガ王によって、世界を統一するための聖なる戦いが始まるのだから。

妹のマリピスも、お前の帰りが待ち遠しくて、いてもたってもいられない様子。しかし、それ以上に私はお前の身を案じてならない。もちろん、誇り高き我らウィーノ一族の者が、卑小のギハスロイに遅れをとるとは思ってはいない。だが、戦場には不意の事故は付き物だ。何か良からぬことが起こらないかと、憂慮してしまう俺を許してくれ。これもお前のことを思っていることなのだから。

お前達の帰りを心から待っている。だから早く戻れ。

貴方の妻の兄にして、真実の愛を知る者 カーパスより』

メレプスがこの二通の手紙に目を通したのは、一度や二度ではない。最初にこの手紙を読んだのは、トルバラント国の戦地でのことだった。

「シジプス。これをどう思う？」

「何が？」

シジプスはメレプスの方を向いた。少しやけになった語気だった。メレプスは何を読んでいるのか、シジプスには容易に想像することができた。最近、メレプスが件の手紙を眺めながら思慮の海へ沈んでいるのを何度も目にしていたからだ。

「何がどう思いつて？ マリピスのことか？ カーパスのことか？ 我が兄貴は、故郷が恋しくてしかたないらしい」

「新しい王のことだ。カルサニア国の」

茶化す弟に、メレプスは冷静に自分の意を伝える。シジプスは合点がいったようで、ああ、と頷きながら背に枕を置いて、ベットの上で頭側の壁にもたれた。そして両手を頭の後ろで組み、静かに口を開いた。

「我らを統べる王、…… って言っても所詮はギハスロイじゃないか。どれ程の力量の持ち主か知れないが……。果たしてどういった人物なのか、怪しいもんだ」

「そこなんだ」

メレプスは自分の考えをまとめながら話しているようだった。

「親父達、部族長会議の老人達を含め、ウィーノの者達は一体どうしたというんだろうか。相手はただのギハスロイだというのに。誰もウィーノらしくない」

これにシジプスも同意した。

「ああ、皆、まるで気違いみたいに浮かれちゃってる」

遠い故郷。ウィーノ村の者達。そこで何かが起こっている。バルガという男は一体、何者なのだ。そういった未知の不吉の不気味さ、望郷の懐かしみ、そしてその壊れる儚さとが、入り乱れてメレプスの内に溢れた。

「とりあえず……」

とメレプスは言いながら、ランプの明かりを吹き消し、立ち上がった。

「その新王様つてやつをこの目で拝まなくては……」

メレプスはシジプスの横たわるベット脇まで静かに移動する。

「そうしなければ、何も分らない」

そしてメレプスは横たわる肉体に覆いかぶさった。両手に両手を重ねて、その自由を奪う。兄の名を呼ぶ口を、肉食獣となつて噛み付くように塞ぐ。互いに、相手の固い筋肉を、弾力の表皮の下に感じた。本能のままに、相手の温もりと汗ばんだ肌を求め、そして肌で感じる。始めは頑^{かたく}なだった意地は、忽ち快樂の水面^{みなも}の中へと連れ去られ、影も残さず消えてしまった。残ったものは、肉欲の衝動的な脈動と、温かく包み込む温もりへの依存。

シジプスと思う。故郷にかえれば、メレプスには婚約者があり、愛する人がいる。だから、せめて故郷に帰り着くまでは、ここに溺れていた。彼は健気に、されど粘り着くようにメレプスの唇を求めた。

第3章第11話 ゴードン達の西へ行く顛末

気が付くとカルムは小高い丘の上にいた。

波が織り成すうねりの一瞬を切り取ったような、千差万別の造形美で出来たなだらかな大地の起伏と、厚く隙間なく空に蔓延^{はびこ}りながらも、少しも光を遮らずそれ自体輝いているような高層雲の連なりが世界の天井となつて、天と地の間隙に広がりを見せる空間が、全周囲、見晴るかす彼方^{かなた}へとのびていた。そして雲の僅かな切れ目から零れた幾つもの斜光が柱となつて、この巨大な天井を支えているようだった。

世界は、朝日のような、清涼な日差しが何処までも降り注いでいた。カルムは光と温かみの抱擁を感じた。

この時、彼のすぐ背後に立つ男の存在に気がついた。この光りに溢れた世界でなお、その男は周囲に劣ることのない煌々（こうこう）しさを帯びていた。しかしながらカルムは、不思議と煩^{わづら}わしい眩^{まぶ}しさは感じなかった。そして何故だか本人も分からなかったのだが、カルムはその者が人でないことが分かった。そう分かれるとカルムの内で恐れ多い感情が沸き起こり、その場にそのままに居ることが憚^{はばか}られる気持ちとなった。

そんなカルムの心の内を読んだのか、そんなに萎縮することはない、とでも言うように、光の男は微笑みをその顔の上に現した。そしてゆっくりと腕を肩の高さまで持ち上げると、とある方角を指差した。カルムはそれが西であることが分かった。すると新たな視野が彼の目前に広がり、見知らぬ男を映し出した。その見知らぬ男は裸で、鍛えられた筋肉質な体をしていた。

これが貴方に会う前に見た『告知の夢』です。と、カルムは馬上

で馬の律動に体を揺らしながら、ゴードンに語って聞かせた。

ゴードンとカルムは村で出会った翌日の午前を、旅支度に割り当て、その日の午後には村を出た。その道中でのことだった。

「『告知』——というのは、神から私が、貴方を導く使命を授かった、ということです。今にして思えば、あれは神のメッセージを携えた尊い天使だったのに違いありません。そして目覚めた私はベツトから跳ね起きると宿を飛び出し、西へ向けて馬を駆け出しました。するとどうでしょう。果たして、貴方がいらしたのです！」

と、カルムはゴードンに出会う迄の経緯を説明した。カルムは熱心なハス教信仰の信者のようで、このような栄誉ある役目を与えられたことを大変に嬉しく思う、という言葉がこの話の最中、何度もゴードンに聞かせた。

更にこの敬虔な傭兵は続けた。

「そして昨日——いえ、厳密には目覚める前のことなので今朝と言うのでしょいか、またそのような夢をみたのです。場所は違いましたが、その世界もやはり光に包まれていました。すぐに分かりましたよ。それが『あの世界』だってことが。そしてかの天使——きつと大天使かそれ以上か……兎も角も、位の高い天使に違いありません。その天使がまた現れました。そして私が貴方を西方にある都——王都ブロイヒへとお連れする『ヴィジョン』を与えられたのです」と、カルムは、今朝、新たに与えられたお告げのことと語った。『ヴィジョン』とは、頭の中に浮かんで来る、風景とも違うイメージ、だと彼は補足した。

しかしながら、二人がそれぞれに体験した一連の現象を持ち合わせ見ても、そこに潜む神意が何を求めているのか、二人が何を成し何を目的とすればよいのかは、全くのところ分からなかった。そして彼らは、事あることにこうして現れるであろう『神の啓示』を待ち、その指示に従う他に道はない、と結論付けるしかなかった。

こうして二人は、王都ブロイヒのある西へ向けて移動したのだが、その道すがら、カルムは自身の身の上話をした。ここにはこれから長い旅の同伴者となる者に、自分のことを知って貰おう、という目論見があつた。

自分はトルバラントという国から来た、とカルムは語り始めた。

カルムは、元々はブロイヒ王国領内の出なのだが、傭兵としてこの東の果てにある国まで赴いていたらしい。この信仰に篤い信心家は、心に信仰の火を熱く燈して、かの戦地を踏んだ。イーシュア教圏と隣接するこのトルバラント王国は、その地に住むモーリア人からハス教圏を守る砦となつている。そのため、周辺各国からの援軍や傭兵が集まつている。

だが今は、モーリア人国家同士のいざこざで、異教徒の攻勢もすつかり陰りを見せていた。結果、解雇された、或いはされることを見越した傭兵達は、新たな戦のきな臭さを嗅ぎ付けて、遙々ブロイヒ王国へと移つて来ているらしい。そしてカルム自身もその一人だった、と話の区切りに呟いて笑つた。

テキサスで牧場を営む家庭に生まれ育つたゴードンにとって、乗馬の感を取り戻すのには、それほどの時間を必要としなかった。物心付いたときには、祖父の膝に乗つて、手綱を握っていたのだ。乗馬など、少しも苦であるはずはない。カルムは彼の手綱捌きを褒めた。

「中々のものですな。いえ、馬乗りのことですよ。貴方がいた世界には騎士がいらない、と聞いていたものですから。ただ、少々我々の世界とは、乗馬のスタイルが違ふようですが。いやいや、なかなかどうして、立派なものだ」

「騎士じゃないが、俺はCowboy^{カウボーイ}だったからな」

「”かうぼおい”ですと……。それは、つまり、貴方の世界の騎士

ですか？」

「いや、カウボーイだ。ただの牛飼いだ」

ほお、とカルムは感嘆の声を上げた。彼の脳裏には様々な憶測が渦巻いていた。きっとこの方は、一介の牛飼いの家庭に生まれながらも、相当の努力と紆余曲折と波瀾万丈の人生を歩まれて来たのに違いない。そうやって”神の戦士”にまで成られたのだ。カルムは頭の中で勝手な想像を張り巡らせておいて、勝手に目頭を熱くさせていた。

ただ、この故郷の記憶を呼び起こす話は、ゴードンの胸の内に淡い痛みを伴う、望郷の思いを点火した。そういえば、俺はもうあそこへは帰れないのだろうか。馬の規則的な律動に合わせるように、この切ない思いは揺らめいた。しかしこの炎は、まだ小さかった。このときは、まだ小さかった。

神の使命を与えられて歓喜したり、人の話を湾曲させて泣いたり、と、カルムはうっとおしい程に感情豊かな男だったが、ゴードンはカルムのこと嫌いではなかった。寧ろ、初見でお互いに薄々感じていたとおり、二人は似た者同士というか、性格が似ていて、とても息が合うのがわかった。則ち、二人とも豪快で熱血漢、という性格だったのである。これも神の計らいか、と二人は運命的な友情を感じ始めていた。

そして二人は、それぞれの傭兵としての身の上話や戦場での話、武器の違いについて話して花を咲かせた。二人を乗せた馬は、一歩一歩と王都ブロイヒへ向けて、蹄を踏みしめるのだった。

第3章第12話 ゴードン達の西へ行く顛末

ブロイヒ王国の首都ブロイヒ。国の名を冠したこの都市は、その広大な敷地を厚さ五メートル、高さ二十メートル程の城壁で周囲を隙間無く囲われた、北ガールピア大陸でも有数の城塞都市だった。長い歴史と風化の滲み込んだこの分厚い城壁は、その下を通りすぎるものに、あるいはここを攻めようとする者に、計り知れない威厳ある威圧感によって押し掛かった。城壁にはほぼ等しく間隔を置いて塔が並び、それら地上にそそり立つ巨大な柱はこの城塞を、見た目に於いても実質に於いても、より堅牢なものとしている。そして城壁南側の中央付近には、幅広の城壁の中にあつてな厚い、それ一つで砦を思わせる城門が、地中深くに根を下ろして構え、下を潜り抜ける人々を足元に見下ろしていた。

カルムに連れられたゴードンは、その重厚な一連の巨大人工建築物に感嘆の深い息を吐きだしながら潜り、ブロイヒの城下都市へと入っていった。

彼らの入門は問題なく成された。大陸各地から集結しつつある傭兵達や、蟻のように都市を行き来する商人や旅人達に紛れ、何人もの守備兵の配置された重厚な城門を通り抜けて仕舞うと、後は平凡と言える居住区が見渡す限りに広がっていた。ただ遠くに、小高くなった丘とも小さい山とも言える盛り上がりの上に、そそり立つ城が大地を覆う住宅街の先に見えた。

その見えるままを、ゴードンは言葉にした。ああ、とカルムは頷いて答える。

「そうそう、あれですよ。あれがこの国の王が住まう、ブロイヒ城にござい」

カルムの高らかな声によって、この国の中枢であり権力の象徴である人造建築物が紹介された。

「あれが……」

ゴードンの頭の中でカルムが以前に語った、この国と王が置かれている状況が次々と展開していった。若干十九歳にして、その父が死んだために新王として即位した若すぎる王。そして何故か母を監禁し、その母親を愛人エルクバルトに奪われ、果ては反逆を言い渡された、まだどこかに幼さのあるであろう王。（ゴードンに語ったカルムも、庶民もこの事件については表面的なことしか知らない）王国プロイヒは、国を二分するほどの、動乱に揉まれている。そして混沌の渦の中心に立つその人物が今、あの先にある煉瓦れんがの中にいるのだ。ゴードンは息の掛かるほどの身近かに、国を左右する程の歴史のうねりと、そこに身を投じている若き新王の存在を肌で感じ取り、体を短く身震いさせた。

ゴードンとカルムは、正面大門から真っ直ぐ伸びた大通りを北へ向かって進んだ。大通りに面した軒先には雑貨や金物、青果、肉、魚、衣料等売る商店やカフェ、食堂、理髪、とぎもの師、酒場などが連なつて口を開き、そこかしこに活気のある声が飛び交つて、道行く人々を呼び込んでいた。概して、城壁の中は非常な賑わつてを見せていた。夕食の支度を買う女達、仕事帰りの職人に交じつて、彼らと同業と思われる、肌を褐色に染めた男達の姿もチラホラと認められた。

前途のとおり、城壁のなかには都市ならではの活気に溢れていたのだが、その活気の中で、刺すような鋭利な気配を、そこかしこで感じとらざないわけにはいかなかった。

傭兵らしき男達や、プロイヒ王国軍兵士と思われる兵士らが行き来するのを、何度も目撃したことを始め、売り買いする商売人の素っ気なさ、往来を歩く人々も知らず知らずのうちに急ぎ足になっており、皆、何処かせわしなく行動していた。そして人々は、顔見知

りに出合ったときだけは、その忙しく動く足を止め、これから起るであろう戦争について、何か新しいニュースはないのかと探り合っているのだった。街の人達にとっては戦争に直接、参加するわけではもちろんないのだが、自分の国の軍隊が戦い赴くという事実は、知らずの内に彼らの気持ちを駆り立てる作用をもたらしているのだった。

既に大勢の外来者で溢れていたこの王都で、二人はやつとのことと空いている宿を見つけると、あたかもそれが当然の流れであるかのように、夜の街へと繰り出した。

二人は適当な酒場へと入っていった。そこはその界限でも大きな、『小鳥達の宴』という大衆酒場だった。ランプで照らし出された仄かに暗い店内は、どのテーブルも犇^{ひしめ}き合うように男達が埋めていた。太く粗い作りのテーブルと椅子とが、磨り減った床板、煤けた壁に囲まれた広い店内に詰め込まれていたのだが、2〜5人連れ程の職人風や非番の兵士、その他様々の男達で殆んど埋まっていた。席にあぶれた何人かはテーブルに腰掛けたり、突っ立ったりしながらカップを握り締めていた。そこらじゅうから話し声が撒き散らされ、頻繁に野太い笑い声がそこかしこのテーブルで高鳴っていた。様々の料理や酒の匂い、人の体臭と熱気が充満していた。

二人は丁度空いたテーブルにつくなり、酒を注文した。運ばれてきたアルコールは、忽ちの内に二つの胃袋へと消えていった。液体は食道を流れるように滑っていった。カルムに奨められたプリームという果実酒は、ほど好い酸味を残しながら、ゴードンの喉を潤した。二杯目で、体の芯に仄かな火が燈るのが分かった。

両手一杯に料理を乗せた給仕が、次々に乱暴に料理をテーブルの上に放り出した。肉に掛けられた濃い褐色のソースが、衝撃に耐え切れずに零れる。カルムとゴードンは咄嗟^{とつぱ}にしかめた顔を見合わせたが、給仕がさっさと遠退いてしまうと、再び話ながら杯を傾けた。

そしてたつた今運ばれてきたばかりの、肉類を中核とする久し振りのご馳走を口の中から詰め込んで、満腹中枢を満たいった。

ここで再び登場した無作法な給仕が、野菜と肉のペーストを盛った皿をやはり乱暴に置こうとすると、まだ熱いスープ皿にぶつかって中身がこぼれた。熱いスープはテーブルの上を軽やかに滑って、ゴードンの脚へと降り注いだ。この短い一瞬は、とてもゆっくりと進んだように思えたにも拘わらず、ゴードンは動くということを忘れてしまったように、ただその一抔を他人事のように傍観してしまっただ。頭では逃げるなり避けるなり、何とかしなければとは分かっているものの、脳からの命令がどこかで断絶してしまっていて、体は指一つ動かせなかったのである。

「危ない！」

ゴードンが驚いて椅子から立ち上がると同時にカルムが怒鳴ると、まだ二十歳前後の女給仕は謝った。

「あらら、ごめんなさい」

そして如何にも他人事で無関心さのにじんだ口ぶりで心配の言葉を早口に繕った。

「大丈夫かしら。今、ちょっと急いでいたからもんだから。火傷はしなかった？」

と言いながら、この娘は拭くためのハンカチを取り出した。この娘の無神経な言葉は、被害を受けた本人よりも、その旅の連れを刺激した。

「あんた、どうかしてるんじゃないのか？ さつきからどうも、危なっかしいぞい」

「危なっかしい？ 一体、どうゆう事？」

女給仕は澄ました顔でそう言った。

「さつきから、あんたが運んでくる物は何でもかんでも、零れてばっかじゃないか。酒に然り、肉のソースに然り、そしてスープも」

「そうだった？ 私、忙しいから……」

「いいんだ、カルムさん。幸運にも何ともないようだし。そんなに

気にしなくていい」

「いいや、ここははつきりと言ったほうがいい」

「いいじゃない。本人が良いって言うてるんだから。私、もう行かなくっちゃ。ほら、もう呼んでる。お願い、これで拭いてて」

と言って女は手に持っていたハンカチをゴードンへと放り出した。彼女の手を離れてその布は、何かしらの魔術的作用を受けて、ゆっくりときれいな放物線を描き、無造作に開かれたゴードンの大腿の上に被さった。これに二人の男達はそれぞれの反応を示した。ゴードンは恐れ入ったという苦笑いの前歯を見せだし、カルムは怒りすぎたためか言葉が見つからないのか、何かを言おうとして2、3度唇を開閉させて開いたままその動きを止めた。そんな男達の呆れや抗議を振り払うかのように、女給仕は豊かな腰を左右に振りながらカウンター脇のドアの向こうへ消えてしまった。

第3章第13話 ゴードン達の西へ行く顛末

ゴードンとカルムはその後、失礼な給仕のことをつまみに酒を飲みつづけた。どんな用事かは知らないが、次にまたあの女が来たら徹底的に抗議してやる、とカルムは息巻き、その勢いに任せて酒をあおった。ゴードンはゴードンで、旅の伴侶に宿めの言葉を掛けてやりながら、先ほどの女給仕の威勢のよさを思い出しながら薄ら笑いを浮かべ、やはり酒の注がれたカップをあおるのだった。

それにしても、と木製カップを卓上に置きながらゴードンが口を開いた。

「ああいう自分勝手な女に限って男にもてる。そう思わないか？」

「確かにそうかもしれん。あの女に惚れた男の気が知れんわ」

とカルムは口髭のしたに大きな口を開いて笑った。

「そうだろう。全く、彼女に惚れた男の顔が見てみたいってもんだ。きつと間抜けな面つらをしているさ」

二人の男は、五つ離れたテーブルにまで届く声で、揃って笑い声をあげた。

「カルム殿？」

程よく酔いの回ってきた傭兵を、誰かが呼んだ。カルムは振り向いた。

「おお、カロリーネ殿！」

カルムは赤く染まり始めた顔を綻はしばせながら立ち上がり、近づいてきた男と力強い握手を一降りし、しっかりと抱き合った。

「カルム殿！　こんなところでまた会えるとは！　いやはや、これはなんて素晴らしき巡り会わせだ！　あんなに唐突に居なくなってしまうもんだから……。もう、二度と会えないんじゃないかと思っただぞ。……ん？　さて、そちらに座っていらっしゃるお方は？　これはこれは、お寛くわんぎのところを突然、お邪魔して申し訳ない」

そうなんですよ、とカルムは嬉しさに追いつかない様子で喋りながら、取り合えずこちらへ、とゴードンとカルムの間の席を促した。

重そうな体躯を椅子に落ち着けても、カローネは零れ落ちる喜びを抑えない程の笑顔だった。カルムの導きによってゴードンとカローネが互いに紹介した後、旧知の中年傭兵二人は彼らの関係を語り始めた。

カローネは傭兵隊の傭兵隊長だ。傭兵隊とは言っても名乗るほどの名もなく、戦場で徒党を組んだ者達が最も経験のあった年長のカローネを立てて、集まっている集団であった。

まだ傭兵になる前のカルムが強い信仰心に促され、ハス教圏の防波堤であるトルバラントのとある砦に向かったときのことである。村や町、あるいは道端ですれ違う人々に聞き尋ねながら、ようやくのことで目的地まで辿り着いたカルムは、戦いのことなど何も知らない、やもめの中年男だった。この戦線のハス経陣営側の募集管理所で、配属先として割り当てられたのが、このカローネ傭兵隊だった。

それまで木材を扱うことしかしたことのない職人の手に、金属でできた剣は中々馴染まなかった。カルムは元々、大工だったのだ。だがその職業柄、養われた強い肉体は、強い武器となった。1、2ヶ月も経つと、この大工だった男は傭兵隊長カローネと肩を並べて戦うまでになっていた。

「つまり、カローネ殿は私の師匠であり、恩人なんですよ。彼に様々なことを教えて貰わなければ、私はあの地で主^{あし}への奉公さえかなわずに、殺されていたに違いない」

カルムは、心優しき傭兵隊長に乾杯、と言ってカップを持ち上げた。

妙に自己流で玄人っぽい間延びをさせる、弦楽器の音が曲を奏で

始めた。酒場の客達の視線が自然と、中央のステージへと寄せ集められる。板で作られた小さ目のステージの周囲には、知らぬ間に松明台が設置されており、薄暗い空間に舞台が浮かび上がった。テールブルの間を抜けて、バンジョーのような楽器で単調で陽気な音楽を奏でる男が舞台に上る。ショーが始まる、とカローネがゴードンに手短に言った。舞台へは時々目をやりながら、カルムはこの歳の近い傭兵隊長から、近頃の情勢を聞き出そうとした。

「それで、若い元騎士団長はどうしているんでしょう？」ゴードンはカローネに聞いた。カローネは少し記憶の液面を覗くようにして、やがて語りだした。

「かの騎士団長殿が……。ゴードン殿とカルム殿はどこまで知っている？……そう、お姫様をさらって逃げ出したところまでか。……あなた方はエルクバルト御一行がどのくらいの人数だったか知っているか？ まあ、俺も正確には知らんのだが、40人とも50人とも言われておる。まあ、大体その辺りの数だったってことさあ。これに対して、ブロイヒ国王が差し延べた討伐隊の数は知ってるか？ 200騎だつてよ。鎧を着込んだ騎兵が200騎だ。エルクバルトにしてみれば、これはかなり有り難くはない数字だなあ。例えば彼が優秀な部下だけを連れていたとしても、だいぶ歩^ぶが悪すぎる。ましては彼は、上品な女連れときたもんだ。優しい騎士団長様はレディーのことを気遣って、思うように馬の速度を上げることもままならない。逃げて行けば行くだけ、追っ手との距離は縮まるばかりだ。

カルム、お前ならどうする？ なに？ 分からないって？ そりゃあ、そうだろう。俺でもそんな状況じゃあ、どうしようも出来やしねえ。だが、この騎士団長様はこの危機を乗り切って見せたんだ。知りたいか？ 彼がどうやってこの危機を乗り切ったのかって……。煙を巻き上げながら間もなく200騎の追撃隊が、エルクバルト隊に追いつこう、って時のことだ。とある……。シミル村だかハドッセル村の近くのことだったらしい。まあ、あの辺りのことだ。

追撃隊の馬どもが丘を越えた。そしたら遂に彼等の目に、逃げて行くエルクバルト隊の後ろ姿が見えたのさ。漸く尻尾を掴まえた！とばかりに追撃隊は突撃の隊列を組みながら丘を駆け降り、放たれた矢の如く野を疾走した。エルクバルト隊は苦し紛れに追っ手を振り切るように、林の中へと分け入って行く。追撃隊も放たれた獵犬の如く、一直線に後へと続く。

林の中じゃあ、思うように馬の速度もだせねえ。普通に考えれば、エルクバルト隊もここで終わりだなあ。当然、討伐隊の連中もそう思っていたに違いない。だが、違ったのよ、これが。女の尻を追っかけるように、嬉々として林の中に入ってみると、一角の軍隊程の兵士達が、キレイに隊列を組んで自分達の前にいたんだ。しかも、その隊列の後ろには『何時でも発射できますぜ、隊長！』といったふうで矢を番えた弓の弦を、めえ一杯に引っぱっている奴等までが何人もいやがる。

何でこんな所にこんな軍勢が……って疑問に思っても、今更どうしようもねえ。すぐさま討伐隊は退却しようと後ろを振り返るが、そっちにももう、兵隊達が回り込んでいる。すっかり取り囲まれちまつたんだなあ。そして神に向かって祈る間も、罪多き人生を懺悔する間も、かといって絶望する間もある訳もなく、矢は放たれ、兵士共は中央に向けて包囲の輪を一気に縮めた。こうなっちゃあ騎士様方も、もうお仕舞いだ。命からがら生き延びたのは、50と少しだけだったそうだ」

カローネは酒を流し込んで、渴いた喉を潤した。聴講していた二人も釣られるように飲んだ。

「……これは罠だったんだな。かの騎士団長は聡いことに、ボイニンガ公と良い仲になっていたらしい。エルクバルトは必死に逃げような素振りをして、この北西の鎮守府の元へと近づいて行っただ。そしてこの鎮守府の送った援軍と合流すると、討伐隊を打ちのめしてやろうと、一計を謀ったわけだ」

舞台上では、バンジョーの男が滑稽に曲を締め括り、客達の送る拍手を当然の報酬として頂戴していた。これがあるから、この商売も嫌じゃない、といった顔だ。そして、引き続き今夜のショーをお楽しみください、という言葉を残して、彼は舞台を降りた。

第3章第13話 ゴードン達の西へ行く顛末（後書き）

本作品は、作者の趣旨により文体が変わることが多々あると思います。まだ作者は未熟であり、目下、書くということを勉強中であり、色々と模索中なのです。どうか大目に見てやってください。

第3章第14話 ゴードン達の西へ行く顛末

「ボイニンガ公がエルクバルトと手を結ぶとは……。これは大層な後ろ盾ですなあ！ それで？ 若い王も黙っているわけではありませんまい。それでは王の威信にかかわりますからな。今後、このような反乱分子の気を削ぐためにも、ここで徹底的に叩いて於かないと」

捉えようによつては国王への不敬罪、スパイ行為とも捉え得る会話なだけに、カイナとカローネは顔を卓上で引き寄せ、声をひそめて喋っていた。ゴードンもその内容を聞き取るために、いくらか身を乗り出さなくてはならなかった。

酒場の中央では数人の男女がそれぞれの楽器を手に、中央の舞台の周りへと集まっている。

「そう、カイナ王は軍備を整えている。そしてこの都を見て既に知っていると思うが、傭兵も大勢募集している。だが、問題はそれだけじゃないんだ。わかるか？ 何が問題なのか。ボイニンガ公は他の貴族達も引き込んでいるんだよ」

舞台の周囲では、各楽器の準備が整ったようだ。先程の曲とは一転して、ゆつくりとしたメロディーが生み出され始める。

「これはな、内乱どころの騒ぎじゃない。この国を二分する戦争なんだよ」

「戦争ですと！ これは、なんとまあ……大変なことになりました……」

カルムは過剰な膨張を成す事変のすぐ脇を通りながら、自身は与えられた『神聖な役目』故に、傍らでその大いなる影を足元から見上

げるしかないと悟った。

妖しい色香のある曲に呼び出されて、女が一人、奥の方から登場する。その歩みはリズムに合わせていたが、どこことなく気怠さが滲んでいる。そして体の動きに合わせて、膨らんだ長いスカートの丈と、小顔の頭に止まった大きい帽子の、後ろ斜めに突き出た羽飾りとが揺らめいている。一歩ごとは小さくとも、その一つ一つは強く歩を出す度に細い足首が見え隠れする。

「そう、戦争だ。この国は今だかつて経験したことの無い戦いへと向かっているんだ。戦場は国内全土に広がるだろうよ。兵士はもちろん、貴族、市民、農民、そして女や子供だって恐らく巻き込まれるだろうよ。もう、誰だって傍観者じゃいられないんだ」

「それじゃあ、あんまりですぞ。何か手はないんですか？ 市民を巻き込まない戦いというのは」

女の少々切れ長の瞳のきつさは、長い睫毛によってやわげられ、思わせ振りの目配せを、通り過ぎる左右へと振り撒く。両目の間にはやや小振りの、愛らしい丘がちょこんとくつついている。全体として、大人の女の艶に、子供のあどけなさが少し混じっていた。

「まあ、ないこともないだろうが、それは俺達がどうこうできるようなことじゃあねえ。カイナ王が有能振りを発揮して、短期決戦を決めてくれりゃあ、話は別だが」

彼女はゆっくりと舞台へと歩く。まるで男達の視線を少しでも多く、自身へと張り付かせるように。やがてこの華やかな花は壇上には達つする。真紅の花弁は暗がりの中で篝火かがりびを浴びて、幻想の深みを増す。そして彼女は歌う。戦争に旅立つ男達の悲しい物語りを。

男達は戦争へ行く 初めて恋愛を覚えた若者 年老いた親を持つ者
父親になつたばかりの者

愛する家族 お腹の大きな妻や 甘えることを我慢できずに泣く幼
子 結婚を誓い合つた恋人 大切な人達を後に残して

それは何故？ なぜ行かなければならない

それは愛する者達の笑顔を守るため 温かみに溢れた たつた一つ
の家を守るため 黄金に輝く畑を守るため

男達は振り返つてみる 青々と茂る故郷の森を 馴れ親しんだ山々
を 庭に咲くアカオカの花を 少年の頃によじ登つた木を

最後の故郷の風景を 男達は目に焼き付けながら 生きて必ず こ
こへ帰つて来るのだと 硬く 硬く 誓つた

男達は戦場へ行つた 馴れない手に 剣を携えて行つてしまつた
遠い遠い異国の地 名前しか聞いたことのない 遠い地へと

歌は観客を窒息させる。歌姫は、見るものを陶醉させる。何かに
取り付かれたようにゴードンは、彼女の歌うのを見つめる。あるい
は魅入らせれる。もしこの時、悪魔が来てそこにある魂を盗んで
行つたとしても、ゴードンは少しだつて気付きもしなかつただろう。

赤茶けた大地の上で、文明から忘れ去られてしまつたテキサス州
の我が家が、ゴードンの視界に広がる。まだ老弱を寄せ付けようと
はしない父が、馬としてはかなり年のいつた愛馬に跨またがつて牛を追
つてゐる。もう暫くすれば、彼は雨風と太陽で古びてしまつた家の
ポーチへと戻り、新聞を片手にパイプを吹かせながら、妻の入れた
砂糖が沢山入つたコーヒを飲むだろう。

自分もやがてはその牧場と職業とを継いで、父親のように、仕事
の合間にポーチにのんびりと座るのが夢だつたのではなかつたか。
そして気立ての良い、穏和な女性を妻に貰い、子供を産み、二人の
暖かい眼差しでもつて、庭で玩具のではトレーラーを引きながら、
無邪気に遊びに耽る息子を見守るのが夢だつたのではなかつたか。
それじゃあ……、それじゃあなんで俺はこんなところにいるんだ？

そんな思いが有形無形の様々な形をかたどって、ゴードンの思念を巡る。そうしている内に、懐かしい同級の子をモデルにしていた彼の婚約者の像は、顔を失う。体や頭部は残って動いているのだが、顔の中心が朧おぼろになり、表情が分からなくなる。着ている服などはそのまま、昔に好意を覚えた女の子とは別な人物に思えて来て、不自然な違和感を存在させている。思わず彼は、その不確かな部分を凝縮する。複雑に絡み合った脳の中で、冷や汗が伝う。表情を取り戻せと、意識する。思いが通じたのか、彼女の目鼻などの輪郭が形を取り戻し始める。ゴードンは一瞬、腰を落ち着かせる。だがそれは、なんの懐かしみを持たない顔となる。誰だ、とゴードンが疑った時、答えはすぐそこにあつた。それは今、この世界で、この古びた酒場で、小さき舞台の上で、歌っている女だった。

「ゴードン殿！ ゴードン殿！」

良く知った声が、ゴードンを現実へと引き戻した。

「ゴードン殿、大丈夫ですか？ 余りにもぼーっとしていましたぞ。まるで悪魔にでも魂を取られてしまったかのように」

カルムの瞳がゴードンを窺っていた。ああ、大丈夫です、とゴードンは焦りながら自身の放心を取り繕うとした。

「なあに、ちょっと酔っ払っただけですよ。心配しないで」

「酔った、と言ってもそれはどうやら酒だけのせいではなさそうだな」

とカローネが言い、何かに気付いたような視線をゴードンから壇上の女へと移した。これを見て、カルムも合点がいったようだった。

「ほう！ ゴードン！ そうだったんですな。あの方がさぞかしお気に入りです！ ……ですが、あの歌手、何処かで見掛けたような気がするんですが……果たして何処だったか……」

カルムはそう言って、壇上の女をさらに見つめた。男を見下した瞳。耳の中で感に触る、その声。それらは今日、ブロイヒ城下に入ってから見知ったものだった。

「そうか！ あの女……、そんな馬鹿な。いや、でもきつとそうだ。…… 分かりましたぞ、ゴードン殿。あの女が誰だか……」

「あの人は一体誰なんです？」

簡潔極まる質問が、最もその正体を知りたがっている男から返された。

「あれは、ですね、先程の給仕の女ですよ。ほら、さっきゴードン殿にスープの汁を零した。あの失礼極まりない女ですよ！」

「あの人が……あの人だつて？……」

「一体どうゆうことですか？」

先程の不愉快な出来事の経緯^{いきさつ}を、カルムが傭兵隊長に説明する声が耳に入ってくるまま、ゴードンはあの女給仕の残像を舞台上の歌姫に重ね合わせた。するとどうだろう。あの体型が、あの物腰が、あの顔の輪郭が、瞳が、鼻が、唇が、収まるべき場所を見つけたように同一のものとなつていった。それでもまだ信じ難い。ゴードンはこの作業を一々、一つ一つ何度も繰り返した。頭ではわかっていても、心の中で一致しない。

「ゴードン殿……悪いことは言わない。あの女は辞めておいた方がいいですよ。…… さもないとあなたはきつと不幸になる」

ゴードンを諭^{さと}すカルムの声は、とても優しくかった。それは子供に優しく教えるかのようだった。

第3章第14話 ゴードン達の西へ行く顛末（後書き）

作者の都合（海外出張）でしばらく（3～4ヶ月程）更新することができなくなりました。申し訳ございませんが、どうぞ暫くお待ちください。

第3章第15話 ゴードン達の西へ行く顛末

長い人生経験で以て息子を諭す父親さとのようなカラムの言葉も、ゴードンの内で新生した、感情を困う分厚い城壁を越えることはできなかった。その種の感情を象徴する城と城壁とが、このごく短い竣工期間かんこうにも拘わらず既に完成しつつあったのだ。完成を間近に控えたこれら心の建築物は王都ブロイヒに匹敵しうる堅牢さを発揮し、外から撃ち込まれる他人の言葉はことごとく弾かれるのであった。

「ああ、分かっている」

とゴードンは、コイン一枚分の抑揚も、ランプカード一枚分の重さもない返事を返した。彼らのテーブルに停滞した空気が淀よどんでいた。三人は無言で、それぞれに酒を胃袋へと流し込んだ。

いたたまれなくなつたカローネ氏がその場を離れる際の社交辞令として「そろそろお暇いとまを」と言う前に、酒場の中央で起こった喧騒という高気圧が、滞っていた空気を押し流してしまった。この騒がしくも不穏な色に染まつた不意の風は、かの歌姫と、それに絡むみずばらしい野犬の一群れのような酔つた男達を発生源としていた。兵士とも傭兵ともとれる5人の男達が彼女に、座つて一緒に飲むように言い寄っていた。野犬が獲物を食すのに人目を憚はばかることがないように、男達も己の欲望を剥き出しにしていた。嫌悪感を巧に引き起こす、嫌らしい顔だった。

ゴードンがその模様を見咎めて立ち上がるうと脚に力を込めたとき、カローネが彼の腕に手を置いて制止した。

「あいつ等の顔には見覚えがある。ブブガつていう傭兵隊の奴等だ。質の悪い厄介な連中だ。止めておけ」

ゴードンはその腕を振り切った。一日中走らせた車のエンジンのように熱くたぎった心が、彼を彼女の下へと急ぎ足で歩ませた。

かの歌姫の名を、リンデと言った。

リンデは杉の樹よろしく末広がる衣装の袖から出た腕を、歌の最中にも拘わらず掴まれて立ち往生していた。白く柔らかな腕の肉に、踵かかとの皮のように暑く浅黒い手が食い込んでいた。甘美な世界を創造する魔力を持った歌声も、搾り止められてしまえばその力を失う。離しなさい、とリンデは高圧な態度で抗議するのだが、男の手は少しも力を抜くことなく、隣に座って一緒に飲むよう、強引に勧め続けた。演奏は譜面上で、既に彼女の歌う小節へと進んでいたのだが、こんな状態ではまともに歌うことも出来ず、楽器の奏者達も互いに顔を見合わせ、その音色も殆ど消え入りそうだった。

何時もならこんなことが起こりようものなら、騎士道精神に満ち溢れた鼻息の荒い男達が我先にと立ち上がったて助けてくれる筈なのに、今日に限ってそれが無いことをリンデは訝いぶかしんだ。そしてこの連中が思っていた以上に厄介な者達なのだと薄々気づくに到るのだった。

これは面倒なことになった。一芝居うつて呆ほうけた顔の客達を焚たきつけるか、ここぞというときに今ひとつ気の利かないマスターが協会（ここの飲食街界限の共同体）の腕に自信のある男達を集めて来るかしなければ、この災厄は収まらないかもしれない。リンデは尚なおも強めの抵抗を見せながら、そんな計算を巡らせていた。

ゴードンが近づいて来たのはそんなときだった。リンデは始め、この男も厄介者達の仲間かと思った。だが彼は違った。好きな女の子との待ち合わせにかなり遅刻してしまった若者の脚取りさながらに真まっすぐ傍そばまで来るなり、彼女の腕を捕らえている男へ、怒りの籠こもったバスの声を殴り付けるように言い放った。

「彼女に触るな」

男達はこの展開を予想していなかったらしく、互いに顔を見合わせる、どつと声を立てて笑い出した。

「兄さん、俺達が誰だか分かってんの？ 悪いことは言わない。黙って酒を飲んでいた方が賢い選択してもんだぜ」

彼らのうちで、ゴードンの近くに座っていた頬に抉^{えく}られたような傷のある、20代半ばくらいの男が、立ち上がってゴードンの肩に手を置いて言った。牛が群がる煩^{わづ}い蠅^{おと}を尻尾で振り払うかのように、ゴードンはその手を勢いよく弾いた。その勢いのよさに体ごと弾かれた男は、反動に息巻いたのだが、この輩^{やから}の中で最年長と思われる少し小柄な男がそれを制した。

「あんた、俺達は何者が知っててやってんのかい？」

「ああ、知ってるとも。ブブガとかいう奴らだろう。それがどうした？ お前がそのブブガなのか？」

殆どのめり込むように言ったこの言葉は、男達の失笑を買った。

「残念ながら俺はブブガ様じゃねえよ。俺はイドンってもんだ。

ブブガ傭兵隊の一番隊の隊長をやっている。……どうやらアンタは俺達のことをよく知らなかったらしい。それに免じて今回のことは許してやる。さっさと帰りな」

リンデはこの勇敢な男に、潔く引き下がってくれるよう願った。幸い、気の利かないマスターも助けを呼びに行ったようだったし、思わぬ時間も稼げたって訳だ。リンデにとってゴードンは、もう十分に役立つたのだ。今、必要とされることはことを荒立てないようにすることだ。

「嫌だ、と言ったらどうする？」

それはそこにいた者達が望んだ結末とは異なった言葉だった。リンデさえ、その無謀な挑戦を望んではいなかった。シヨーの前から人手が足りないからと給仕として働かされ、先程から薄汚い男達に纏わり付かれ、シヨーもすっかり台なしとなり、厄介な男達に絡まれ、そしてこの気の利かない向こう見ずな男と思い通りに行かないことが続いたものだから、むしろリンデは腹が立っていた。

「あなた、ちょっと酔っ払ってるんじゃない？ 別に私は助けを求めた訳じゃないんだ。こっちは良いから、大人しく自分のテ

「ブルで飲んでなさい」

「ほら、彼女もこう言っている。誰もお前なんか必要としてないんだよ。帰りな、役立たず」

ブブガー味の男達の蔑む嘲笑とともに、ゴードンはそう言う声を聞いた。と、次の瞬間にはゴードンの拳が、そう言った彼の顔にめり込んでいた。

「彼女がどう言おうが関係ない。俺がこうしたいからこうするんだ」ゴードンがそう言い終わらない内に、後ろの禿げた体躯のいい男が飛び掛かり、ゴードンと組み合った。ゴードンのあいた脇腹にフックを見舞おうとした男は、ゴードンを宥めようと近づいていたカルムにタックルを見舞われ、両者は共に床へ倒れ込んだ。

「ゴードン、助太刀いたす！」

カルムは倒れたまま叫んだ。場は一気に、猫が侵入した鶏小屋の騒ぎとなった。

「ちよつとあなた達、何やってんの！ 喧嘩なら外でやりな！」

と言うリンデの声など、誰の耳にも入っていなかった。取っ組み合っていた大男に頭突きを食らわせたゴードンは金的を膝蹴りして床に沈めたが、テーブルの上から飛び掛かって来た1番隊隊長イドンに引き倒された。倒した相手の顔に2、3度拳を叩き付けると、ゴードンの救出に向かおうとしたカルムは、他のテーブルから駆け付けたイドンの仲間3人に囲まれ、攻撃を返すこともままならなかった。立ち上がったイドンとゴードンは互いに相手を牽制しつつ攻撃の機会を探った。ゴードンはこの即興格闘劇を見守る観客達を、イドンの左右後方に見た。彼らは全財産の掛かった拳闘試合を観戦しているかのように白熱し、何かしらの言語を捲くし立てている。そのときゴードンはイドンの手下に、背後から首と片腕を押さえられた。近づくイドンに前蹴りを放つが、かわされてゴードンは腹を3発殴られた。急速な痛みが下腹部を締め付けた。思わず前屈みになるうとするが、背後の男が一層力強く締め付け、無理矢理立たさせた。呼吸が遮られ、意識が遠退き、目の前のイドンが黒い影に見え隠れ

した。意識が湖面の中へと沈んだ。周りの騒音がとても遠い所——壁を何枚か隔てた部屋から聞こえて来るようだった。しかし沈んだ反動で浮力を取り戻した流木のように、ゴードンの意識は水面に顔を出した。視覚を我が物とすると、イドンが拳を振りかざして近づいて来るのが見えた。さつきまで意識が遠退いていたことが嘘であるかのように、今ははつきりと脳は蠢き活動している。ゴードンは空いている手を頭の後ろへ伸ばし、背後の敵の頭髪を掴む。そして体を低く屈めながら、全体重をかけてその頭髪を前へと引っ張った。背後の敵は痛みに耐え切れず、ゴードンの上を通り越して前面にひっくり返った。空中で弧を描いた彼の踵は、遠心力と加速の力添えを得て、近づいていたイドンの鼻頭にヒットした。立ち上がったゴードンが見下ろしたのは、床に寝そべる二人の男だった。

前後左右からの石礫のような拳の飛躍に、カラムは引き締めた筋肉の鎧で耐えていた。窮地を脱して駆け付けたゴードンが、奇襲の一撃で敵の一人を床へと屠った。

カローネ氏は事が始まったのを見て頭を抱えた後、意を決して一緒に来ていた傭兵達を引き連れて、騒ぎの爆心地へ向かった。ブブガとその傭兵隊、あるいは先程からのイドン達の振る舞いを気に入らなくて仕方がなかった何人かがこれに乗じた。風向きが逆風になりつつあるのを感じ取ったブブガ側の残った者達もこれに応戦する。誰もが入り乱れ、敵を、己の拳に打ちのめされるべき相手を探し求めた。罵声や怒号、挑発や野次が飛び交い、男達の声に混じってときどき女の悲鳴が切り裂いた。本来は人々の胃袋に収まるべきだった羊のローストやらヘルメット一杯分の煮豆やらブーツ3杯分ほどのイモのペーストなどの食物や、あるいは本来なら讃えられながら飲まれる筈だったあらゆる酒などが飛び交い、床上に撒き散らされた。ともかくも『小鳥達の宴』亭はその名に相応しくない賑わいをはちきれそうになりながらその内に押し込めていた。

第3章第16話 ゴードン達の西へ行く顛末

すでにその存在を忘れ去られた頃になって、やっと『小鳥達の宴』亭のマスターが何人もの屈強な男達を引き連れて戻って来たとき、酒場はライオンの飛び込んだ象の檻のごとき喧騒となっていた。

だからこの駆けつけた援軍が、一体どちらが加勢すべき仲間なのか分からずに立ち往生したり、味方を殴り倒してしまったのは仕方のないことだった。しかしながらそういった当初の混乱が去っていくと、明らかに劣勢となったイドン達は、言葉で人を殺せるのではないかと思われるほどの恨み妬みを練り込んだ罵詈雑言を山ほど吐き出して引き上げていった。

傷だらけの野犬達の遠吠えを見送ると、店の中では勝ち鬨^{どき}があがった。

それは寂しい空き地で誰かが上げた一発の打ち上げ花火のように、夜の闇に押し包まれた繁華街で、酒場『小鳥達の宴』亭を一瞬、華やかせた。

ひっくり返ったテーブルや椅子は元に戻され、割れた皿や零れた料理は片付けられた。客達は先程の戦闘で立ち上がった者はその武勇伝を謙虚に、そして大袈裟で誇らしげに語り、立ち上がらなかった者はそれを感嘆したり、立ち上がれなかった理由をこじつけた。若き者はその若さ故に、老人はその老いが故、等というように。

そこかしこで切り傷や腫れた顔をした男が手当てを受けていて、傷薬が染みると唸り声を漏らした。嵐の過ぎ去った酒場は野戦病院のようであった。

ゴードンは騒ぎが落ち着くと色々な人に散々持て囃されながらも、『小鳥達の宴』のマスターに乱闘騒ぎの首謀者の一人だと嫌疑をかけられたが、リンデが弁護を買って出てくれたのでその容疑は晴れ

た。

「ほら、動かないで。じつとしてな。ちゃんと塗れないじゃない」
ゴードンの切れた唇にか細い人差し指で傷薬のオイルを塗り込みながら、リンデは身動きする彼を窺^{とが}めた。2人の背後では、まだ先ほどの勝利に心地よく酔った者たちが13度目の祝杯を讃えていた。

「我等の勝利に、乾杯！」

ゴードンがリンデの手当に頬を緩ませている頃、王都ブロイヒから北西は遙かに位置するフォルツサ城でも、酒で勝利が讃えられていた。

「我等の勝利に、乾杯！」

我等の勝利に、乾杯！　ボイニンガ大公の老いを漂わせ始めてはいたが威厳ある低い掛け声とともに、長いテーブルの両端にいた高貴な身なりの者達は、葡萄酒の入った杯を持ち上げて唱和した。この琥珀の液体もその器も、酒場『小鳥達の宴』で供されていた物とその目的は同じであれど、その値打ちは全く異なるものだった。

祝宴に参加している上級の貴族からそれほどもない貴族まで、各々の企みに掻き立てられた油っこい笑い声を、およそ400年間冷え切った石壁に染み付かせていた。約400年前に建てられたこのフォッサル城は今や、彼ら反王党派の前線基地となっていた。

何世代にも亘^{わた}って暗き森の黒い生き物達の侵入からブロイヒ王国を守ってきたボイニンガ家は、その実績から『北西の鎮守』と呼ばれていた。そして現当主、ボイニンガ大公こそこの反王党派の提唱者だった。彼ら王党派の貴族達は、エルクバルトが保護したジヨカスを取り上げ、担ぎ上げ、意気揚々とこの歴史ある城まで、それはそれは軽やかな足取りで運んで来たわけである。この国の新しい未来像と、そこに描かれる自分の輝く役職を夢に思い描きながら、彼らは王家やその親しき家柄などの中枢から疎遠にされている貴族、

あるいは昔は名門だった没落貴族、あるいは数年ばかり生まれるのが遅くなった為に家督と財産とを相続できなかった貴族の子弟などで、あながち甘い匂いを嗅ぎつけた蟻のようにこの蜜に群がった。新しい王国の女王に祭り上げられた一人の女に、彼らは我先にと卑しいさを覆った笑みと忠誠と献身の言葉を送るのだった。

ジョカスは埃っぽくて薄気味悪いトンネルから逃げ出るように、祝賀会の催されている広間を抜け出し、バルコニーへと出た。これは中々容易なことではなかったのだが、人の目の波間を盗み、こうして外へと出た。そして肺に溜まっていた穢れ^{けが}を押し出すように、深い溜息が一つ吐き出された。背後の窓ガラス越しでは、舞踏の音楽やら人々の話し声やらの賑わいが、遠い席で演劇でも見ているような別世界のことのように感じられた。ただ、その愛を語らう微かな調べが、彼女をあゝの冒険とロマンスとに彩られた一夜へと運んだ。逃走用に用意された馬車に乗り換えるまで、愛する人の腕に抱かれて馬で駆けつけたあの夜。お尻は痛かったが、それでもあの腕の温もりを肌の上に、あの吐息を毛髪^{すか}の間に、いつまでも感じていたかった。金属製の胸当てをも透^{すか}してその心地好い暖かさを背中に感じ、計り知れない程あった不安をそつとどこか見えない所へ隠してくれた。もう一度あの興奮と安らぎを味わいたい、そうゆう気持ちが彼女を捉えてやまなかった。

月が雲の切れ目から顔を出し、バルコニーの前に田舎のなだらかな風景が広がる。この懐かしみを持った静けさは、彼女の切なく透き通った求める気持ちに不思議なほど同調してくれた。彼女の傍で古くからの女友達のように立っている細い樹木達が風に揺れ、物知り顔で頷^{うなず}いていた。

背後の窓が開いた。人影がそこから現れて、風に揺れる葦^{あし}の仕草で彼女の横に寄り添った。その人はジョカスが今まさに求めていた人だった。

「月をお願いごとでしょうか、私のプリンセス」

エルクバルトのロマンスを含んだ問い掛けは、ジョカスの暫しの沈黙によって受け止められた。

「ええ、そうなのです、エルクバルト。女とは悩みの多い生き物なの。悩み事なしでは生きられないほどにね。……女というものは、まるで悩みごとをお菓子のように食べるのね」

「でもそのお菓子は美味しいのでしよう、ご婦人方には……」

エルクバルトは傀儡の女王の腰を優しい手つきで取り、背後から彼女の細い体を包み込んだ。ジョカスは肩越しに彼の顔を見上げた。

そしてそこに、自分を頼もしくも優しく見つめる瞳を認めた。二人の赤く小さな肉塊達は、その昔元々一つのものであったかのように、愛おしく重なりあった。

ささやかな世界が割れる音がした。ホールとバルコニーを隔てていた扉の留め金が外されたのだ。ジョカスとエルクバルトの間には、冷えた距離が割って入った。招かされる乱入者は険しくも友好の表情を示した老人 - ボイニニンガ大公であった。

「おやおや、これはお邪魔でしたかな。お二人で愛の語らいのところに」

「滅相もございません。彼女は一国を統べることを約束された女王。私は一騎士団を統べる、ただの騎士団長に過ぎません。最も、その肩書さえ今は失っております。その私が愛を語らうなどと大それたことなど……」

「そうですね？ まあ、宜しいです。そうゆう恋があっても良いんではないかと思っただけです。こうも年をとると色々詮索好きになつていけません。ただ、私はそうゆう恋も、あってもいいのではないかと思うんですよ。前国王は亡くなられた。そして謀反を起こした（カイナ王はジョカスを幽閉し権力を握ったと思われる？）息子の手から女王を掬い出したのですから。貴族も御婦人方も、そして民でさえもそうゆうお伽話のような、美しい騎士物語りは嫌いで

はないのです。それに貴方は今でも騎士団長です。これから創られるこの国のね。　　おやおや、すっかり長話をしてしまった。老いぼれはこれだからいかなですな。それでは私はこれで」

エルクバルトの老いを否定する言葉に微笑みで応えて、ボイニニンは賑やかなホールへ消えていった。

「エルクバルト様、私には、あの人を信用してはならない、そんな気がしてなりません」

「何でまた、そんなことを」

「これはあくまでも私の直感なのですが、あの方はどうも……、冷たい視線を持つているのです。……いいえ、この際はつきりと言わせていただきます。あの方は私達を政治的に利用しているのかもしれない。いいえ、きっとそうなのです。これはあなたよりも少しばかり長くこの世で生き、そして政治の中枢の傍らにいた、女の直感でございます。ですからどうか、あの方にはお氣をつけになつて」
エルクバルトはか弱いこの女性を安心させて上げねばならない使命を感じた。

「大丈夫です、ジョカス様。大丈夫です。私だつてただの愚か者でございます。」

確かに今は、あの方と手を結んではいますが、いつまでも彼に権力を握らせておく手はございません。必ずやあなたの手に、権力を取り戻してみせます。例えこの命に替えても……」

「そんなことはおっしゃらないで。私そんなもの、少しも欲しくはありません。私が欲しいのは……」

それ以上、二人に言葉は必要なかった。ただ、二人には再び唇を重ねるだけでよかったのである。折しも、月が陰ろうとしていた。思ひ出したように吹いた優しい風によつて、平野の遠くから草原が月明かりの薄暗さの中で順々に風ぎ、遂には古城の木々をざわめかした。少し驚いた木立の鳥が羽ばたいた。それでも二人は唇を重ね合っていた。まるで二人のそれが、元々一つのものであったかのよう

第3章第17話 ハイシリツヒ達の山脈を越える顛末

「魔術とは……そのー、つまりだ……。……いわゆる世界の理を知ることってこと、かな」

と、アデンは大袈裟な程に馬の揺れに合わせて体を動かしつつ言った。少しずつつ口へ染み込んで定着しつつあった北ガーラビア語で、ハイシリツヒがアデンに尋ねた「魔術って一体何なんだ？」という問いに応えてのことだった。

2人は大魔道師デインの住処を離れ、4本脚で顔の面長な動物に跨がりながらそれぞれが住む、あるいは住んでいた世界について語った。時間は幾らでもあった。地理的な問題で2人が村などに宿を取れず、野宿したときに見上げた星の数と同じだけ、時間はあった。同時に、互いの未知の世界に対する興味もそれと同じ数だけあった。ハイシリツヒは特に魔術というものに興味を示した。

「理？」

とハイシリツヒはアデンの言葉を借りて聞いた。

「そう、理だ。魔術やら魔道やらを使うには、勿論マナも必要さ。

ああ、マナってのは、魔術を行使する際の基本エネルギーってこと。まあ、そうゆうことにされている。そして何が言いたいかって言うところ、この魔術やら魔道っていうものはこの世の森羅万象……ありとあらゆる生命、ありとあらゆる物質、そしてありとあらゆる事象を解明し、理解することなんだ」

出発してから3日目、殆んど獣道といってもよい街道を下りながら2人が話していたことからである。ハイシリツヒよりやや馬を進ませていたアデンは、1フレーズごと一々振り向きつつ語った。なのでこの熱心な教育者はときどき枝に薙ぎ払われ、落馬しそうになったことが2度3度とあった。

『神の戦士』が1人、ドイツ人のハインリッヒとその案内人、魔術師アデンの男2人はまだ、遠方を望めば淡い青灰色に霞む山脈が聳^{そび}える山岳地帯を抜け出れずにいた。というのも彼らの出発点はガラビア大陸でも有数の山脈が連なるロストフ山脈の、かなり奥まった場所にあつたからだ。たとえ2人が2羽のコンドルだとしても、麓に辿り着く迄には1週間以上かかった。そしてその有り余る道すがら、ハインリッヒが興味を示した魔術について、アデンは師匠の語り口を真似るように語って聞かせていたのである。

そしてこれは村と呼んでは厭味になつてしまふような小さな集落で1泊し、翌朝早くから出発した後の魔術講義である。

「この世の中にある全てのものは、5つの元素で事象……、つまり具現されているんだ。つまりは、全てのものはこの5つで出来ているってこと。あるいは存在している、ってことかな。その5つの元素っていうのが何かつていうと、まずあらゆる物を焼いて無にしてしまふ火。そして我々人や動物たちの母たる大地の皮膚である土とそこから生まれる木と金属、そして最後に命の源たる水。これがこの世を、この世たらしめている元素なんだ。どうだい？ こうゆう考へて素晴らしいとは思わないかい？ だつてこの世にあるあらゆるものが、殆ど私達と同じもので出来ているってんだから」

馬2頭分程の不自然な間を開けてハインリッヒが相槌を挟んだが、アデンはその違和感に気づかなかつた。暫く考えた後にハインリッヒは切り出した。

「それでは生きているものもみんな、それらの……5つの元素で出来ているっていうのかい？ 植物や動物も？ そして人間もそうだと言えるのかね？」

気まぐれに飼ひ始めたバツタを死なせてしまった男の子のような悲しい顔をして、アデンは頭を振った。

「無論、これはただの理論に過ぎないんだ。何故なら誰も物質から生きているもの、生物を作り出せてはいないんだ。かの錬金術の権

威、アストーノフ学派でさえもとに生物と呼べるものを創りだせていないんだ。だからこの理論に対して色んな主張が生まれた。そしてそこから色んな教派が生まれ、学派が生まれたんだ。例えば、そう。風を元素に入れるべしとする学派もあるし、光をこれに入れるべしとする学派もある。あるいはその両者か、はたまたまた別の何かか。それは魂や血液だったり、マナだったり……。あるいは全く別の認識で、そもそも基本5元素が違っているという教派もあるし、元素という観念が間違っている、という教派さえもある。けれども問題なのは、どの学派であろうとどんなに偉大な魔術師であろうとも、未だに歴^{れっき}とした生物はまだ創りだせていない、ってことなんだ。」

勿体^{もったい}つけた口調で、ここの言語独特の多様な”sh”の発声と巻き舌を交互に発しながら、魔術学問の悲劇的現状を熱く述べた若き師匠の目には、採ってきた美しい花が枯れてしまったときの少女が持つ哀しみと生命の不可思議への好奇とが緋^ない交^まぜになっていた。

その日の晩、アデンは魔術を実証してみせた。

「これが火の元素……」

アデンが地面に刻んだ魔方陣から指先程の炎が上がり、焚き火によって暗黒の世界に切り取られた薄暗さに浮かんた。それ自身は小さな炎に過ぎないのだが、それは明らかに焚火の火より異質でいて、何かを隠し持った存在感を有している。ハインリッヒはそう感じた。彼らを取り巻く暗黒の世界からそとは、物悲しげな虫の泣き声の他に何もなかった。

「そう、これは火の元素。火の精霊、サラムンドルの力を借りて火の元素を具現化したものだよ。……サラムンドルっていうのは火の中に住む小さなドラゴンさ」

と、ここ一帯の薄暗さのトーンでアデンが話すと、その指先程の火は拳大の火球へと燃え上がった。その炎の玉を制御するためか、杖を持った右腕を上げ左手添えていた。田舎の片隅で忘れ去られてい

る交差点の赤信号のように、彼の顔は赤く映し出されていた。それはハインリッヒの全ての関心を引き付けた。燃烧するのに酸素を必要とする代わり、人の好奇心を必要とし燃料とするように。

ほら持つてみな、とハインリッヒは火の玉を渡された。思わず出した掌の上に、それを載せられた。熱さを恐れたが、それ程の熱さはなかった。ただ、載せられたと同時に、それは赤ちゃんのペンスぐらいの大きさに萎しほんでしまった。炎を意識して、とアデンがささず注意した。始めて抱きかかえさせてもらった他人の赤ちゃんを扱うように、ハインリッヒは大事に意識をそれに注いだ。それは幾らか大きくなった。そして良く見れば、焰ほむは手の皮から指3本離れた場所で刺をはためかせ、時折、小さな蛇の尾のようなものはみ出てはまた隠れた。成る程、これがサラマンデルという小さなドラゴンの尻尾なんだ、とハインリッヒは合点がてんした。などと思っていると炎から小さなマドラーの先のようなものが飛び出した。続いてもう1つ、炎の反対側から。それは果たして一对の小さな手だった。というのもその2つの間から2つのマドラーの腕の持ち主が、終戦記念銀貨のような平べったい頭を筆頭に、体を掀ねじりチュロスのようにくねらせながら出て来たからである。つまりそれは小さきサラマンデル - 火蜥蜴ひとかげであった。ハインリッヒはそいつの、炎から引き出される音を聞いた。少なくとも最初は、そんな音だと思った。なのだがどうやらそれは、違っらしかった。規則正しい音の繰り返しであったことが、ハインリッヒにそれが言語であることに気づかせた。それは、大昔にとあるアラビア人が砂漠の真ん中に忘れてきてしまったアラビア語のように聞こえた。"…… ana areb uta ire……" 頭の中のハインリッヒが「何だって？」と聞き返した。それはドイツ語だったかもしれないし、北ガーラビア語でだったのかもしれないし、あるいはただそうイメージしただけだったのかもしれない。だがそいつは彼の聞いたことのない言葉で答えた。

「……マナをもっと……」

ハインリツヒはそいつの言葉に注意を注いだ。

「……もつとマナを……お呉れよ……」

それは確かにハインリツヒの聞いたことのない言葉だった。但しハインリツヒはその意味を、何故だか理解した。ただそこに疑問を抱く暇はなかった。

そいつのその言葉を聞いた途端 - 正確にはその言葉を聴いて理解した途端 - 更に正確に言ってしまえば、マナのイメージを捜して頭の引き出しを弄った瞬間、外の世界からハインリツヒの体 - 主に頭や肩や背中、腹の下部などから何かが急速に流入してきた。海ががとも荒れた日に、断崖に出来た細い洞窟の押し流すような風の勢いだった。そして流入してきた何かは、彼の体軀をバツフローの群れのように通過し、彼の腕を通り抜けて炎へと注がれた。ハインリツヒにはそれが分かった。体が、伸ばした腕が、燃焼するマグネシウムのように熱かった。と忽ち、炎が膨れ上がった。大当りを当てたラスベガスのスロット台がメダルを吐き出すみたいに、大粒の火の粉、火の塊が四方八方へと散った。

「どうしたんだ！」

アデンの叫びがハインリツヒを元いた場所に引き戻した。ハインリツヒが慌てて手の上の火柱を振り落とすと、火の塊は土の表面辺りで忽ち萎んでいった。だがその前に、サラマンドルが歓喜に泳ぐ姿とその高笑いを、ハインリツヒは確かに認めたのだった。

第3章第18話 ハイシリツヒ達の山脈を越える顛末

折れ曲がってしまった金属製本立てぐらい、体を仰け反らせなければ歩けない傾斜を、2人の男が長らく下っていた。ハイシリツヒとアデンである。2人共が旅で薄汚れた首に、オークの樹皮のように古びた外套を巻き付けていた。

樹木の茂みが青空と太陽とを隠していた。空気は湿り気を帯び、人と獣達の踵によって削られた粘土質の隘路を、馬から降りて下っていた。前傾の道は馬達にとっては好みではないようで手綱を振り払うように首を振って歯を剥き、特にアデンの乗るダークブラウンの歳老いた馬は、数歩歩くごと、過酷な労働へのストライキ宣言を嘶きいみなでもって訴えた。朝の山岳地は澄みきった世界から温もりを奪い去るのにもかかわらず、男達は脇や背中を汗で湿らせ、彼らの引く動物達も、分不相応にもスパンコールをあしらったパーティーードレスを着込んでしまったかのように、無数に光る粒状の汗をその褐色の肌に張り付かせていた。

子供達の忍ばせた笑い声が後ろから聞こえてきた。かと思うとアデンの愛馬が、自分のいなきを合図に後ろ足で立ち上がった。突然の出来事だった。狭い隘路でのことである。手首に巻き付けていた手綱に引つ張られたアデンは思わず引き寄せられ、落ちてきた愛馬の体と蹄とに押し倒された。馬脚の先に付いた硬質の部分が、アデンの脇腹を強く擦った。倒されたアデンの体は馬体のしたでくの字に折れた。アデンの鼻から手の平1つ分離れたところに、彼の脇腹を傷つけた凶器が再び振り下ろされた。興奮している馬はその体重のおよそ半分を支える前脚を、タップダンスが止まらないとでもいうように踏み鳴らしていた。苦痛に顔を歪めながら2転、3転してアデンはその凶器の下から抜け出した。

「いい加減にしろ！ ソイ！ カイ！」

普段は温厚なこの魔術師が激昂するのも、老齡なる愛馬を氣遣って

のこと。

そうなのだ。彼ら式神はずつと後の方で時々姿を垣間見せていた。かと思えば時々とんでもない悪戯いたずらをしでかす。ある時は、夜営していたところへ焚火に石を投げ込み、燃えた木片が飛び散り火の粉が舞った。またある時は、小さな渡り橋を渡っていると、突然水面から現れ、馬とその乗馬者を驚かせた。今回のように馬の尻つねを抓った回数は、この馬が持つ歯の本数の2倍に匹敵するほどだった。

険しい山道を抜け出れば、湖のように平らな草地に出た。周りを森林が囲い、この一帯が切り取られたようになっていた。まるで世界がこの場所があるということをし、5000年前に忘れてしまったかのような、そんな静けさがここに留まっていた。

暖かい日差しが彼らの外套を奪い取った。そよ風が膝まである草の表面と馬の尻尾を揺らしていった。それらは湖の水面みなもと、水辺のススキのようでもあった。

「魔術を試みる者の内、命を落とす人達も大勢いる」

険しい道を抜けて落ち着いたところで、アデンが鉛色の言葉で話し出した。

「旅の途中で事故にあつたり、他の魔術師と戦つたり」

服が吸った汗を、風が奪っていくのを快く感じていたかのドイツ人は、アデンが今何を言わんとしているのかが分かった。

「あるいは実力以上の魔術を使おうとしてその魔術に飲まれてしまう……なんてこともある」

ハインリッヒの予感確信となった。いつものアデンのようなこの春の日差しの中で、アデンの顔は冬間近の秋の色に染まっていた。

「だからお願いだ、ハインリッヒ。この先、あんな無茶はしないでほしい」

ハインリッヒは端的に、わかったとだけ言った。

「僕がよくよく説明していなかったのも悪かった。だけれど、まさかあそこまで君にマナが集められるなんて思わなかったんだ。ああ、

あれはすごかった。初めてであそこまで魔術を形にできるなんて。とても初めてとはおもえないや。やっぱり神が遣わされただけのこととはある」

アデンのトーンも、ここへ来ていつもの調子に戻ってきた。ただ、ハインリツヒは恐れていた。もうこの師から魔術を教われないんじゃないか、と。

「術者の許容量を著しく越えるマナを使ったり、自分の力量以上の魔術を使おうとしたり、何かが原因で力の管制を誤ったり、準備を怠ったりよく考えないで何かしらの魔術を咄嗟に使ったりすると、魔術は術者を傷つけてしまうんだ。君の中にあるマナの容器が壊れてしまう。あるいはコントロールを失って暴走してしまうかもしれない。実際、そういう事故も沢山あったって師匠が言ってた。だから君には、まあ、そこら辺のことを気をつけて欲しいんだ」

炎に意識を集中しろ。昨夜、そうアデンがハインリツヒにアドバイスをしてから火柱が上がるまで、瞬きを2回する暇もなかったらしい。アデンはそう言った。そして何かがおかしいと思ったときには火柱が出来上がっていた、ということだった。アデンはハインリツヒと、かのサラマンデルとのやり取りを一切認識していないらしい。ただ、最後の高笑いだけは聞こえたそうだ。

もう魔術は教えてもらえないだろうか。そういったハインリツヒの懸念にも拘わらず、彼はその後のやり取りで魔術講義を続けてくれる、とその若い師匠に約束してもらうことが出来た。

複雑な化学式のように難解な魔術講義をも、ハインリツヒは寧ろ有り難く感じた。講義もなく、他愛ない会話も途切れ、単に馬を進ませていると、忘れ去られた家屋を白蟻が蝕むように湿った不安が彼を蝕んだ。

他の四人はどうしたのだろうか？ 傭兵に上下関係はないので、職業軍人の部下に対する愛情といのは少し違うのだが、それでも年上の自分を慕ってくれる彼らの身が心配だった。『息子』とまではいかないにしても、家族付き合いする友人の息子のように、彼らのことが親身に思われたのだ。そしてまだよく分からない大掛かりな使命のこと。そしてそして、あの地球最後の戦闘のこと……。俺たちはひよつとすると、裏切られたのかもしれない……。

なんにせよ、魔術講義の続行は決まった。そしてこのまま平穩に魔法云々の話を続けながら、次に訪れることになるカーギュステン村まで何事もなく辿り着くはずだった。

開けた大地を通り抜け始めたところで、反対側に人影があつた。そいつは丁度、彼らと180°。だけ違った方向へ進んでいるらしいと、2人はしばらくして気づいた。

その男は影で出来ている、と言われれば一瞬信じてしまうほど暗く、不幸やら不安やらといった負の感情を纏っているような印象を持っていた。長閑な日差しが照り付けているにも係わらず、彼の周囲にある光は生気をその暗がりへと吸い込まれているようだった。彼は黒雲が段々と空を覆い尽くすような、大変遅いスピードで歩いていたにも係わらず、ちよつと目を離れた隙に彼らを隔てる距離はおよそ半分になり、また少し目を離すとまた半分の距離となっていた。不思議そうな表情をその顔に刻みつけて見つめ合つたのを最後に、2人はもうその男から目を離すことが出来なくなっていた。それでも彼は、その足の動きでは不自然な速さで2人へ近づいてきた。彼の身につけている外套は2人以上に古臭く、苔の染み込んだ太古からの樹木のようになっていた。

男はフードを目深に被っていたので表情が見えなかった。ただ血色の悪い、乾ききつた薄い唇が非人間的な動き――まるで機械仕掛

けの人形が口を開閉するように――で喋った。

「もし……。旅のお方達。ちょっと道をお尋ねしたいんだが、魔導師ディンという魔術・魔道に精通された方がこの先に住んでいるとお聞きしたのですが、それがどちらかご存知でしょうか……」

アデンは待つてましたとばかりに揚々と答えた。それは一々詳細で、更には私はその大魔導師ディンの1番弟子なんですよ、と一々身の上話までし始めた。

「そうです。私も魔術の道を志す者でして……。名を……。クスルドウク……と申します……」

『クスルドウク』。何故だかハインリツヒの耳の奥3センチ辺りのところに、この名前が強く残った。クスルドウク――アデンと話している彼は相変わらず生氣のない口元しか見えなかった。それを見つめていると、なんだかその不気味な中へと引き込まれていくような気がした。まるで深い海の中の、暗く冷たい一層の深みへと落ちていくような感覚があった。光さえ届かない、海の深みの不気味さ。クスルドウクの口は、いや、彼の存在そのものがその種の不気味さだった。

ハインリツヒはアデンが、ディンの館の部屋の配置、師匠の得意とする魔術や魔道、残った式神などについてまでも事細かに、まるでそうすることが彼の人生の喜びであるともいうように語っていた。擦れ違いで道を教えるにしては、これは異常だ。例えこの世界の風習をハインリツヒがよく知らなかったとしても、ここまで丁寧なのは異常としか思えなかった。アデンの目は、相槌を打つクスルドウクの口元に引き寄せられていた。まるでそこにいる、とても小さい誰かに話し掛けているようだった。ハインリツヒは心配になつて思わず声を掛けた。

「アデン……。アデン！」

その時、とても嫌な気配を感じてハインリツヒは左側を見た。クスルドウクがいる方だ。小さく赤いものが2つ、暗がりの中で並んで

いた。その赤い2つの物体は、クスルドウクのフードの暗がりの中、彼の目がある位置にあった。つまりその赤いものが彼の両眼である、という仮定の他、このことを上手く説明することはできなかった。そしてその紅の眼差しはハインリッヒを貫いていた。まるで邪魔するな、とでも言っているようだった。

「んん、ああ。ああ……そうだ。私達はもう行かないと」
アデンの呑気な声が表面的に緊張を取り払った。

「どうも有難うございました。……では、私もこれで」
そう言つて立ち去るクスルドウクの目は、影に隠れてもう見えなくなっていた。

10秒程、アデンは寝起きのようにまだ突っ立ったままだった。やがて意識が鮮明になったようで、歩き始めたかと思うと悲鳴のようなものを揚げて後ろを振り返った。その様は、全財産の半分が入った財布を落とした人のようだった。ハインリッヒも釣られて後ろを振り返った。そこにはもう誰もいなかった。湖の水面みなものように、風の足跡が開けた草原を過ぎて行くだけだった。まるで今の出来事は白日夢だったのではないか、とハインリッヒは思った。

第3章第19話 ハイノリツヒ達の山脈を越える顛末

その温和な性格にも関わらず、アデンがどもりつ、つかえつ悪態をついていたのにはそれなりに3つほどの理由があった。そのモヤモヤとした憤りを上手く言葉にできないでいるアデンに代わってそれを言うとなれば、それは次の通りである。

1つには、あんな催眠魔術という古典的な手に何でまんまとかかってしまったのか、ということである。師匠デインとの訓練で、アデンはこの種の幻惑への抵抗方法論を学んでいたし、またことに對してセキュリティとなりうるはずだった小さな魔法陣の入れ墨が、彼の右肩甲骨の辺りに刻まれていた。そうこうしていたにもかかわらず、彼は術に嵌^はまってしまった。つまりは念入りに張り巡らせていた罫を通り抜けられ、冬の大切な備蓄を北極熊に奪われたエスキモーのようだ、ということなのである。

2つ目の理由として、何で師匠のことをご丁寧にも洗いざらい喋ってしまったのか、ということである。魔術師にとって手の内を明かすということは、死にも等しいことである。魔術は用い方によっては人を傷つけることができる。そしてまた、魔術によつて魔術を防ぐこともできる。相手の出方が分かれば、魔術を防ぐことは格段にやり易くなる。だから魔術師は例え親しい魔術師の間柄であっても、自分の得意な魔法だとか、どういったことが出来るとかは余り話したがらない。なので惑わしの術に掛かった結果であるにしろ、アデンは師匠を裏切ってしまったことになる。それも普段は恥かしさゆえに憎まれ口しか叩かないが、捨てられていた自分を拾い上げ魔術を教えてくれながら育ててくれた、心の内でこそ尊敬する師匠をだ。

そして3つ目の訳は、あの男が何者だったのが全くわからないことである。いったい何が目的だったのかさえ分からない。そしてどうゆう顔だったのか、すらよく分からない。分かった事といえ、

あの男が魔術に長けた魔術師か魔導師なのだろうということと、嘘でなければ彼の名前が『クスルドウク』と言うらしいこと。そして大魔導師ディンに何かしら用があるということ——それも、友人と訊ねてちよつと立ち寄った、などという穏やかなことではなさそうだった。

「ああ、何てことだい！ 僕はなんてことをしてしまったんだ。なんであんなにべらべらと喋ってしまったんだ。僕はどうすればいいんだろう。もう自分で自分に呪術をかけて死にたいくらいだ。ああ、お師匠様のことが心配だ！ お師匠様もこんな出来の悪い弟子なんかとるからいけないんだ！ そうなんだ。そもそもこんな僕のことなんか育ててくれなければよかったんだ！ こんな出来損ないの魔術師なんか、海まで流されて魚の餌になってしまえばよかったんだ。それが僕には1番ふさわしい場所だったんだ」

後悔やら何もできないもどかしさやらが彼の首を絞め上げて、アデンの顔は首吊り処刑を受けた者のように蒼白だった。刑の執行を待つ死刑囚のように、彼の脚は1秒間に4歩は歩くように急かされた。

言っていることに辻褄があっていない、順序立っていない、そしてとても取り乱している等々のとても多くの障害を乗り越えて、およその状況を飲み込んだハインリッヒが彼を宥めにかかった。

「取り合えず落ち着くことだよ、アデン。そんなに力ツカしてたって何も始まらないぞ」

「ああ、わかつていさ。もちろんさ！ でも、一体どうしろって言うんだい、ハインリッヒ？ あいつの不気味な移動の仕方を見ただろう。あいつ、絶対に人間じゃない。ああ、こうしている内にもお師匠様に危険が迫っているかもしれないって言うのに！ 悪いけど……静かに考えさせてくれよ」

「確かに俺には何もできない。だけれども。冷静なるんだ、アデン。君が焦る気持ちも良くわかるさ。心配なんだろう？ だったらまず

まず、心を落ち着かせるんだ。心を落ち着けさせて、それから考えるんだ。じゃなきゃ、名案はやって来てくれやしない。焦って歩いたって、草の陰に隠れた穴に、片足を突っ込むだけさ。気楽にやれよ。そのくらいが丁度いいんだ」

始めは怒りが若い魔術師の耳をきつく塞いでいたが、繰り返す波のようなハインリッヒの助言がその鼓膜に届いた。ハインリッヒは見えていて、アデンがようやく冷静さのマントを羽織り直したのがわかった。それぞれの馬は各々が思うままに、方々で草を食みながら時々尻尾で自分の尻を叩いていた。

アデンが誰に向けるでもなしにわかったよ、なんて言葉をややあつてから排出した。

「わかったよ。冷静にならないといけないんだ。お師匠様だって、そう言ってたじゃないか。魔術師は心を山のようにしなきゃ駄目だつて。お前は心が乱れると、取り返しがつかないなつて。心を山奥の、更に奥の山へと持っていくんだつて。魔術師は常に心をそうしていなきゃいけないって……」

『アガネアの妖精による未来予知の法』

アデンが採用した選択肢の1つが、この一見説明しているようで今ひとつ実態の伝わってこない呼び名の魔法だった。

他には式神の一人であるカイが伝令としてディンの元へと送られた。式神の方が人間や馬よりも遥かに早いんだ、つてアデンが言った。そしてカイが発発する際に、あのクスルドウクに決して近づくことがないよう、遠回りして行くように念入りに注意した。

夜の森を彩る鳴き声の虫達も、既に半分は寝てしまつてしまつたかのような深い夜になつてからのことだ。アデンとハインリッヒは、とある1つの花の傍らに踞すくまっていた。それは山の斜面と湿つた森とを申し訳なさそうに切り開いた小路の傍らに咲く、七面鳥の顎髻あごひだを

鮮やかにした色の、『アガネアの花』だった。それは、アデンとハインリッヒと残った式神ソイとの3者が午後一杯 - 陽が今日1日の勤めも無事終えて間もなく陰ろうとするまでかかった。

見つけたことを自慢するソイをよそに、アデンは準備に取り掛かった。魔術の儀式の準備だ。

まずアガネアの花を中心として、腕の長さ程の円を地面に刻み付ける。それもハインリッヒが、布で出来た棒状の袋かと思った動物が何かの足のようなもので、刻みつけた。そしてその円の内側に、中心へと向かうように渦巻き状の文字を連ねていく。それもやっぱり例の、何かの足で書かれた。人通りの多いスクランブルに2、3年捨て置かれてボロボロになってしまったかのような文字だった。アデンはその足だかさえも怪しげなそれを、大事そうに首にかけた革袋にしまった。魔法陣の回りにアデンがアガネアの花を探しながら拾ってきた、なにかしらの枝を折って装飾していく。そして若い魔術師は大きめの魔法陣をもう1つ、傍らに描き足した。

準備が済んでしまうと、300歩は離れた森の中で時が満ちるのを待った。2人は火さえ起こさなかった。

世界はやがて、夜の深みへと沈んでいく。陽の光など、もともとこの世に存在していなかったのだと納得してしまうほど、夜は深まってゆく。

不可思議な力を持った文言を発することで、アデンが僅かな明かりを杖に燈した。そして2人は夜の森の漆黒を、今にも溶けてしまいうようなその明かりで押し拓いて進んだ。ときどき、自分達がどこにいるのかさえ忘れるくらい、辺りは何もかもが寝静まっていた。動物も鳥も、植物も光も最早起きていない。落ち葉に隠れた石や、夜空だつてそうだ。夜の世界を満たすこの空気さえ、夢現にまどろんでいる。

今、この世界で目覚めていて、動き回る者など2人しかない。そしてハインリッヒは小さな明かりを持って前に行く背中を追いつなが

ら、ときどき自分が何をしているのかを忘れた。地球で死に、この世界へ呼び出され、若い魔術師と会い、旅をして、その途中である魔術儀式の準備を着々とこなしている。地球という星から、この儀式までに繋がる1つ1つの過程が、一々分断した。その1つ1つが、一連の出来事として繋^{つな}がらなかった。

第3章第20話 ハイシリツヒ達の山脈を越える顛末

2人は目的の場所に着いた。アガネアの花を中心とする小さな魔方陣と、その傍らに大きく雑然と描かれた魔方陣のある場所だ。

2人は大きい方の魔方陣の中に収まった。アガネアの花の方を向いてアデンが前、ハイシリツヒがその後ろに。アデンが言うには「この魔法陣は結界なんだよ。この中にいれば僕達の姿は彼らに見えないんだ。つまり、悪魔や妖精からは、この中のことを知ることが出来ないことになっているんだ」ということらしい。

少し大きめの魔法陣も、大人2人を収納すると、窮屈な間取りだ。そんな窮屈な体勢をハイシリツヒが保持していると、アデンは何事かを口の中で唱えながら、懷から取り出した小瓶の液体をアガネアの花の周囲へと振りかけた。唾液線を刺激するような、甘い香りがハイシリツヒの鼻孔まで届いた。振り向いてアデンはどこか得意げに語る。

「プリーム酒さ。それも師匠直伝の、蜂蜜と銀榆ぎんにれの根、臙脂飛蝗えんじばつたの右後ろ足入りだ。これで間違いなく、アガネアの花の妖精も飛びついてくること請け合いだ」

そう、この手の込んだ仕掛けは、妖精をおびき出すための仕掛けなのだ。

「酒好きの妖精なのかい？」

ハイシリツヒが率直に問う。

「いいや、ただの香り付けさあ。いい香りがするだろう？ 料理と一緒にだよ。最後に香り付けとしてプリーム酒を4分の1ピトン入れましょう、ってね」

これでよし、と言うアデンの声が森の闇に響く。空虚な暗い広がりの中でその声は、葬儀の席で不覚にも酔っ払ってしまった男の声

のように明るかった。それでもアデンは気にならないようだった。2人は屈んだまま、前後に体を密接している。この状態でもう少しだけ待たなければならぬようだった。

黒いクレヨンでデッサンされたように、輪郭も凹凸もはっきりとしないアデンの頭と肩が、現状、ハインリツヒの視界の全てだ。アガネアの花は少しも見えない。ただ、前にいる男の呼吸の律動だけが、認識しえる動きだった。さもなければ、ハインリツヒは色彩を与えられなかったデッサンの絵画に閉じ込められたと錯覚したかもしれない。

長時間いるには窮屈な姿勢のまま、息を潜め、身動きを控え、地につけた膝が土の湿気ですっかり濡れてしまふまで待ち続けた。不謹慎にも、儀式の最中に居眠りをするアデンを2度起こした。そして3度目に揺り動かしたとき、ハインリツヒは何か違和感を覚えた。目を覚ました若き魔術師も、すぐに何かを感じ取ったようだ。2人の他に、別な気配を感じた。それもすぐ近くに。

右後ろだ。2人は同時に振り向いた。暗闇の中でさえ、見失ってしまいそうなか細い光の粒が2人の目の前を横切る。真つ暗闇の中のことで正しい距離を掴むことはできないが、右腕の1・5本以内の近さだ。光はたった1つ、拳大の大きさで、病室の片隅の心拍計のようにフラフラと、それでも振れ幅の平均値を利用してアガネアの花の方へと飛んでいった。様々な色が入れ代わりながら輝いていたが、それは純粋な7色であったとは言わない。黄緑や濃いグリーン、あるいは黄色などの色が主だった。そして緑色に小さく重なるように、赤色や水色が顕れる。

違和感の元凶は間違いなくこれだ、とハインリツヒにも分かった。フラフラと飛んでいながらもそれは、普通の生活では感じ得ない、怪しげな存在感を発し続けていた。それはビルの立ち並ぶ都会で、ライフルケースを肩から担いだハンターの集団と擦れ違あひそうくらい厳かなことだ。

ハインリッヒが視線を掴まれてしまったかのようにその光を目で追っていると、それは陰へと消えた。彼の前で屈んでいる、アデンの陰だ。それは丁度、屈んだアデンの正面、アガネアの花の辺りでもあった。

アデンがゆっくりと振り向くと、頷いた。ハインリッヒはその合図を、『ここに至るまで万事順調、これより作戦実行に移行する』という意味だと捉えた。

ピーー、フィーイ、フィーイ。長閑な昼下がりの庭で小鳥が鳴くように、アデンは口笛を2度鳴らした。たったそれだけで、世界から音が死に絶えた。そう思い始めたときだった。

「……何か、そこ、いる？」

それは言うなれば、誰もいない教室にある黒板の片隅の片隅に短い走り書きだった。それは言うなれば、誰かが出入りしたときにだけ零れる、遠くの音楽室の中で練習されるピッコロの音色だった。妖精の発したはずのその声は、本当は余りにも小さな音だったので、アデンの背後に隠れているハインリッヒには聞こえる筈もない声なのだが、音の伝達とは別な方法をとることで彼にもそれを知ることができた。儀式的準備をしている間、一々アデンが説明していかれたので、ハインリッヒはそれが周囲にいる者の心に聞こえるのだと分かった。実際に聞いてみて、それはブリーム酒の香りの甘さに負けないくらい甘ったるく、間延びした口調だった。

「はい、アデンと申す者が、ここにあります。実は私、あなたにお願いがあるのです。ですからどうぞ、草原の蔭に隠れてしまわないでください」

アデンと妖精が喋っている言葉は、ドイツ語でも英語でもなかった。アデンがいつも話しているガンラビア語でもない。また別の何語か、だった。それにも関わらず、その何語かはハインリッヒの頭の中で単語とイメージが結び合わり、少々風変わりな短絡的な文法が次々と展開していくのだった。

銀のナイフとフォークを打ち鳴らしたような、軽やかな音が連続で1回鳴った。妖精が両の羽根を打ち合わせたのだ。それは肯定を意味した。

「ありがとう、アガネアの妖精さん。では私が姿を現しても驚かないでね？」

アガネアの妖精は口元に手を添えて、軀を脈動させながら笑った。「貴方、しゃべる、言葉、可笑しい、ね？」

と言ってまた笑った。蝶の羽のように軽やかなそれは、嘲あざけているように、少しも悪い気分を喚起させなかった。だがまた、あの軽やかな羽根を打ち合わせる音が1回聞こえた。

では、と言ってアデンがノッソリノッソリと魔法陣から這い出した。視線を遮るものがなくなったので、ハインリッヒの目に、たった一輪のアガネアの花と、その上で両腕を後ろに脚をばたつかせながら座っている、小動物と虫の中間位の生き物が映し出された。それはアデンを見上げる。圧倒的な闇の只中で、彼女の周囲だけが黄緑や黄色の粉が舞っている様に輝き、それら光のダンスに合わせてアガネアの花の薄い影が揺らめいた。

「今晚は清々しい夜、ですねえ」

アデンは改まって挨拶の口上を切り出した。

「今晚、清々しい夜、なのです」

アガネアの妖精も、挨拶の口上を返した。どこかで笑いを押し隠している。

「それでは、初めに、あなたは名前を教える、わたしに。いいね？」

私の言ってること、分かる？」

「私、名前、アガネアの精」

「いやいや、そうではなくて。貴方の名前、何？」

「アガネアの精」

そう言ってアガネアの妖精は、花卉の上で宙返りをしてみせた。

「いやいやいや。そうゆうことじゃないんだ、僕の聞きたいことは君は仲間に、何て呼ばれている？　ってことなんだ。僕が聞きたい

ことは」

小さな妖精はアガネアの花の周囲を何週か飛び回り、羽根を打ち合わせて2度鳴らした。それは彼らの言語において、否定あるいは拒否を意味した。

アデンはどうしてもその妖精の名前が知りたいらしく、また妖精は妖精で、自分の名前を教えたくはないらしい。なので2人の訊ねつ拒みつの遣り取りは長らく続いた。魔術師、あるいは悪魔や精霊といったものまで、相手の名前を知ることには特別な力がある。とアデンの魔法講義で教わったことをハインリツヒはすぐに思い出した。「分かったよ。君はどうしても、名前、教えたくはないんだな。よし、それなら当てるしかない。いいかい？　きつと当ててみせるよ。まずはアガネアクドウ。何？　違うって？　それではアガネシュリンクトウ。違う？　じゃあ、サウザトシュリンクトウ？　ラピントサラクトウ……」

ハインリツヒの若き師匠は、頭の中にしまつてある膨大な精霊の名前を片っ端から読み上げているようだった。そして彼が名を言うたびに、軽やかな金属音が2度ずつ打ち鳴らされ続けた。

その内にハインリツヒは二人の話していた言語が、あのサラマンデルが喋っていた言葉と同じだということに思い当たった。ひよつとすると、精霊や妖精の話す言語には何か共通するものがあるのかもしれない。などとハインリツヒが、およそ30分に及ぶ2人の遣り取りを眺めながら考えていた。快活だった彼の舌も、鉛が注入されたように重くなってきた。ふと、笑いながら、宙返りしながら、あるいは飛び回りながら否定の音を打ち鳴らし続ける妖精の上に視線が止まった。するとハインリツヒの右手の甲の辺りが一瞬温かくなり、とある文字の綴りが思考上に描かれた。

「シュアンツアトネフクトウ……」

それは意識して発した言葉ではない。何となく考えていたことが唇から漏れ出した、という程度のことだ。それにも関わらず、その声は間違いなくアデンと妖精とに聞こえてしまったことに、ハインリ

ツヒは言い終わらない内に気が付いた。

ティン！ という乾いた可愛らしい音が1度だけ鳴った。それは肯定を意味する音だ。アデンは脳震盪を疑う程の早さでハインリッヒのいる方を振り向いた。アガネアの妖精——シユアンツァトネフクトウも背筋を引き伸ばされたみたいにして、驚きの表情だった。

「あら。……もう1人、人間、存在する？」

「そうだよ。実は、もう1人いるんだ。彼も姿を現しても驚いて逃げたりしないでくれるかい？」

第3章第21話 ハイシリツヒ達の山脈を越える顛末

ハイシリツヒの姿を見たシュアンツアトネフクトウは、小さな体を更に縮こませてアガネアの後ろへ隠れてしまった。

「どうした？ シュアンツアトネフクトウ？ 彼がどうかしたのかい？」

「その方、恐ろしい」

ハイシリツヒは何故？ というジェスチャーをアデンに投げかけた。アデンは一際優しい声色を持ってきて、尋ねた。

「それ何故、シュアンツアトネフクトウ？ 彼、とっても、優しい男」

「それ、正しい？」

「それ、正しいとも」

アガネアの花の妖精はちよつと顔を出し、ハイシリツヒの下から上へと、そしてまた下へと眺める。ハイシリツヒは最善を尽くして笑顔を作った。

「優しい」

妖精は小さく透明な羽根をはためかせ、アガネアの花の上に乗った。半分座りながら花弁に掴まり、身を乗り出す格好だ。いつでも花びらに隠れらる、という積もりらしい。「あなた、強力である、加護、受けている」

「加護？」

「そう、加護。ハングトナビア山、住む、神、与える、この方、特別な加護」

アデンが注釈する。

「ハングトナビア山の神って言えば、ハス神のことじゃないか。そうか、君はハス神に導かれて現存しているんだったね。まあ、それはそれとして本題に入らないと」

アデンは改まった咳ばらいとともに、ちよつとした仕草でもって佇

まいを正したのが、実態のない妖精の光に照らされて垣間見えた。

「では、私、質問する。いいね？ 私の師匠、デイン、無事？」

小さな妖精は瞬きを1回して、羽を1回打ち鳴らす。

「良かった！ お師匠様は無事なんだ！ そうか、そうか。では次の質問……」

アデンは聞きたいことを彼らの言葉に置き換えて門答を続けた。そして大体、次のようなことが分かった。クスルドウクは大魔導師デインの下を訪れて、すでに去ったということ。クスルドウクが何の目的でデインを訪ね、2人の間に何があったのかは館に張られた結界のために分からなかったのだが、クスルドウクが館の中へと入り、暫くの後に出て来たこと。かと思うと東の方角へと飛び去っていったこと（これは何度も確認したのだが、小さな妖精は確かにこのように表現した）。そして夜が更けた後、北ガールピア大陸は東の果ての国、ウィーラントに彼が存在していたことであつた。

「どうゆうことだろう。あの怪しげな魔術師は……一体何を企んでいるんだろう」

「きつと良くないことなんだろう。確証はないんだが。ただ、昼間に会ったときのあの様子というか、雰囲気というか……。ただ者じゃないことは確かだ。ひよつとすると私達が召喚された理由……魔王のことと、何らかの関係があるんじゃないか？」

「それもありえなくはないのかも知れないけれど……。それはちょっと飛躍し過ぎなんじゃないかな」

「ならば彼女に聞いてみればいい」

そう言つてハインリツヒは妖精の前に屈み込んだ。

「クスルドウク、目的、何である？」

ハインリツヒが妖精達の言葉でもつて尋ねたことに、アデンは目をビリヤードの球ぐらいにさせて驚いた。

「これは驚いた。君は妖精語を喋れるんだね」

アデンがそう言っているうちに、彼らの顎あごの下から不吉な言葉が届いた。

「クスルドウク、望む、世界の混沌。闇の支配。クスルドウク、始める、彼らの侵攻。そして、闇の世界の王、この世界へ、訪れる。それ、示す、世界の終焉。この世界、飲み込まれる、暗黒に……」
自分で言ったことの恐ろしさに、小さなシュアンツアトネフクトウは更に体を畏縮させて、アガネアの花弁の中に入り込んでしまった。ハインリッヒは屈んだ姿勢のまま、アデンを見た。そしてアデンも彼を見た。そのまま2人は今聞いた不吉な予言の暗黒を推し量るように、頭の中で繰り返した。暗い空気が淀んでいた。粘性の大気は息苦しく彼らの肌に冷たく張り付き、その皮膚に粒状の突起を生起させた。森の深くで、太古の鳥が鳴いたような奇妙な鳴き声があった。
「間違いない。あのクスルドウクという男、魔王のことに関係している」

アデンが言った。

「関係しているところじゃない。彼こそが魔王をこの世界に呼び出そうとしているんだ……」

再びの長い沈黙の後に、すっかり怖じけづいてしまった可哀相な妖精を解放することにした。少し世間からずれた者に特有の、持ち前の優しさからアデンがシュアンツアトネフクトウを慰め、もう帰っていいと促せば、彼女は氣をつけるように言った。魔王やクスルドウクのことだろう、大丈夫だ。何故ならここにいるのはハングトナピア山の神の加護を受けたハインリッヒがいるから。などとアデンはシュアンツアトネフクトウを安心させようとする。

「それ、違う。また別な恐ろしいこと、迫る、貴方達」

へっ、とアデンは間抜けに空気を漏らした。

「不吉な兆候、間もなく、訪れる、貴方達。それ、すごく近く」
アデンとハインリッヒはまた、顔を見合わせた。

第3章第22話 テラ達の西へ行く顛末2

太陽は見えない軌道を這い上がりながら、決して多過ぎない程度の光を地上へと振りまいていた。大地は土に染み込んでいた水分を大気に放出し始め、地表に蔓延^{はびこ}る野草や遠くの森あるいは道沿いで思い出したように生えている樹木は、その枝葉を押し広げより一層と緑を深めた。動かなければ空に出来た黒い染みと勘違いしてしまいそうな小鳥達の影の粒が遠く、右に左に旋回を繰り返していた。

地上にある全てのものが、大気にある全てのものが、つまりは目に映る全てのものが輝いている。遙か先は道の果てから、旅だった村の風景に至るまで。そしてどうしようもない不安と諦めの迷いに、危うく押し流されてしまいそうになりながらも懸命に踏ん張ったあの、まだ明けきらない今朝に至るまで。全てのものに、太陽の恩恵が降り注ぐ。彼女を取り巻く世界と、過去からまだ見ぬ未来とがその恩恵を受けて輝きを放つ。ありとあらゆるものが、私達の旅立ちを祝福している。テラは確信に似た気持ちで、そう感じた。

これはきつと神の計らいに違いない。彼女は自分が今ここに在る意味の解釈を、何度も、ゆつくりと噛み締めながら、反芻^{はんすう}した。確かめるように、有り難みを味わうように、信念へ擦り込むように。これは父なる主^{あるじ}が私に与えてくださったチャンスなんだ。彼女の胸は忽ち^{たちまち}の内に、確信めいた新たな光の液体が底から沸き上がった。光は異様さとも言える輝きを帯びて、彼女の瞳から零れ、放たれた。乙女は、誰にも聞こえない声で——正確には天上のとある者だけ聞こえるように、祈りを呟いた。

主よ、あなたの御計^{みはか}らい、深く感謝いたします。私の生命の続く限り……私の魂の続く限りあなたのために祈りを捧げます。そしてこの心臓が鼓動を打ち続ける限り、この使命に尽くすことを誓います。

幼い頃から姉妹には、苦痛を伴う悪夢があった。それは彼女達の

過去に深く残った傷だ。彼女達の積年の願いは、その悪夢からの脱出。テラはついにその手掛かりのための手掛かりとも言うべき幻影の感触を、手の平で感じた気がした。この概念は、彼女を躍り上がりそうな程の興奮をもたらした。そして彼女の人生の半分以上を占めるその暗い影を塗り込めてこう思う。――これはきつと神の計らいに違いない――

南方のとある島の波ぐらい穏やかな光の中で、ふと、テラが後ろを振り返れば、まだ覚束ない手つきで馬の手綱を操る男がいる。彼はテラの祖父から譲られた馬に乗っている。と言うよりは馬に乗せられている。全身を淡い栗毛で包まれ、鼻筋のみが白味がかった馬だ。初心者には丁度良かろう、とタリテが言っていたとおり、その馬は穏やかだった。まだぎこちない手つきで手綱を握るその男の姿はテラの口角を緩ませた。ただ、険しい皺を眉の間に寄せながら、静かにじつと前を見据えているその眼差しは、テラに頼もしくさせるのだった。

栗毛の馬に跨った男の顔は、この長閑な春の日差しにもかかわらず浮かなかった。その理由の1つとして、馬が上手く扱え切れていないということ。大分慣れてきてはいたものの、時々馬が乗り手を侮っているかのように立ち止まろうとしたり、あるいは逆に駆けだそうとしたり、はたまた道から逸れて密集した叢くさむらの中へと入って行くこととした。そしてまた1つには、この神の戦士が尻の皮は、半日も鞍の上で揺すられ擦れ続けていたために、真っ赤な悲鳴を上げていた。痛みは大腿の内側までに及んだ。ただそれはそれとして、デイベスの眉間に最も深く皺を刻んだことは、出発の前日にタリテから宣告された内容だった。それが耳から頭へと入り込んできて以来、固まったコールドタルの粘性で頭の内部でこびりつき、少しも離れるそぶりさえみせなかった。

——およそ、元の世界に戻る術はない——

この世界の夜闇は暗く、そして深い。この世界で明かりを人間に供給し得る物とは言えば原始的な炎の他になく、圧倒的な闇の海原でのそれは、心許ない明かりをか細く燈したにすぎない。上記の台詞をタリテがデビスに言って聞かせたときも、暗い部屋で蠟燭ろうそくの明かりを挟んでのことだった。これがあの地域一体での知識人、あるいは多少魔術の心得のある者、物知りな年寄り達などから情報を集め、タリテが導き出してくれた結論だった。

——だが、希望を捨てては行かん。王都ウィーラントへ行けば、神殿に大神官様がいらっしゃる。また、ウィーラント王国直轄の魔術院もある。そこへ行けば、また何か分かるかもしれん——

顔を弱い明かりの中に浮かび上がらせながら、老貴族はそう言っただけで覆われた手で紙包みを手渡した。それは2通の便箋……

——これはウィーラント大神殿の神官連に縁の（ゆかり）のある私の知人、キャプス侯爵に宛てたものとウィーラント王立キングダム魔術院に勤めている甥の娘の夫に宛てた紹介状だ。これらは君が故郷へ帰るための手助けになるかもしれん——

もし……、長い沈黙のあとの言いかけたその言葉を老人は飲みこんだ。胸の内に無理矢理に嚙下えんかされたそれは、皮膚の余り気味な細い喉には大き過ぎる印象をデビスに与えた。今にして思えば、タリテはすでにそのとき、テラの破天荒な行動を見抜いていた可能性も捨てきれない。もし私の娘がついて行くようなことがあれば……。ひよつとしたら、そう言いおうとしていたのかもしれない。

デビスは思う。テラの追加は、あのときの状況が状況だけに、断ることを考えもしなかったしそうする機会も失われてしまった。上手い具合に押し付けられてしまったのかもしれない。思えば女と一緒に戦場で戦ったことなんてないじゃないか。一緒に旅をしていれば、色々な面倒事がでてくるに違いない。そんなことで大丈夫なんだろうか？ そうか、もしだめならば、彼女をあ爺さんの家に帰すだけの話だ。なにもクヨクヨ悩むことじゃない。そう、全然大

したことじゃない。……それにしてももう1人の方はどうなんだ？
まだ若すぎる気もするが。つまるところ、女と子供を引き連れて
意味のわからない魔王って奴を倒しにいかなくちゃならない。これ
は一体どこのお伽話だったんだ！これがミツシヨンだと言うのか
！ 契約のとき、こんなことは少しも聞いてなかったぞ！ つまり
俺は、詐欺師にうまいようにされたってことか。……まあ、いい。
やってやる。さっさとこんな仕事は終わらせて地球に帰ってやる。
何としても、その方法を探すんだ。そしてベアトリア……。また
君に会うんだ。

別な星からやって来た傭兵が、馬の上で尻の痛みを堪えつつ己の
運命に悪態をついているころ、その後ろを15秒ほど遅れて、前途
の2者と同じく馬に跨がっている者がいる。騎士としても一端の貴
族としてもあと数年足りていない若者が、タリテがデイビスの世話
役として選んだユーリスだ。

とても遠い場所から来た男の旅の伴侶になつてくれるか、と打診
を受けたのは3日前のことだ。ユーリスが剣術修業と称してタリテ
に教えを受けるため、近くの叔父の家に身を寄せているときのこと
だった。

元より彼の噂は聞いていた。大した事件の少ない田舎ことだ。多
少なりとも奇異なことはすぐに広まる。タリテ男爵の孫娘が真つ裸
の神の使者を連れて来たらしい、という噂は有ること無いこと諸々
を含め、彼の耳にまで届いていた。

しかしながら、その彼の存在と、何故自分が指名されたのかとい
うことと、この話自体とが信じられなかった。こんな話を胡散臭く
思わなかったと言えば、そいつは救いようのないお人好しか偽善者
だ。

そして彼はついて来た。怪しげな話に煙る彼の心を突き動かした

のは、剣の技を教わったタリテへの恩返しのためでもなければ、大いなる神とその使命への義務感からといった訳でもない。息もできない程行き詰まった現状を打開する野心がためだ。

そしてあの人も一緒だ。ユーリスは意気揚々と先陣を進む女性を透明なブルーの瞳に映す。透き通る青空の下で、若者の心の繊細な部分を淡い炎が焼いた。

こうして彼ら若き渡り鳥達は、それぞれの影と希望、野望をその両翼に載せて、西を目指して羽ばたいて行く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6300b/>

剣と弾丸の歌

2011年11月13日09時35分発行